
蒼穹の艦隊～第二独立機動艦隊出撃せよ～

天地銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹の艦隊〜第二独立機動艦隊出撃せよ〜

【Nコード】

N5339P

【作者名】

天地銀河

【あらすじ】

2020年、日本はついに中国と戦争になった。「Z計画」のために建造された戦艦・空母を主幹とする機動艦隊が存在した。その名は「新連合艦隊」対馬沖で中国軍艦隊と艦隊戦中に突然の核ミサイルにより艦隊は時空を越え昭和12年の日本へとタイムスリップしてしまう。日本を破滅から救うため艦隊は大日本帝国軍として戦うことを決意する。はたして日本を破滅から救えるのかどうぞご期待ください。

第1話 プロローグ

2014年、日中関係は悪化の一途をたどっていた。中国との戦争に備え憲法第9条の改正、自衛隊は名を変え陸上自衛隊は国防陸軍、海上自衛隊は国防海軍、航空自衛隊は国防空軍と名を変えた。さらにアメリカ・韓国・イギリス・フランスと軍事同盟を締結した。これに対し中国も北朝鮮・ロシアと軍事同盟を締結し互いを牽制した。

2015年、日本はある計画を発動させた。その名は「Z計画」70年振りに戦艦・空母の建造および新型イージス艦・補給艦・輸送艦の建造計画であった。

この物語は新型戦艦・空母が竣工したばかりの2020年から始まります。

第1話 プロローグ（後書き）

どうも作者の天地銀河と申します。この小説はいろいろと考えられてできた人生初の小説なので最後まで書ききれぬのか不安ですが精一杯頑張っていきたいと思えます。始まったばかりですが御意見・御感想お待ちしております。

第2話 Z計画（前書き）

3日に1章ずつ投稿していきたいと思います。

第2話 Z計画

2020年 呉軍港

？

「これがわが海軍が建造した戦艦か。」

？

「はい、『Z計画』において建造された戦艦です。」

？

「そうか、これでわが海軍は戦えるな。」

隊員A

「如月中将、有賀大佐、幕僚長が呼びです。」

如月

「了解した。有賀行くぞ。」

有賀

「了解です。行きましょう。」

呉 統合参謀本部

二人はある部屋に着くと軽くノックした。

如月

「失礼します。如月大悟中将入ります。」

有賀

「同じく有賀夏樹大佐入ります。」

原田幕僚長

「うむ、入れ。」

二人は中に入ると目の前には原田幕僚長がいた。

如月

「幕僚長、ご用事とは何でしょうか。」

原田幕僚長

「うむ、如月中将には新たに建造された戦艦・空母を主幹とする機動艦隊の艦隊司令および艦隊旗艦の艦長を、有賀大佐には艦隊副司令および旗艦の副艦長をそれぞれ会議で決定した。」

如月

「光栄であります。」

有賀

「同じく光栄であります。」

原田幕僚長

「あと、旗艦に配備される砲雷長、航海長、機関長も紹介しておくどうぞ入れ。」

？

「失礼します。」

入ってきた3人を見て如月はえっと思った。なぜなら3人はうら若

き美女達であつたからである。

如月

「幕僚長、彼女たちが…」

原田幕僚長

「そつだ左から砲雷長の逢沢絵理香、航海長の森下飛鳥、機関長の宮下理永、全員階級は中佐だ。」

逢沢

「砲雷長の逢沢絵理香中佐であります。これからもよろしく願ひします。」

森下

「航海長の森下飛鳥中佐であります。一生懸命頑張りますのでよろしく願ひします。」

宮下

「機関長の宮下理永中佐であります。これからもよろしく願ひします。」

如月

「艦隊司令の如月大悟中将だ。こちらこそよろしく。」

有賀

「艦隊副司令の有賀夏樹大佐です。こちらこそよろしく。」

原田幕僚長

「自己紹介が終つた所で君達5人には明日に新型戦艦の性能テストを行つてもらいたい。」

有賀

「どうして進水式の時にしなかったのですか？」

原田幕僚長

「それはな新型戦艦の存在自体が中国どころが同盟国にすら知らせていないからだ。」

如月

「事実の戦艦大和みたいだな。」

原田幕僚長

「そうだ、これで話は終わりだ、帰ってもいいぞ。」

如月以下4人

「「「「失礼しました。」」」」

2月17日 呉ドック

戦艦「暁」ブリッジ

如月

「機関始動用意、ドック注水が完了後機関を始動する。」

宮下

「こちら機関室からブリッジへ、機関異常なしです。」

ドックでは両脇から海水が勢いよく注がれた。

10分後ドックの注水が完了しドックの扉が開いた。

桜井（電側長）

「CICよりブリッジへ、ドック注水完了とのことです。」

如月

「機関始動、両舷前進微速および光学迷彩展開。」

森下

「了解、光学迷彩展開！」

一応光学迷彩について説明しておく。光学迷彩は核エンジンのエネルギーを利用することで展開可能な特殊兵装でありレーダーやソナーさらに熱探知も無効化できる。短所は核エンジンを搭載しないと展開不可能である。（イージス艦にはエネルギーパックを導入することで可能になる。）話が少しずれた。

戦艦暁は微速しながら光学迷彩が展開された。

ドックから出るとブリッジには安堵の空気が流れた。

如月

「航海長、進路をテスト海域の伊予灘に向けて最大全速。」

森下

「了解、最大全速。」

戦艦暁は速力50ノットで伊予灘へと進路を向けて海上を進んでいた。

しばらくしテスト海域の伊予灘へと到着した。

如月

「よし、光学迷彩解除。」

森下

「了解、光学迷彩解除。」

光学迷彩が解除されると海上に突然巨大な船体が現れた。

早速テストに入るために如月中将はCICへと向かった。

CIC

砲雷科クルー

「艦長が入られるぞ。」

それを聞いたCICのクルーは全員立ち上がり如月中将に敬礼した。

如月中将は敬礼し作業に戻るようと指示を出し艦長席に座った。

艦長席に座るとテスト用の紙を取り出し艦内放送を入れた。

如月

「艦長だ。これよりテストを行う。総員配置に着け。」

放送が入ってまもなく艦内が騒がしくなった。

桜井

「艦長、司令部より入電。テストを開始せよ、以上です。」

如月

「よし、これよりテストを始める。異常があればただちに報告せよ以上だ。」

艦内放送でそう知らせるとテストを開始した。

テスト内容は航行テストや電子テスト、ミサイルなどの攻撃兵器などである。

テストは何時間もかかり、周りが暗くなり始めた頃ようやく主砲および副砲のテストとなった。

如月

「よし、これより主砲および副砲を行う。砲雷長頼むぞ。」

逢沢中佐は頷き

逢沢

「砲撃戦闘用意！砲術長ターゲットブイをターゲットaに登録！」

遠藤（砲術長）

「了解、ターゲット登録完了！主砲および副砲データ入力完了！ターゲットAロックオン！」

暁の全主砲および副砲が旋回と砲身が同時に動き目標のターゲットブイを向いた。

遠藤

「主砲、副砲システムオールグリーン！主砲、副砲撃ち方よし！」

逢沢

「主砲、副砲撃ち方始め！」

主砲を撃つためのトリガーを右手の人差し指で、副砲のトリガーを左手の人差し指で思いっきり引いた。

ドオオーーン！！

60口径66?3連装5基15門の主砲、60口径30、6?3連砲2基6門副砲、計21門がけたたましい音を立て周囲に響き渡った。

主砲、副砲から放たれた砲弾は弧を描きながらターゲットブイに向かっていく。

ＣＩＣ内では、モニターを通じて見ている。

CIC内のクルーが見ている中、突如ターゲットブイがあった海域から21本の水柱が立った。

ターゲットブイに命中したためか金属片などが浮かんで確認できる。

桜井

「ターゲットa消滅を確認！」

この瞬間、ECから歓声が上がリ、75年振りの戦艦復活を喜び合っ
た。

有賀

「艦長やりました！これで暁も艦隊旗艦として配属されますね！」

如月

「ああ、そうだな暁も海軍の戦艦として活躍できるだろう。」

如月中将は喜びながら紙にテストの結果を書き入れた。

それが終わると、艦内放送を入れ

如月

「艦長からブリッジへ、テストは無事終了した。進路を呉へと向けて両舷最大全速あと光学迷彩展開せよ。」

森下

「了解、両舷最大全速そして光学迷彩展開！」

暁は光学迷彩を展開、呉に向かって50ノットで進んでいった。

この報告を受けた本部は結果に満足し、早速配備先が考えられた。

第2話 Z計画（後書き）

なんとか第2章が投稿できました。この章を投稿するために3回も本文が消滅する事が起こりました。とても苦労しました。次章ついに艦魂が登場します。次回『艦魂に出会った日』お楽しみください。

第3話 艦魂に出会った日（前書き）

登場人物紹介

如月大悟

身長182？

年齢24歳

階級中将

本作の主人公で海自始まって以来のエリートでその才能から新設艦隊、新連合艦隊の司令官となる。過去に飛ばされてしまった時日本を破滅から救うために革命を行い対米戦を有利にしているとする。

有賀夏樹

身長168？

年齢21歳

階級大佐

本作のヒロインで何でもできる秀才で、最後の戦艦大和の艦長有賀幸作の孫の娘で形見の指輪を持っている。如月大悟に淡い恋心を抱いている。

逢沢絵理香

身長169？

年齢22歳

階級中佐

戦艦暁の砲雷長で百発百中の腕を持ったため、海自内は彼女のことを「一撃必中の戦姫」と呼んでいる。

森下飛鳥

身長170？

年齢22歳

階級中佐

戦艦暁の航海長で、戦艦大和の名艦長森下信衛の孫の娘である。名艦長の孫娘であるためか操艦の腕は凄く「操艦の女神」と呼ばれている。

宮下理永

身長171?

年齢22歳

階級中佐

戦艦暁の機関長で機関についての知識は天下第一であり、そのため機関長になった。

第3話 艦魂に出会った日

2月20日

戦艦暁 第1甲板

如月

「ふー、やっと終わったなあ。」

有賀

「そうですね。」

二人は何気ない話をしながら第1甲板まで歩いて行った。

すると、有賀が

有賀

「艦長、2番砲塔に誰か立っています！」

如月

「あつ、確かにあいつ何しているんだ？」

二人は誰か立っている2番砲塔へと向かった。

辿り着くと

如月

「誰だ、そこで何をしているんだ！」

その人が振り向くと二人はえっと思った。その人はだいたい15、

6歳の少女で髪は黒く、肩の辺りまで真っ直ぐに伸びており身長は
だいたい150?くらいだったか。

?

「私が見えるんですか!」

二人は首をかしげた。見えるも何も目の前にいるのだからと思って
いった。

如月

「何言ってるんだ!お前は!」

?

「私はこの戦艦の艦魂『暁』です。」

二人は互いの顔を見た。なぜなら艦魂とかは小説やマンガの世界だ
けだと思っていたからであった。

如月

「それなら、お前が艦魂である証拠を見せてみる!」

暁

「分かりました。」

そういうと暁は二人の頭上を指をさした。

すると

コワーン

如月・有賀

「「痛った――！！」」

二人の頭上からタライが降ってきた。

暁

「どうですか？これが艦魂の力ですよ。」

如月

「分かった。お前が艦魂である事を認めるよ。」

暁

「分かればいいのよ。」

こうして俺たちと艦魂の初めての出会いだった。

第3話 艦魂に出会った日（後書き）

作者

「ふーっ、1日ずつ投稿ができたぞ。」

暁

「よくがんばりましたね。」

作者

「まあ、アイディアがたくさんありますからね。」

暁

「そろそろ、次回予告をお願いします。」

作者

「ついに、日中開戦のきっかけが起きます。次回『衝突』お楽しみください。」

第4話 衝突（前書き）

登場人物紹介

暁（暁型戦艦1番艦）

身長157？

年齢10歳半ば

如月達と出会った最初の艦魂で性格は大人しいために後に登場する個性の強い妹たちに手を焼くことも多い。

第4話 衝突

テストから数日があったある日

暫定で第1護衛艦隊旗艦として配属された暁と僚艦である最新鋭イージス艦大電、蒼電、飛電、祥電、そして日本初の原子力空母炎龍、水龍、雷龍が訓練として日本海にいた。

C I C

如月

「さて、全員その場で待機、各艦の準備ができ次第訓練を開始する。」

一同

「了解！」

如月中将は手に持っていた資料を見始めた。

その時

荒木（水雷士）

「！艦長、アクティブソナーに反応！左舷80度、距離12？より接近中！こ、これはキロ級潜水艦です。」

如月

「潜水艦だと！ここは我々の領海だぞ！まさか領海侵犯艦なのか！」

荒木

「可能性はあります！」

如月

「各艦に通達！訓練は中止！全力をもって潜水艦を沈めろ！」

暁

「しかし、彼らは一体何をしたいんでしょうか？」

如月

「まったくだ！水雷士！魚雷注水音は！」

荒木

「まだ確認できません！」

如月

「水雷士！潜水艦に向けてピンカーで警告しろ！」

荒木

「了解！」

まもなくバウ・ソナーから連続してピンカーが発せられ、海中に鮮やかな音が響き渡った。

だが、まったく反転する気配もなく応答すらない。

荒木

「だめです！まったく反応しません！」

如月

「警告無視か、しょうがない、対潜戦闘用意！」

逢沢

「了解！対潜戦闘用意！」

艦内が一気に騒がしくなり、警鐘が鳴り響いた。

荒木

「！艦長、キロ級潜水艦さらに確認！数は前方に4隻確認！」

如月

「なんだと！」

荒木

「さらに魚雷注水音確認！あつ！魚雷発射確認！扇形に発射しました、数は合計30発。」

如月

「まずい！このままでは本艦、空母に当たってしまう！」

暁

「そんな、炎龍さん！水龍さん！雷龍さん！」

如月

「この艦にも、空母にも当てらせるか！砲雷長！3連装高角砲連射モードで迎撃開始！」

遠藤

「了解！3連装高角砲迎撃用意！連射モード、データ入力完了！システムオールグリーン！迎撃用意よし！」

如月

「高角砲、迎撃開始！」

遠藤

「迎撃開始！」

左舷側の10基の高角砲が稼働し砲身が下がると

バアアーーン！バアアーーン！バアアーーン！バアアーーン！
ン！

一斉に迎撃を開始し、さらに3隻の空母、4隻のイージス艦の左舷からCIWSが火を噴き迎撃している。

？

「えええーい、落ちろーい！」

そう言いながら刀を振り回しているのは原子力空母炎龍の艦魂、炎龍であった。

そうすると

ドガッ！ジャボーーン！

放ったCIWSが炎龍に接近する魚雷4本をすべて迎撃した。

炎龍

「ざまあ見る！こんなんでも当たる炎龍様ではない！」

余裕を見せたのか右舷のCIWSが姉妹艦に向かった魚雷を狙って

撃った。

案の定、炎龍と空母2隻のCIWSにより空母に向かった魚雷はすべて迎撃した。

すると炎龍の甲板に二人の艦魂が瞬間移動してきた。

？

「ありがとう、炎龍お姉ちゃん。」

見かけは13、4歳位の幼さが残る艦魂で髪は黒く短い。

？

「ナイスフローだよ、姉貴。」

この艦魂は15歳位の少し大人びていて髪型はポニーテールだった。

前者は炎龍型空母2番艦水龍の艦魂、水龍、後者は炎龍型空母3番艦雷龍の艦魂、雷龍であった。

炎龍

「まあ、こんなの朝飯前だよ。」

水龍

「けど、暁司令の方の雷撃はどうするの？」

炎龍

「大丈夫だ、あんな魚雷ごときで沈めれるものか、すぐに迎撃されるだろう。」

そういつて余裕を見せる炎龍。この言葉道理に暁に向かう魚雷はすべて迎撃された。

暁 CIC

如月

「なんとかすべての魚雷を迎撃できたな。」

荒木

「！艦長、注水音確認、数は6」

如月

「くつ、迎撃してもまた来るか！やむを得ん！砲雷長、アスロツク用意！発射弾数2発」

逢沢

「了解！目標キロ級潜水艦、ターゲットロックオン用意！」

遠藤

「了解！ターゲット登録完了！アスロツクデータ入力完了！」

逢沢

「アスロツク発射！サルボー！」

ミサイル発射ボタンが押された瞬間、轟音と白煙と共にアスロツクが放たれた。

アスロツクが放たれたと同時にキロ級から魚雷が発射された。

荒木

「魚雷発射確認！来ます！」

如月

「C I W S 起動！高角砲と同じ角度で撃て！」

遠藤

「了解！C I W S データ入力完了！システムオールグリーン！C I W S 迎撃よし！」

如月

「C I W S 撃て！」

遠藤

「C I W S 発射！」

左舷の全C I W S が稼働し砲先が魚雷に向くと迎撃を開始した。

一方、発射されたアスロツクはキロ級の前で弾頭とランチャーに分かれ、弾頭はパラシュートでゆっくり海中に入った。

海中に入ったアスロツクはパラシュートを切り離し、対潜ソナーでキロ級に向かっていく。

そして、キロ級は回避しようとするが間に合わずに2発とも直撃し、船体が真っ二つに折れていき沈んでいき、海底に届く前に水圧に耐えきれず圧壊した。

荒木

「圧壊音確認！キロ級の撃墜に成功しました。」

如月

「魚雷は！？」

荒木

「すべて迎撃しました。」

CIC内にいたクルーは全員ほっとした様子になった。

如月中将は額に垂れていた汗を袖で拭くと席によりかかった。

如月

「電側長、ほかの艦はどうなっているのだ！」

桜井

「本艦より先にすでに迎撃しており無事です。」

如月

「だろうな、最新鋭の艦艇達だからなあ。」

安心した様子だが桜井少尉の次の言葉で如月中将の顔が青ざめた。

桜井

「艦長、統合参謀本部より入電、ただちに訓練を中止し呉に帰還せと、また艦隊司令如月大悟および副司令有賀夏樹は帰還後統合参謀本部へ出頭せよとのことですよ。」

有賀

「艦長、まさか・・・」

如月

「懲戒免職かもな・・・」

ふたりは不安げな顔だ。

如月中将は命令通りに帰還するため艦内放送を取り、

如月

「艦長より、ブリッジへ。両舷前進全速、進路国防海軍呉基地、そして光学迷彩展開」

宮下

「了解！両舷前進全速——く！」

暁と他艦は光学迷彩と展開し呉基地を目指した。

第4話 衝突（後書き）

炎龍

「おい、作者！3日に1章の宣言はどうした。」

作者

「それは、この頃忙しくて投稿ができなかったのだよ。」

炎龍

「それならいいけど、今度こついうことがあったら、斬るわよ！」

作者

「反省しております。」

水龍

「そんなことより次回は？」

雷龍

「そうですね、早くしてください。」

作者

「はいはい、分かりました。さて如月達はどうなるのでしょうか？
次回「宣告そして・・・」お楽しみに。

第5話 宣告そして・・・（前書き）

登場人物紹介

炎龍（炎龍型原子力空母1番艦）

身長160？

年齢18歳位

日本初の原子力空母1番艦という誇りを持ちなおかつ自分たちが最強だと信じて疑わない。

水龍（炎龍型原子力空母2番艦）

身長151？

年齢13歳位

少し幼さが残っていて姉である炎龍を1番慕っている。髪型は黒く短い。

雷龍（炎龍型原子力空母3番艦）

身長156？

年齢15歳位

少し大人びていて姉の炎龍を『姉貴』と呼んでいる。髪型はポニーテール。

第5話 宣告そして・

数時間後

ブリッジ

如月中将は不安げな顔で艦長席に座っていた。

航海科クルー

「艦長、大丈夫でしょうかね？」

航海科クルーは艦長の様子を見て森下中佐に小声で話しかけた。

森下

「大丈夫なわけないでしょう！彼は海自始まっての生粋のエリートであるからこの事件で艦を降ろされるかもしれないんだから、どんな人でも不安でしょう！」

航海科クルー

「しかし、なんで彼らは領海侵犯してきてこちらは警告して、けど彼らは無視してそれで攻撃してだから正当防衛で沈めたのに罰せられるんですか？」

森下

「馬鹿！だからといって相手は原潜でしかも攻撃したといって沈めてしまったらこれこそかなりの問題だから艦長の責任も大きいからだよ。」

航海科クルー

「なるほど・・・」

すると航海科クルーの一人が声を上げた。

航海科クルー

「呉基地まであと1キロです。」

森下

「分かったわ。」

森下中佐は如月中将の所に行き

森下

「艦長、間もなく呉です。指示を」

如月

「分かった、両舷前進微そーく！進路そのまま！」

森下

「アイ・サー！両舷前進微そーく！進路そのまま！」

航海科クルー

「アイ・サー！両舷前進微そーく！」

速力を変えるレバーが操作されると速力が低下し艦首付近の波が小さくなる。

そして、しばらく接舷作業に移っていたが

航海科クルー

「接舷作業終了しました！」

如月

「こちら艦長了解」

返事をする受話器を置き、艦長席から立った。

如月

「さて・・・行くか・・・」

艦長席脇にあらかじめ置いていた荷物を持った。

森下

「艦長・・・」

如月

「航海長、短い間だったが世話になった。艦の事を頼んだぞ。」

そついうとブリッジから出た。

暁

「如月さん」

如月

「暁、短い間だったがいろいろ世話になったな。」

有賀

「艦長！暁！」

如月

「有賀か、他の人に別れの言葉をいつてきたか？」

有賀

「・・・ええ。」

如月

「有賀、行くか・・・」

二人はタラップに行く間あらゆるクルーが敬礼し二人は返事していた。

そして、タラップをゆっくり降りながら暁を見ていった。

やはり二人にとって艦を降ろされるのはつらい。

そして、岸壁に降りるとゆっくり警務隊がいるであろう方向に向かった。

けど、

？

「遅いです、二人とも。」

如月自身は聞いたことのある、有賀は聞いたことのない声を聞いて頭の上にはてなマークが浮かんだ。

さらにいるはずの警務隊がないことに気づき辺りを見回したがいなかった。

かわりにいたのは黒い車と護衛用の装甲車、そしてその近くにはい

かにも上官らしい人と艦長服を着た人物が一人。

？

「二人とも幕僚長を待たせるなんて・・・」

如月

「音葉、なんでここに・・・」

音葉 琴音大佐

「まったく、なんでじゃないでしょう、二人とも幕僚長に謝って！」

二人はその人物に近づくと気をつけの姿勢を取り慌てて敬礼した。

如月

「失礼しました！原田幕僚長！てっきり警務隊が来るのだと思いました。」

有賀

「幕僚長！私も警務隊が来るのだと思っていました。」

原田幕僚長

「警務隊？ああ、あの件については正当防衛として片付いた。」

如月

「しかし私の判断のせいで戦争になるのでは？」

原田幕僚長

「君が原潜を沈める前にすでになりそうになっている。とりあえず続きは車の中で話す。乗りなさい。」

二人は言われた通りに車に乗り込んだ。

原田幕僚長は助手席に音葉大佐は運転席に座ると車は動き出した。

車内

原田幕僚長

「先ほどの話だが中国との戦争の可能性だが十中八、九の状態でありそうだ。」

如月

「なぜでしょうか？」

原田幕僚長

「今朝、アメリカの衛星が中国の艦隊が出撃したのを確認した。艦隊の規模は空母5隻を含む大艦隊だ。」

有賀

「それって警戒のためではないでしょうか？」

原田幕僚長

「艦隊の中には強襲揚陸艦が確認できた。警戒のために揚陸艦を出すわけではない。」

如月

「そうなるの上陸作戦の可能性が？」

原田幕僚長

「うむ、しかしアメリカの第7艦隊が圧力をかけてくれているおかげで奴らは中国領海内に留まっている。けど奴らはなにかを企んでいる。我々としてはある事をしなければならぬ。」

如月

「ある事とは？」

原田幕僚長

「それはあの建物で話そう。」

車はある建物の中へと入って行った。

その建物は基地司令室などが置かれている建物だが幕僚長がいるためか1個小隊ほどの小銃を持った兵士達が厳しい表情で歩哨していた。

4人は車を降りると無言のまましばらく歩き会議室と書かれた部屋に入った。

会議室

会議室内には丸いでかいテーブルとこれを囲むように置かれたイスがあったが4つを残してすべて艦長服を着た人物や国防海軍幹部の人が座っている。

3人は空いている席に座った。

原田幕僚長

「皆、待たせてしまってますない。さて、君らを呼びだした件について説明しよう。手元の資料を見てくれ。」

如月中将は手元の資料を取る。

資料には極秘と書かれており表紙をめくると『New Grennd Freetの編成について』と書かれてある。

如月

「New Grennd Freet? 新・連合・艦隊って?」

さらにページをめくると艦隊編成について書かれてあった。

原田幕僚長

「その資料に書かれてある『New Grennd Freet』とは新連合艦隊の事だ、『Z計画』において建造された艦艇が竣工した今、その艦艇でのみ編成された艦隊の事である。」

第5話 宣告そして・・・（後書き）

作者

「ふっーやっ」と書き終えたぞ。」

暁

「しかし、艦長達は一体どうなるのでしょうか？」

炎龍

「そっだ、艦長がいなくなったらこの物語は成立しないぞ！」

作者

「それは次回で明らかになります。次回「新連合艦隊編成セリ」お楽しみに！」

第6話 新連合艦隊編成セリ（前書き）

かねてよりの予定を変更して二日に1話ずつ投稿していききたいと思っています。

第6話 新連合艦隊編成セリ

原田幕僚長

「諸君らは知っている人がほとんどだが中国に対抗しての増強計画『Z計画』が表向きだが真の目的はその建造された艦艇を用いての艦隊結成それが新連合艦隊である。」

ざわざわと声が聞こえてくる。

原田幕僚長

「そしてその艦隊編成の詳しい内容は資料を見てくれ。」

如月中将は資料を捲り内容を見た。

艦隊編成

旗艦 暁

戦艦 暁 不知火 太陽 召雷

イージス戦艦 慶良間 佐渡

空母 炎龍 水龍 雷龍 電龍 風龍 桜龍 鳳龍 聖龍 轟龍

機龍 鋼龍 海龍

イージス艦 大電 蒼電 飛電 祥電 天電 鳳電 龍電 隼電
海電 雲電 妙電 閃電 鋭電 撃電 連電 剣電 紗電 鷹電
風電 瑞電 轟電 嶺電

輸送艦 根室 釧路 網走 上川 空知 十勝 日高 宗谷 石狩
後志 胆振 渡島 檜山

以上

有賀

「艦長、これって・・・」

有賀大佐は小声で如月中将に聞いた。

如月

「俺も『Z計画』の事を知っていたが、まさかな。」

原田幕僚長

「この艦隊の艦隊司令は如月大悟中将、副司令は有賀夏樹大佐と会議によって決定された。」

二人

「えっ？」

原田幕僚長

「ではこれで会議を終了する。質問のある奴は後で来い。以上解散だ。」

解散の指示が出ると二人は資料を持って立ち上がり質問がないためとつと外へ出た。

外

外に出ると御丁寧にも車が用意されており運転手が手招きし乗るよ

うに言った。

二人はそれに従い乗り込もうとすると後から音葉大佐が走ってきた。

音葉

「ちょっと、置いていかないでくださいよ如月先輩！」

如月

「悪い！ちょっと乗組員を心配させえいるからな、急いでいた。」

音葉

「いつもの如月先輩ですね、随分乗組員思いの艦長だって言われているから。あつ、運転手暁の後でいいから慶良間までね。」

如月

「音葉！慶良間って、なぜ？」

音葉

「その話は車の中で」

そういうと助手席に座り、車を出すように指示した。

車内

音葉

「お久しぶりです、如月先輩。」

有賀

「先輩って、艦長！」

如月

「悪い、音葉の事を言っていなかったな、こいつは俺の一期下の後輩音葉 琴音だ、随分成績の良い後輩だ。」

音葉

「そんなことないですよ先輩」

如月

「しかし、なんで慶良間に？」

音葉

「ああ、それなら私は一昨日前に慶良間の艦長になったの。」

如月

「へえ、すごいな」

そついう話をしていると暁が見えてきた。

有賀

「艦長！そろそろ着きますよ！」

如月

「ああ、そうだな」

二人は荷物を持ち降りる準備をする。

車はタラップ前で停車した。

二人は降りると音葉大佐の方を向き

如月

「じゃあな音葉、互いに頑張ろうな。」

音葉

「ええ、じゃあね。」

二人は車が去るのを見るとタラップを登り甲板に上がった。

すると作業していた航海科クルーの一人が二人を見つけ驚いた。

航海科クルー

「如月艦長！？有賀副長！？」

その声甲板近くのクルー達が二人に気づき驚いた表情になった。

如月

「悪いがこれ頼む」

有賀

「ついでにこれも」

荷物を一人のクルーに渡す。

航海科クルー

「艦長達は確か警務隊に連行されたのでは！？」

如月

「それは不問になった。とりあえず幹部達を10分後に士官室に集めてくれ。重要な話がある。」

そういうと二人は艦内に通じる扉を開け艦内に入って行った。

10分後

士官室

集められた全員は席に座っており二人が入ってくると全員驚いた表情になった。

逢沢

「艦長！よく戻られましたね。」

森下

「やはり如月艦長が一番です。」

宮下

「有賀副長も戻られたことだし良かった。」

逢沢

「ところで艦長！なぜ我々を呼び出したのでしょうか？」

如月

「ああ、それなら幕僚長から指令が出てな。」

森下

「指令？また訓練とかでしょうか？」

如月

「いや違う。実はこの艦を旗艦とする艦隊『新連合艦隊』が結成されたのだ。」

そついうと資料を机に置いた。

宮下

「しかし、すごい規模ですね。」

有賀

「そうでしょう。ちなみに艦隊司令は艦長が、副司令は私です。」

逢沢

「おめでとうございます。」

そう言っていると突然暁が瞬間移動してやって来た。

暁

「如月艦長！有賀副長！どうして？」

如月

「例の件は不問になったから。」

逢沢

「艦長、後ろの人誰？」

森下

「この艦のクルーの服を着ているけど見たことないなあ。」

宮下

「艦長、誰でしょうか？」

二人

「「見えるんかい！」」

暁

「あつ、私はこの戦艦の艦魂暁です。」

3人

「「「えっ」」」

そりゃ、私は艦魂ですと言われても実感が湧かない。

逢沢

「それなら証拠を見せてください。」

暁

「分かりました。」

そついうと指を鳴らすと

ヒューー、ゴテーン！！！！

3人

「「「痛ったー」」」

3人の頭の上からタライが降ってきた。

暁

「どうでしょうか？」

逢沢

「分かった、しかし痛いです。」

そういう事を話しているとまた誰かが瞬間移動してきた。

？

「お姉ちゃんおめでとう。」

？

「おめでとうだね」

？

「こらっ、太陽なんて口の聞き方を」

？

「まったく、暁司令の前でなんて事を」

？

「まあまあ、みんな落ち着いて」

如月

「お前ら誰だ？」

？

「申し遅れました。私は暁型戦艦2番艦不知火の艦魂不知火です。よろしくお願いします。」

？

「3番艦太陽の艦魂の太陽です。よろしく」

？

「私暁型戦艦4番艦召雷の艦魂の召雷です。どうかよろしくお願いします」

します。」

？

「慶良間型イージス戦艦1番艦慶良間の艦魂慶良間だ。よろしく。」

？

「おなじく慶良間型イージス戦艦2番艦佐渡の艦魂佐渡です。どうかよろしくお願いします。」

如月

「えー俺も言うべきか？新連合艦隊司令の如月大悟中将だ。こちらこそよろしく。」

有賀

「おなじく艦隊副司令の有賀夏樹大佐です。どうかよろしく。」

この3日後、中国のキロ級潜水艦が領海侵犯していてそれを発見したイージス艦が警告、それを無視し逃走を図ろうとしたところをアスロツクで撃沈。

これを知った中国は猛反発、これに対し日本は「領海侵犯してきた中国が悪い」と返答。

日本と中国が戦争になるのは時間の問題である。

第6話 新連合艦隊編成セリ（後書き）

作者

「やふゝやつと終わったぜ。」

不知火

「けど今回は少し強引なところもありますが？」

作者

「ソ、ソナコトハナイデスヨ、ゼツタイ」

召雷

「うん絶対だな。」

慶良間

「まったく何してるんだか？」

佐渡

「みんなやめてよ！作者が落ち込んでいますよ！」

作者

「ありがとう、佐渡・・・ってなんでみんな主砲を向けてるんですか？」

暁、佐渡を除く不知火以下3人

「『罰だからだあー』」「『』」

ド力カアアーーン

作者

「ぎゃあああ——」

一斉掃射により作者負傷

佐渡

「えっ、ええつと作者が負傷のため私が、ついに日中開戦が起きます。次回「宣戦布告セリ」御期待ください。」

第7話 宣戦布告セリ（前書き）

登場人物紹介

音葉琴音

身長171？

年齢23歳

階級大佐

如月大悟の一期下の後輩で成績優秀、新たに建造された慶良間の艦長に就任した。

ちなみに得意技はボディーブローからのアッパーさらに回し蹴りと如月から習った護身術である。

第7話 宣戦布告セリ

3月20日

中国から日本に対し正式に宣戦布告が届いた。つまりこれにより戦争状態になった。

同時刻、中国・北朝鮮から大量のミサイルが飛んできた。攻撃目標は……対馬

対馬海峡

？

「ええーい！落ちろーい！」

そう言うのは護衛艦はたかぜの艦魂、はたかぜである。

他の護衛艦と共に飛来するミサイルを落としていった。しかし

オペレーター

「左3度！魚雷6！避けられません！」

はたかぜ

「そんな……」

魚雷6発は真っ直ぐはたかぜに直撃、船体が真っ二つに折れた。

呉 統合参謀本部

オペレーターA

「対馬に中国軍艦隊接近！強襲揚陸艦も確認できます！」

オペレーターB

「第1防衛ライン突破されました！」

田畑参謀長

「幕僚長！このままでは対馬が占領されます！新連合艦隊の出撃許可を！」

原田幕僚長

「そうだな！舞鶴にいる如月司令に『22:00（ふたふたまるま）に對馬へ機動艦隊を出撃せよ』と連絡せよ！」

オペレーターC

「は、はい！」

舞鶴

暁 CIC

オペレーターD

「如月司令！幕僚長より『22:00に對馬へ機動艦隊を出撃せよ』との連絡です！」

如月

「そうか！10分後に各艦の艦長を会議室に集合させろ！」

10分後

会議室

如月

「君達を呼んだのは、ついに中国が宣戦布告し対馬に艦隊を出撃してきた。」

少しだがざわざわと声が聞こえた。

如月

「さらに艦隊の中には強襲揚陸艦が含まれている。」

音葉

「それはつまり対馬への上陸の可能性があるんですね?」

如月

「そうだ、上陸されたらあつという間に制圧されてしまう。そのため各艦の最優先攻撃目標を強襲揚陸艦にしてくれ。以上各艦に戻って準備してくれ。解散!」

21:59

如月

「いよいよだ、ついに艦隊戦が行われるんだからな」

有賀

「ええそうですね、22:00まで後10・9・8・7・6・5・4・3・2・1・0時間です!」

如月

「全艦隊出撃!」

ついに新連合艦隊が舞鶴より出撃、各艦は光学迷彩を展開その後に

50ノットで対馬へと向かった。

2:30

桜井

「艦長、最大射程範囲内の30キロまで後10分です。」

如月

「そうか、サテライト1とリンクしてくれ。」

桜井

「了解！」

そして10分後

桜井

「サテライト1より敵機動艦隊の規模が判明、空母6、フリゲート12、イージス艦12、強襲揚陸艦20から30はいます。」

如月

「主砲・副砲でプラズマキャノン砲発射用意！攻撃目標！敵旗艦！」

遠藤

「ターゲット登録完了！主砲・副砲データ入力完了！プラズマキャノン発射完了！」

如月

「1番から3番主砲、副砲1番一斉射撃撃てー！ー！ー！」

逢沢

「発射」

発射するためのトリガーを引いた。

ビシューーン ビシューーン ビシューーン ビシューーン

主砲・副砲から青白い光プラズマキャノンが放たれた。

一方中国軍艦隊

？

「いよいよだ、日帝（日本の事）を叩きのめす時が来たのだ。」

そっというのは旗艦の鎮遠型空母1番艦鎮遠の艦魂、鎮遠である。

？

「そつだね、お姉ちゃん」

彼女は2番艦定遠の艦魂、定遠である。

鎮遠

「対馬さえ占領すれば北九州を占領したのも同然だ」

定遠

「そつだね・・・あれ今何か光った？」

鎮遠

「何かひかつ・・・」

最後まで言えなかった。暁から放たれた9門は鎮遠に3門はフリゲ

ートに直撃してしまったからである。

神の悪戯か1門は艦首に、2門は格納庫に、1門は機関室に、1門は甲板に、1門は火薬庫に、1門は艦橋に、1門は停まっている戦闘機群に、1門はバイタルパートに、後フリゲートに直撃した瞬間、一瞬にして大爆発を起こしながら真つ二つにして沈んでいった。

ドッガアアアアー……ン！！！！

鎮遠は各部に誘爆しながら沈んでいった。

定遠

「そんな……お姉ちゃん……よくも……！？」

これが最後の言葉とは思ってもいなかったのだろう。不知火・太陽から放たれたプラズマキャノンの直撃により悲鳴を上げる間もなく沈んでいった。

暁 CIC

桜井

「敵旗艦に直撃！轟沈です！」

如月

「よくやった！砲雷長！」

逢沢

「ありがとうございます！次も行きますよ！」

その後10分は一方的な戦闘になった。アウトレンジ砲撃により中

国軍艦隊は反撃する間もなく沈んでいった。

第7話 宣戦布告セリ（後書き）

作者

「そろそろ2010年も終わるかあ…」

暁

「そうですね」

作者

「大晦日はダウンタウン見ながらカウントダウンという贅沢をするんだー!!」

炎龍

「まさに贅沢だな」

作者

「大晦日に今年最後の投稿、最高じゃないか」

佐渡

「ええ、そろそろ次回予告を」

作者

「次回はまさかの事態になります。「報復、そして」お楽しみに」

第8話 報復そして（前書き）

いよいよ2010年も残す所あと少しです。みなでカウントダウンをしましょう。後ご意見、ご感想をお願いします。

第8話 報復そして

3月21日 午前3時

如月

「現時点での撃沈率は？」

桜井

「現時点での中国軍艦隊の撃沈率はおおよそ60%です。このまま追撃しますか？」

如月

「そうだな、やるなら徹底的に無論追撃だ！主砲・副砲用意！他の艦にも追撃命令を！」

逢沢

「了解！」

暁が主砲・副砲を発射したまたフリゲート艦に直撃、轟沈。不知火・太陽の主砲が火を噴く。また轟沈。

暁

「しかし、いくら敵とは言え非情すぎませんか？」

如月

「そうか？何と他愛のない鎧袖一触とはこの事か。」

有賀

「艦長それって・・・」

如月

「それは・・・その・・・って分かる人いるの？」

そう言うとはほぼ全員が頷いた。こんな状態でも和やかなのは戦況からの余裕からだろう。

だが・・・

桜井

「レーダーに反応！ミサイル200！来ます！」

如月

「ちっ、ここまで来てまだ悪あがきを、ハイマツト・フルバーストシステムスタンバイ！」

遠藤

「了解！ハイマツト・フルバーストシステムオールグリーン！全タ―ゲットロックオン完了！発射用意完了！」

如月

「一斉発射！」

逢沢

「了解！サルボー！」

そう言うって発射ボタンを押す。すると全MK-61セルが開きESMが放たれ各自ロックオンした目標に迫りすべて直撃し防いだ。

桜井

「艦長！第二波来ます！数200！あつ中に・・・東風21号を確認・・・核ミサイルです！！！」

如月

「なんだと！核ミサイルだと！」

有賀

「なんて事を！」

如月

「高角砲、CIWS用意！」

各艦から迎撃しほとんどの核ミサイルを撃ち落とした。たった一発の核ミサイルを除いて・・・

桜井

「艦長！この艦でも他艦でも核ミサイル迎撃不可能です！」

如月

「プラズマシールド展開用意！」

宮下

「艦長！展開が間に合いません！」

如月

「なんだと・・・各員なにかにしがみつけ！」

暁

「嘘でしょ・・・」

その瞬間・・・艦隊上空で核ミサイルが炸裂した・・・。

第8話 報復そして（後書き）

作者

「一体艦隊はどうなるんでしょうか次回「タイムスリップ」どうか御期待を・・・」

第9話 タイムスリップ（前書き）

あけましておめでとうございます。今年も「蒼穹の艦隊」をよろしくお願いします。

第9話 タイムスリップ

・・・??・・・

如月

「・・・っ・・・痛って・・・はっ有賀しっかりしろ!」

有賀

「・・・はっ・・・大丈夫です艦長!」

如月

「皆!大丈夫か!」

逢沢・森下・宮下

「「大丈夫です!」」

水兵

「艦長!サテライト1との通信が受信できません!」

如月

「まじかよ!・・・艦の状態を報告せよ!」

すると返事が返ってきた

『主砲異常なし!』

『副砲異常なし!』

『高角砲異常なし!』

『C I W S 異常なし!』

『機関異常なし!』

『レーダー・ソナー異常なし!』

『ネオイージスシステム異常なし!』

如月

「どういうことだ!核の直撃を受けたはずなのに無傷なんだよ!」

水兵

「艦長!少しおかしい事が!」

如月

「今度は何だ?」

水兵

「はっ!前の戦闘に消費したはずの砲弾・弾薬・燃料がまるで出港前と同じで元通りです!」

如月

「一体何が起きているんだ!」

水兵

「艦長!他の艦も無事ですがこの艦同様の現象が起きているとの事です!」

桜井

「レーダーに反応！データ照合・・・これは長門？旧日本海軍の長門です！その後ろに陸奥、扶桑、山城伊勢、日向、金剛、比叡、霧島、榛名の10戦艦を確認しました！」

如月

「馬鹿な！まさか俺達タイムスリップしてしまったのか？」

水兵

「長門より発光信号！『貴官らは大日本帝国領海を侵犯している、速やかに所属を報告せよ』との事です！」

如月

「発光信号用意！内容は・・・」

戦艦長門

水兵

「不明艦より発光信号！『こちらは日本国国防海軍所属、戦艦暁です。』」

？

「国防海軍だと？しかも暁という名の戦艦は存在しないぞ！」

そんな事を言っているのは鮫島具重、戦艦長門の艦長だ

副長

「艦長！停船させて武装解除させましょう！」

鮫島

「そうだな」

戦艦 暁

水兵

「長門より発光信号！『停船せよ』とのことです！」

如月

「機関長！機関停止しろ！後他の艦も機関を停止させろ！」

宮下

「了解！機関停止せよ」

暁以下艦隊は機関を止め停止した。

戦艦 長門

水兵

「艦長！不明艦が停船しました。」

鮫島

「臨検隊を派遣しろ！」

？

「僕も行くよ」

鮫島

「あつ米内大臣殿、あなたが行かなくても」

米内

「いや、あの艦に興味を持ったんだ。同じ日本の海軍なら大丈夫だ」

鮫島

「・・・分かりました。」

戦艦暁艦橋

水兵

「内火艇接近！臨検隊だと思われます。あつ米内光政海軍大臣が見えます」

如月

「まさか海軍大臣自らがおこしなるとは！ラッタルを降ろせ！」

水兵

「了解！」

有賀

「艦長！どうしますか？」

如月

「・・・・・・」

内火艇

水兵

「そろそろ不明艦に乗り込みますが」

米内

「そうか、艦長はどう思う」

鯨島

「実に奇妙な戦艦だと思われます。」

水兵

「大臣はあの戦艦がアメリカの偽装艦だと思われていますか？」

米内

「アメリカはそんなことはやらないと思われるね、旭日旗を掲げているし、しかもアメリカは不意打ちを嫌う国だからね」

実際に米内光政は親米派であることは有名である。

水兵

「大臣！不明艦からラッタルが降りています」

鯨島

「よしラッタルから不明艦を調査する！」

戦艦暁艦橋

有賀

「艦長！そろそろ来ますよ！」

如月

「じゃあ、行くか」

甲板に向かう如月

如月

「そうだ、有賀副長！お茶の用意を頼む！」

有賀

「えっあっ・・・はい！」

如月は少数の水兵を連れて甲板に向かった。

戦艦暁甲板

米内

「しかし大きいな」

鮫島

「はい軽く300mは越えていると思われます」

水兵

「誰か来ます」

ギイッと扉が開き、如月達が出てきた。

如月

「ようこそ戦艦暁へ、私がこの艦隊の司令官の如月大悟です」

鮫島

「戦艦長門の艦長、鮫島具重大佐です」

米内

「僕は元海軍大臣の米内光政です」

如月

「ここで話すわけにも行かないのでとりあえず艦内へどうぞ」

戦艦暁長官室

如月

「遠慮せずかけてください」

米内

「では失礼するよ」

鮫島

「失礼します」

如月

「突拍子で申し訳ありませんが今日は何年何月何日でしょうか？」

米内

「今日？1937年7月23日だが？」

如月

「・・・そうか、だからか・・・」

鮫島

「一体あなた達は何者ですか？」

如月

「我々は・・・83年後の日本から来ました」

米内

「そうか・・・いや未来から来たなら話が合っ」

鮫島

「大臣それはどういう事ですか？」

米内

「未来の艦艇なら300m越えの戦艦もいるという意味だ。如月君と行ったね日本はどうなるのかね」

如月

「ええこれから言う事はすべて本当です」

如月は米内達に日本がアメリカと戦争し敗戦になる事を言った。

鮫島

「まさか・・・我が日本が負けるなんて・・・」

しかし米内は落ち着いていた。

米内

「そうか、やっぱりアメリカとは戦争はしてはならなかったんだ」

如月

「だから我々は日本を破滅から救うため力を貸します」

米内

「破滅から救う？」

如月

「まずある人の協力が必要です」

鮫島

「ある人の協力？」

如月

「それは天皇陛下です」

鮫島

「天皇陛下ですか！」

如月

「そうです、これから改革していこうとしても陸軍がどうしても邪魔するので、陛下と共に改革していくなら陸軍も口出しはできません」

米内

「分かった。では一週間後に御前会議を開くように説得していきま

す」

如月
「ありがとうございます。会議には陸海軍の重要人物も呼んでください」

この会談の後に米内達は長門に戻って行った。

戦艦暁艦橋

如月

「副長！各艦に通信を入れてくれ！」

有賀

「了解！」

如月は米内達との会談の内容を、新連合艦隊に伝えた。

数分後

有賀

「全艦、旗艦と共にについていくと、返電が来ました」

如月

「長門に返電！」

1分後

水兵

「長門より『我に続け』との事です」

如月

「よし艦隊の陣形を輪形陣から単縦陣にする。他の艦にも通達せよ」

有賀

「了解！」

如月

「全艦！長門に続け！」

戦艦長門防空指揮所

？

「姉さん！彼らは一体！」

今喋ったのは戦艦陸奥の艦魂、陸奥である。

？

「私にも分からないよ」

今喋ったのは戦艦長門の艦魂、長門である。

陸奥

「私達よりも大きい戦艦が6隻も来るなんて」

長門

「艦長からはどうやら未来から来た艦隊だってよ」

陸奥

「へーまさか」

長門

「艦長は嘘つかないよ」

陸奥

「しかしどうなるんやら」

戦艦暁長官室

暁

「艦長、何してるんですか？」

如月

「一週間後の会議に備えてある計画を立てているんだ」

暁

「そうですね、では頑張ってください」

如月

「ああ」

第9話 タイムスリップ（後書き）

作者

「あけましておめでとございますって何主砲向けてるんですか！？」

暁

「核ミサイルで殺そうとしたバツですよ！」

作者

「ちよつと待て！話せばわかる！」

佐渡を除く暁以下4人

「「「「問答無用！死ねー」「」「」」」」

ズキユーーン×75

作者

「ギヤアアーーッ」

佐渡

「また作者が負傷したのでまた私が、次回天皇陛下と面会します。次回「錦の御旗」どうぞご期待ください」

第10話 錦の御旗

7月30日 皇居

今如月達は御前会議をするための会議室の前に立っている。

有賀

「艦長、なぜ私まで」

如月

「なに、補佐のためだよ。こんな優秀で美人な副長はいないんだからな」

有賀

「ちよっ・・・からかわないでください」

如月

「そろそろ会議の時間だ。過去を変えるために行くぞ」

有賀

「ええ行きましょう。過去を変えるために」

二人は会議室へと入って行った。

会議室

二人が入ってくると会議に集まった人たちを見て、さすがは米内大臣だなと思った。

なぜなら現総理大臣の近衛文麿をはじめ陸軍は東条英機、栗林忠道など、海軍は井上成美、山本五十六、吉田善吾、及川古志郎、嶋田繁太郎などの重要人物が出席しているからだ

天皇

「君達のことは米内から聞いている。未来から来たと言っていたが？」

如月

「はっ、その通りです。陛下」

近衛

「君達が未来から来た証拠はあるのかね？」

如月

「ありますよ」

二人は持っていた携帯電話を見せ写真を取り近衛に見せた。

近衛

「確かに我々では到底作れないものだ。よからう信じよう」

東条

「では日本はこれからどうなるのかね？」

如月

「ええではこちらを見てください」

そう言ってプロジェクターを通じてこれから起こるであろう太平洋戦争を開戦から終戦までを見せた。

見終わった後の会議室には異常な空気が流れていた。天皇は憤慨寸前、陸海軍首脳は沈黙なかにはおどおど、びくびくしている人がある。

天皇

「なんてことだ・・国民をむざむざ見殺すとは・・っ！」

ついに憤慨してしまった。サイパン島や沖縄の軍が住民に強制自決を強いられた事や自らの命を絶つてまでの特攻など非人道的な行為が理由である。

天皇

「如月よ。これからどうするのだ」

如月

「はっ、陛下これから事実の戦争を防ぐために力になってください。まず陸海軍の改革を行わないと話になりません！」

天皇

「分かった。皆の者よ良く聞け！これから改革を行う。異議のあるものはここから出ていけ！」

出ていくものはいなかった。

天皇

「では改革は如月君が主体となつて行つ」

全員

「「「「はっ」「」「」」

如月

「では改革の内容についての資料があります。御覧になってください」

そついうと二人で資料を配布した。

近衛

「こつこれは・・・」

及川

「これは可能かね？」

資料には一二、八計画と書いてあった。内容は

？「ZZ計画」（ダブルゼータ計画）・・・海軍が今計画しているマル3計画を拡張、建造する艦艇は1・大和型戦艦二隻、2・改大和型戦艦八隻、3・虎狼型航空戦艦一〇隻、4・大淀型電子戦艦八隻、5・土佐型戦艦三隻、6・輝龍型護衛戦艦二隻、7・翔鶴型空母八隻、8・飛鷹型空母五隻（改装二隻、新造三隻）、9・大鳳型空母五隻、10・雲龍型空母一二隻、11・信濃型空母二隻、12・千歳型空母四隻（改装二隻、新造二隻）、13・海鷹型護衛空母四隻、14・大鷹型護衛空母五隻、15・伊吹型重巡六隻、16・東光型航空重巡四隻、17・阿賀野型軽巡四隻、18・吉野型軽巡四隻、19・陽炎型駆逐艦二〇隻、20・秋月型対空駆逐艦二〇隻、21・夕雲型駆逐艦二四隻、22・松型駆逐艦二〇隻、23・橘型駆逐艦一二隻、24・伊四〇〇型潜水艦八隻、25・伊五〇〇型潜水艦四隻、26・伊六〇〇型潜補（潜水補給艦）五隻、後新型輸送艦、タンカー、水上機母艦、海防艦など合計五〇〇隻それにすでに完成した艦艇の改装

？「XX計画」（ダブルエックス計画）・・・陸海軍の体制を根本的に改革。1・装備の変更、2・陸軍の新型戦車の開発、3・海軍独自の部隊（アメリカの海兵隊のような物）の結成、4・女性の軍人進出、5・レーダーの高性能化

？「OO計画」（ダブルオー計画）・・・新型航空機の開発計画。1・2000馬力の出力がでる誉エンジンの早期開発、2・新型航空機の早期開発、3・女性航空隊の結成

如月

「どうでしょうか・・・？」

山本

「私から一つ、「ZZ計画」のための資源もそうなんだが、今から起工しても到底開戦まで間に合わないと思われるのだが？」

如月

「それに関してはブロック工法および電気溶接工法を軸に建造していくつもりです」

嶋田

「私からも、建造するためのドックが足りないと思われるが？それについての対策は？」

如月

「それは新たに造船所を作って建造するつもりです。場所は豊原、陸奥、庄内、気仙沼、和歌の浦、博多、霧島、沖縄、台湾などを検討しているつもりです。」

質問が飛び交っていると突然誰かが入ってきた。

侍従

「大変です陛下！東京湾に正体不明の艦隊が出現しました！水偵の報告によりますと東京湾に霧が出現し中から推定千隻の輸送艦、タンカー、後周りには軽巡並の艦艇が多数、少数ながら空母が出現しました。不明艦隊からは我々は国防海軍と言っています！」

如月

「どういうことだ！国防海軍だと！・・・陛下！ちよつと東京湾まで行ってきます！我々の仲間達に会ってきます！」

天皇

「分かった、行つてきてもいいぞ」

1時間後

二人は出現した艦隊にへりで飛んで行つた。

如月

「あれは確かへり空母のひゅうが・いせだな。あとはあたご型やこんごう型などが確認できるな」

有賀

「しかし、どうして？」

如月

「まさか天の悪戯か？」

有賀

「ありえませんよ、そろそろ着きます。ひゅうがに着艦お願いします」

パイロット

「了解しました」

二人を乗せたヘリはひゅうがに着艦した。すると中から艦長服を着た人と水兵達が銃を持ってきた。

？

「・・・如月か？」

如月

「その声まさか後藤か？」

有賀

「えっ知り合いですか？」

後藤

「なんでここにいるんだよ、親友よ」

如月

「おまえこそなんで」

後藤

「おまえらの艦隊が核攻撃で全滅したから全員戦死したって幕僚長が」

如月

「なあ、俺らがいなくなった後はどうなったんだ？」

後藤から聞いた話によると中国軍艦隊は全滅寸前のため一時旅順に帰還。韓国は北朝鮮の侵攻のため日本に物資を要求してきた。そのため輸送艦隊を派遣。輸送艦隊は韓国に戦略物資を運んでいる途中に突然の豪雨で、気づいたらここにいたということである。

後藤

「おまえらはどうしてるんだ？」

如月

「今天皇陛下と共に改革を起こなうことになって、その会議中におまえらが来たから会議をすっ飛ばしてきたんだ。今艦隊増強計画のための物資やドックが足りなくて苦労してるんだ」

後藤

「今、ドックとかが必要と言ったな？」

如月

「ああ・・・まさか」

後藤

「本来なら韓国のために持ってきた物資とかがある。これで何とかなるか？」

如月

「どれくらいあるんだ？」

後藤

「ええーっと、ドックなら400個作れる位の、艦艇なら優に2000隻は作れる分がある」

如月

「やったぜ！これで建造可能になる！」

後藤

「俺らはどうしたらええのか？」

如月

「陛下に頼んで俺らの艦隊と一緒に所属の所にしてもらおう」

この後再び会議室に戻りすべてを報告、全員が狂喜した。大量の物資や艦隊が仲間になったからである。

翌日

さつそく如月達の改革が始まった。まずは陸軍で日本を破滅とまでは行かなくとも悪くした人を徹底的に予備役に回した。

例えば陸軍では辻正信、牟田口廉也、板垣征四郎、石井四郎などである。

海軍では黒島亀人、永田修身等である。

代わりに陸軍は栗林忠道、佐藤幸徳、牛島満などを、海軍では連合艦隊司令長官は山本五十六と会議で決定した。

会議の後に内閣が変わった。総理大臣は米内光政となり、国際状態を鑑み中国からの撤兵を発表した。

陸軍はこれに対し反発した。それは天皇の命令であると東条が言う

と反発は沈静化した。

第10話 錦の御旗（後書き）

暁

「ちょっとこれはさすがにやりすぎではないでしょうか？」

作者

「あつ、それは大丈夫だよ」

炎龍

「やっと登場したよ。馬鹿作者のおかげで出番がなかったよ」

水龍

「アイドルはいつもいなきゃいけないのに」

雷龍

「まったく何してるんだか」

作者

「決して忘れたわけではありません。絶対」

炎龍

「しょうがないな、それで次回は？」

作者

「えー次回は十二、八計画のなかの「ZZ計画」に出てきた新造艦艇の性能データや改装内容をお送りします。次回「新造艦艇データおよび改装内容」ご期待ください。」

第11話 新造艦艇データおよび改装内容（前書き）

とても長いと思われますが飽きずに御覧なってください。一部命名変更しました。

第11話 新造艦艇データおよび改装内容

如月が提案した「一二・八計画」の一つ「ZZ計画」において建造される艦艇は昭和12年明けにはほぼすべて起工された。その艦艇のスペックはこちら

大和型戦艦

全長 360m

全幅 40m

基準排水量 10万5000t

満載排水量 13万5000t

速度 45ノット

航続距離 18ノットで2万海里

武装 50口径51°3連装主砲4基12門

60口径25°5°3連装副砲2基6門

50口径12°7°3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲70基280門

37mm " 連動機銃 50基150門

30mm " 30基90門

25mm " 30基90門

20°36連装噴進弾10基

零式垂直発射管100セル（対艦噴進弾：烈火弾、対空噴進

弾：烈空弾、対地噴進弾：時雨弾が発射可能）

水上機 10機

カタパルト 2基

連合艦隊旗艦として建造され基本設計により事実よりも対空防御に力を注ぎ、レーダー連動機関砲、機銃、対空噴進弾などがいい例である。さらに設計にはあらかじめCIC（戦闘指揮所）が運用でき

るように設計されている。ちなみに最新鋭のガスタービン6基、ボイラー14基と搭載したため異常な速度が出てしまった。艦名は「大和」「武蔵」（信濃、紀伊は最初から装甲空母として設計されている。船体は大和型を使う）

尾張型戦艦

全長 380 m

全幅 40 m

基準排水量 12万7000 t

満載排水量 16万9000 t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万2000海里

武装 50口径56?3連装主砲4基12門

60口径25?5?3連装副砲2基6門

50口径12?7?3連装高角砲36基108門

40mmレーダー連動機関砲70基280門

37mm " 連動機銃 50基150門

30mm " 40基120門

25mm " 40基120門

20?36連装噴進弾12基

零式垂直発射管120セル（発射弾頭は一緒）

水上機 10機

カタパルト 2基

大和型の基本設計である対空防御を強化しつつ砲撃戦闘を強化した戦艦である。ガスタービンは6基でボイラーは18基を搭載した。艦名は「尾張」「美濃」「甲斐」「水戸」

上総型戦艦

全長 400 m

全幅 40 m

基準排水量 14万2000 t

満載排水量 18万0000 t

速度 47ノット

航続距離 18ノットで2万5000海里

武装 50口径60?3連装主砲6基18門

60口径30,6?4連装副砲2基8門

50口径3連装高角砲40基120門

40mmレーダー連動機関砲80基320門

37mm " 連動機銃 50基150門

30mm " 40基120門

25mm " 40基120門

20?36連装噴進弾14基

零式垂直発射管150セル

水上機 10機

カタパルト 2基

基本設計は一緒に連合艦隊総旗艦としての能力は戦前では世界一と呼んでも過言ではないほど通信能力が大和型や尾張型よりも強化されている。艦名は「上総」「下総」「磐城」「岩代」

相模型航空戦艦

全長 370 m

全幅 40 m

基準排水量 9万4000 t

満載排水量 12万2000 t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万2000海里

武装 50口径46?3連装主砲4基12門

50口径12,7?3連装高角砲50基150門

40mmレーダー連動機関砲80基320門
 37mm " 連動機銃 60基180門
 30mm " 40基120門
 25mm " 40基120門

20?36連装噴進弾20基

零式垂直発射管120セル

格納庫 2段式で50機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦25機

艦攻25機

艦爆25機

艦偵25機

合計100機

エレベーター 2基

カタパルト 4基

伊勢型航空戦艦の発展型で後方にはV字に伸びた飛行甲板と一体化した飛行甲板が存在し搭載量は事実のエセックス型空母に匹敵する搭載量である。ちなみに全戦艦にCICを導入し戦闘強化を図っている

艦名は「相模」「三河」「遠江」「伊豆」「常陸」「陸前」「陸中」「阿波」「周防」「伯耆」

大淀型電子戦略戦艦

全長 370m

全幅 40m

基準排水量 9万2000t

満載排水量 12万3000t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万2000海里

武装 50口径46?3連装主砲4基12門

60口径25'5?3連装副砲2基6門
 50口径12'7?3連装高角砲36基108門
 40mmレーダー連動機関砲80基320門
 37mm"連動機銃50基150門
 30mm"30基90門
 25mm"30基90門
 20?36連装噴進弾14基

零式垂直発射管120セル

水上機 6機

カタパルト 2基

チャフ発射装置2基

ジャミング発生装置2基

事実の大淀型軽巡を元に設計から拡大拡張を行い電子戦略戦艦として起工されることになった。艦橋下のCICは他の戦艦よりも大きく電子戦略戦艦の名に恥じない構造になっている。艦名は「大淀」「仁淀」「剣淀」「鎧淀」「翔淀」「瑞淀」「天淀」「龍淀」

土佐型戦艦

全長 380m

全幅 40m

基準排水量 9万2000t

満載排水量 12万5000t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万2000海里

武装 50口径46?3連装主砲6基18門

60口径25'5?3連装副砲2基6門

50口径12'7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲70基280門

37mm"連動機銃50基150門

30 mm "	30基90門
25 mm "	30基90門

20?36連装噴進弾14基

零式垂直発射管120セル

水上機 10機

カタパルト 2基

長門型戦艦の後継艦として建造され新造戦艦の中では一番防御に特化した戦艦である。中規模艦隊の旗艦となる戦艦になるであろう。
艦名は「土佐」「伊予」「淡路」「讃岐」

輝龍型護衛戦艦

全長 360 m

全幅 39 m

基準排水量 8万8900 t

満載排水量 11万8000 t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万4000海里

武装 60口径41?3連装主砲5基15門

60口径25.5?4連装副砲2基8門

50口径12.7?3連装高角砲36基108門

40 mmレーダー連動機関砲70基280門

37 mm " 連動機銃 50基150門

30 mm " 40基120門

25 mm " 40基120門

20?36連装噴進弾14基

6連装対潜噴進弾6基

零式垂直発射管100セル

格納庫 1段式で最大15機収納可能

搭載機数 対潜哨戒機6機

制空戦闘機5機

後に対潜ヘリ4機

カタパルト 2基

海上輸送護衛艦隊の旗艦として建造され戦艦としては異例の対潜武装を搭載している。艦後方には今で言う護衛艦のような格納庫を備えそこに航空機を収納する。主砲、副砲は最大60度まで傾けれる事が可能である。艦名は「輝龍」「神龍」

翔鶴型空母

全長 380m

全幅 57m（アングルトデッキを含む）

基準排水量 11万2000t

満載排水量 14万2000t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万3000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で65機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦60機

艦攻70機

艦爆70機

艦偵60機

合計260機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

日本初の超大型空母でアングルトデッキ、カタパルト、艦橋と煙突の一体化といろいろな新構想が導入したバランス型空母である。そ

のためすべての空母は新構想3つをすべて採用している。ちなみに全空母は装甲空母を除いてすべて対500キロ装甲である。装甲空母は対1t装甲である。艦名は「翔鶴」「瑞鶴」「鳳鶴」「龍鶴」「天鶴」「隼鶴」「蒼鶴」「桜鶴」

飛鷹型空母

全長 375m

全幅 57m

基準排水量 9万3000t

満載排水量 12万2000t

速度 45ノット

航続距離 18ノットで2万3000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で55機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦50機

艦攻60機

艦爆60機

艦偵50機

合計220機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

飛鷹、隼鷹は事実よりも早く徴用され空母への改装して残りの姉妹艦はすべて新造であり改装空母にも関わらず搭載量が多いのは拡張工事のためである。艦名は「飛鷹」「隼鷹」「天鷹」「翔鷹」「瑞鷹」

大鳳型装甲空母

全長 380 m

全幅 57 m

基準排水量 10万9000 t

満載排水量 15万0000 t

速度 45ノット

航続距離 18ノットで2万1000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で50機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦50機

艦攻50機

艦爆50機

艦偵50機

合計200機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

事実の大鳳の設計とほぼ変わらず、初めてエンクローズド・バウを採用した空母であり、装甲空母として建造された。艦名は「大鳳」「海鳳」「天鳳」「雷鳳」「蒼鳳」「桜鳳」

雲龍型空母

全長 360 m

全幅 54 m

基準排水量 7万3000 t

満載排水量 10万3000 t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万3000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門
20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で55機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦50機

艦攻60機

艦爆60機

艦偵50機

合計220機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

事実同様、中型空母として（どこがやねん^^）建造された。建造を早めるため武装の共通化やブロック工法や電気溶接工法を多用した。艦名は「雲龍」「天城」「葛城」「笠置」「阿蘇」「生駒」「鞍馬」「日立」「鳳龍」「幻龍」「霸龍」「閃龍」

信濃型装甲空母

全長 380m

全幅 57m

基準排水量 11万8000t

満載排水量 15万2000t

速度 45ノット

航続距離 18ノットで2万3000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で50機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦50機

艦攻50機

艦爆50機

艦偵50機

合計200機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

事実とは違い生粋の装甲空母として起工し建造している。大和型の船体を使って建造しているため大和並にタフである。艦名は「信濃」「紀伊」

千歳型空母

全長 360m

全幅 54m

基準排水量 7万2000t

満載排水量 8万9000t

速度 46ノット

航続距離 18ノットで2万海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で55機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦50機

艦攻60機

艦爆60機

艦偵50機

合計220機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

飛鷹と同じく千歳、千代田は水上機母艦からの改装、後は新造である。艦橋はアイランド式となった。艦名は「千歳」「千代田」「羽

田「伊丹」

海鷹型護衛空母

全長 180 m

全幅 34 m

基準排水量 1万2000 t

満載排水量 2万0000 t

速度 30ノット

航続距離 18ノットで1万3000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲10基30門

40mmレーダー連動機関砲30基120門

20?36連装噴進弾10基

格納庫 2段式で20基ずつ収納可能

搭載機数 艦戦10機

艦偵10機

対潜哨戒機20機

エレベーター 2基

カタパルト 2基

輸送船団のエアカバーなどを目的に建造され建造期間を縮めるため船体の簡易化や武装の共通化などを図っている。ちなみに建造期間は半年である。艦名は「海鷹」「神鷹」「空鷹」「地鷹」以下多数

大鷹型護衛空母

全長 200 m

全幅 34 m

基準排水量 1万5000 t

満載排水量 2万2000 t

速度 32ノット

航続距離 18ノットで1万6000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲14基42門

40mmレーダー連動機関砲40基160門

20?36連装噴進弾10基

格納庫 2段式25機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦15機

艦偵10機

対潜哨戒機25機

エレベーター 2基

カタパルト 2基

改海鷹型護衛空母で少し大型化している。それを除けばほぼ一緒である。建造期間は8カ月である。艦名は「大鷹」「雲鷹」「冲鷹」「電鷹」「迅鷹」以下多数

作者より

1回では書ききれないので都合により2回に分けます。1回目は新造艦艇データで、2回目は改装データとなります。ご了承ください。

第11話 新造艦艇データおよび改装内容（後書き）

作者

「いやゝ長かった、長かった」

暁

「よくここまで書けましたね」

炎龍

「おい、作者！すべての艦艇が速度が40ノット後半出るってどういうことだ！」

作者

「どうやら最新鋭のガスタービン、ボイラーを詰めて運用したらこうなったわけだまあ事実よりも長いからね船体とかが、だから余裕のあるところに防御装甲やガスタービン、ボイラーがたくさん入れれたわけだ」

佐渡

「作者さん、そろそろ次回をお願いします」

作者

「次回は紹介できなかった新造艦艇の性能データを書きます。次回「新造艦艇データ後半編」お楽しみに」

第12話 新型艦艇データ後半編（前書き）

一部命名変更をしました。

第12話 新型艦艇データ後半編

続きであります。どうぞ

伊吹型重巡洋艦

全長 230 m

全幅 21 m

基準排水量 1万8900 t

満載排水量 2万5200 t

速度 50ノット

航続距離 18ノットで1万3000海里

武装 60口径25.5?3連装主砲6基18門

50口径12.7?3連装高角砲14基42門

62?4連装魚雷発射管6基

40 mmレーダー連動機関砲30基120門

37 mmレーダー連動機銃 30基90門

20?36連装噴進弾6基

水上機 6機

カタパルト 2基

改最上型重巡洋艦として建造され事実とは違い生粋の重巡である。

水雷戦隊総旗艦としての通信設備は整っている。艦名は「伊吹」

「吾妻」「磐梯」「飯豊」「飯盛」「姫神」

蔵王型航空重巡洋艦

全長 240 m

全幅 26 m

基準排水量 2万7200 t

満載排水量 3万5600 t

速度 52ノット

航続距離 18ノットで1万4300海里

武装 60口径25.5?3連装主砲4基12門

50口径12.7?3連装高角砲30基90門

62?4連装魚雷発射管6基

40mmレーダー連動機関砲40基160門

37mmレーダー連動機銃 30基90門

6連装対潜噴進弾6基

20?36連装噴進弾10基

飛行甲板 全長190m、全幅26m

格納庫 1段式で30機収納可能

搭載機数 対潜哨戒機10機

偵察機10機

艦戦10機

合計30機

エレベーター 2基

カタパルト 2基

改利根型航空重巡洋艦として建造され、特徴としては飛行甲板は少し斜めなつてに配置されている。艦名は「蔵王」「蓬萊」「赤石」「安達太良」

阿賀野型軽巡洋艦

全長 200m

全幅 16m

基準排水量 7500t

満載排水量 8900t

速度 55ノット

航続距離 18ノットで1万1000海里

武装 60口径20?3連装主砲5基15門

50口径12.7?3連装高角砲12基36門
62?4連装魚雷発射管4基

40mmレーダー連動機関砲20基80門

37mmレーダー連動機銃30基90門

20?36連装噴進弾6基

水上機 4機

カタパルト 2基

水雷戦隊旗艦として建造されているため艦橋が大型であり通信能力が充実している。艦名は「阿賀野」「能代」「矢矧」「酒匂」

吉野型軽巡洋艦

全長 210m

全幅 17m

基準排水量 8000t

満載排水量 9400t

速度 56ノット

航続距離 18ノットで1万2100海里

武装 60口径20?3連装主砲5基15門

50口径12.7?3連装高角砲14基42門

62?4連装魚雷発射管6基

40mmレーダー連動機関砲30基120門

37mmレーダー連動機銃40基120門

20?36連装噴進弾6基

水上機 4機

カタパルト 2基

改阿賀野型軽巡として建造され、特徴は阿賀野型と一緒にある。艦名は「吉野」「吉井」「小瀬」「成羽」

陽炎型駆逐艦

全長 156 m

全幅 12 m

基準排水量 3500 t

満載排水量 4000 t

速度 60ノット

航続距離 14ノットで1万海里

武装 60口径12.7?連装主砲4基8門

62?4連装魚雷発射管3基

40mmレーダー連動機関砲20基80門

37mmレーダー連動機銃20基60門

ヘッジホッグ2基

爆雷投下台6基

生産性よりも性能向上を重視した駆逐艦である。艦名は「陽炎」以下多数

秋月型対空駆逐艦

全長 160 m

全幅 12 m

基準排水量 3400 t

満載排水量 4000 t

速度 60ノット

航続距離 14ノットで1万海里

武装 70口径10?連装主砲4基8門

62?5連装魚雷発射管3基

40mmレーダー連動機関砲30基120門

37mmレーダー連動機銃40基120門

ヘッジホッグ2基

爆雷投下台6基

対空戦闘に特化した駆逐艦で生産性も良好である。ちなみに建造期間は1カ月である。艦名は「秋月」以下多数

夕雲型駆逐艦

全長 160 m

全幅 13 m

基準排水量 3600 t

満載排水量 4200 t

速度 60ノット

航続距離 14ノットで1万1000海里

武装 60口径12.7?連装主砲4基8門

62?5連装魚雷発射管3基

40mmレーダー連動機関砲30基120門

37mmレーダー連動機銃30基90門

ヘッジホッグ2基

爆雷投下台6基

改陽炎型駆逐艦で性能・生産性が向上していて駆逐艦の中では一番排水量が多い事とバランスがいい駆逐艦である。艦名は「夕雲」以下多数

松型駆逐艦

全長 120 m

全幅 12 m

基準排水量 2000 t

満載排水量 2200 t

速度 60ノット

航続距離 14ノットで1万海里

武装 60口径12.7?連装主砲4基8門

62?4連装魚雷発射管2基
40mmレーダー連動機関砲20基80門
37mmレーダー連動機銃16基48門
ヘッジホッグ2基
爆雷投下台6基

生産性を高めた駆逐艦で起工から竣工まで1カ月というのは簡易的な構造であるためである。艦名は「松」以下多数

橘型駆逐艦

全長 120m
全幅 12m
基準排水量 2100t
満載排水量 2300t
速度 60ノット
航続距離 14ノットで1万1000海里
武装 60口径12.7?連装主砲4基8門
62?4連装魚雷発射管2基
40mmレーダー連動機関砲20基80門
37mmレーダー連動機銃16基48門
ヘッジホッグ2基
爆雷投下台6基

改松型駆逐艦として建造しており建造期間は松型と一緒にある。艦名は「橘」以下多数

伊400型潜水艦
全長 185m
全幅 21m
基準排水量 7800t

満載排水量 11000 t

速度 水上30ノット、水中23ノット

航続距離 水上16ノットで7万8200海里、水中10ノットで800海里

武装 零式62?魚雷発射管14門（艦首12門、艦尾2門）

零式62?酸素魚雷60本

収納式12, 7?3連装高角砲10基30門

収納式40mmレーダー連動機関砲20基80門

搭載機数 4機

カタパルト 1基

潜水艦隊旗艦として建造が行われ、事実で言う潜高型と潜特型の融合である。艦名は伊400以下多数

伊500型潜水母艦

全長 195 m

全幅 25 m

基準排水量 8000 t

満載排水量 12000 t

速度 水上28ノット、水中22ノット

航続距離 水上16ノットで7万7800海里、水中10ノットで780海里

武装 零式62?魚雷発射管8基

零式62?酸素魚雷48本

収納式12, 7?3連装高角砲12基36門

収納式40mmレーダー連動機関砲24基96門

格納庫 1段式で10機収納可能

搭載機数 10機

カタパルト 1基

パナマ運河封鎖を目的に建造され潜水艦隊にそれぞれ4隻ずつ配備されることになる。艦名は伊500以下多数

伊600型潜水補給艦

全長 185 m

全幅 21 m

基準排水量 7700 t

満載排水量 11000 t

速度 水上で27ノット、水中で22ノット

航続距離 水上16ノットで7万6700海里、水中10ノットで780海里

武装 零式魚雷発射管8門（艦首6門、艦尾2門）

零式酸素魚雷48本

収納式12.7mm3連装高角砲16基48門

収納式40mmレーダー連動機関砲20基80門

搭載機数 4機

カタパルト 1基

物資搭載量 石油2万8000 t

航空機4機

酸素魚雷120本

長期任務のための補給専用潜水艦として建造され潜水艦隊にそれぞれ3隻ずつ配備される事になる。艦名は伊600以下多数

第12話 新型艦艇データ後半編（後書き）

作者

「またできたぜ、一日に2話連続投稿できたぜ」

暁

「お疲れ様」

炎龍

「まったく、やる時はやる作者なんだから」

作者

「ええそうですよ」

佐渡

「そろそろ次回をお願いします」

作者

「今回は改装内容を説明します。次回『改装内容前半』お楽しみに
」

第13話 改装内容前半

現在建造している艦艇と既に存在している艦艇の性能差を無くすべく改装を行った。内容はこちら

長門型戦艦

全長 330m

全幅 変わらず

基準排水量 7万2500t

満載排水量 9万8000t

速度 45ノット

航続距離 16ノットで2万2300海里

武装 50口径46?連装主砲4基8門

60口径20?3連装副砲2基6門

50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲70基280門

37mmレーダー連動機銃50基150門

30mm " 30基90門

25mm " 30基90門

20?36連装噴進弾6基

零式垂直発射管100セル

水上機 4機

カタパルト 2基

配置 前から1番主砲 2番主砲 1番副砲 艦橋 煙突2本 後

方艦橋 2番副砲 3番主砲 4番主砲

扶桑型戦艦

全長 320m

全幅 変わらず

基準排水量 7万0000 t
満載排水量 9万4000 t
速度 43ノット

航続距離 16ノットで2万2000海里

武装 50口径41?連装主砲6基12門

60口径20?3連装副砲2基6門

50口径12.7?3連装高角砲30基9門

40mmレーダー連動機関砲70基280門

37mmレーダー連動機銃50基150門

30mm " 30基90門

25mm " 30基90門

20?36連装噴進弾6基

零式垂直発射管100セル

水上機 4機

カタパルト 2基

配置 前から1番主砲 2番主砲 1番副砲 艦橋 3番主砲 煙

突 4番主砲 後方艦橋 2番副砲 5番主砲 6番主砲

伊勢型航空戦艦

全長 320 m

全幅 変わらず

基準排水量 7万2000 t

満載排水量 9万5800 t

速度 45ノット

航続距離 16ノットで2万3000海里

武装 50口径41?連装主砲4基8門

60口径20?3連装副砲2基6門

50口径12.7?3連装高角砲40基120門

40mmレーダー連動機関砲80基320門

37mmレーダー連動機銃50基150門

30mm " 40基120門
25mm " 40基120門
20?36連装噴進弾10基

零式垂直発射管100セル

飛行甲板 110m

搭載機数 艦戦15機

艦攻15機

艦爆15機

艦偵15機

合計60機

カタパルト 2基

配置 前から1番主砲 2番主砲 1番副砲 艦橋 2番副砲 煙

突 3番主砲 4番主砲 飛行甲板

金剛型戦艦

全長 320m

全幅 変わらず

基準排水量 7万0000t

満載排水量 9万2500t

速度 46ノット

航続距離 16ノットで2万3000海里

武装 50口径41?連装主砲4基8門

60口径20?3連装副砲2基6門

50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲70基280門

37mmレーダー連動機銃 50基150門

30mm " 30基90門

25mm " 30基90門

20?36連装噴進弾6基

零式垂直発射管100セル

水上機 4機

カタパルト 2基

配置 長門と一緒に

赤城型空母

全長 370m

全幅 57m

基準排水量 9万0000t

満載排水量 12万3000t

速度 45ノット

航続距離 18ノットで2万2800海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で60機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦60機

艦攻60機

艦爆60機

艦偵60機

合計240機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

艦橋は左ではなく右である。飛龍も同じく右である。

加賀型空母

全長 370m

全幅 57m

基準排水量 9万2100t

満載排水量 12万5000t

速度 45ノット

航続距離 18ノットで2万2600海里
武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門
40mmレーダー連動機関砲100基400門
20?36連装噴進弾20基
格納庫 4段式で60機ずつ収納可能
搭載機数 赤城と同じ
エレベーター 4基
カタパルト 4基

蒼龍型空母

全長 350m
全幅 54m
基準排水量 6万2000t
満載排水量 7万9000t
速度 46ノット
航続距離 18ノットで2万海里
武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門
40mmレーダー連動機関砲100基400門
20?36連装噴進弾20基
格納庫 4段式で55機ずつ収納可能
搭載機数 艦戦55機
艦攻55機
艦爆55機
艦偵55機

合計220機

エレベーター 4基
カタパルト 4基

飛龍型空母

蒼龍と同じ

鳳翔型空母

全長 340 m

全幅 52 m

基準排水量 6万2000 t

満載排水量 8万3000 t

速度 45ノット

航続距離 18ノットで1万7000海里

武装 50口径12.7?3連装高角砲30基90門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

20?36連装噴進弾20基

格納庫 4段式で40機ずつ搭載可能

搭載機数 艦戦40機

艦攻40機

艦爆40機

艦偵40機

合計160機

エレベーター 4基

カタパルト 4基

鳳翔は輸送船団の旗艦として改装した。

龍驤型空母

ほとんど鳳翔と一緒に。違う点は

基準排水量 6万7000 t

満載排水量 8万9000 t

格納庫 4段式で45機ずつ収納可能

搭載機数 艦戦45機

艦攻45機

艦爆45機

艦偵45機

合計
180機

第13話 改装内容前半（後書き）

作者

「今日で冬休みが終わりだ」

暁

「それにしても学校が始まったら投稿はどうなるんですか？」

炎龍

「そっだ、いつものように不定期に投稿されても困るんだぞ！」

作者

「投稿は2日に1章ずつ投稿していきたいと思っています」

水龍

「そろそろ、次回予告を」

作者

「さて次回は重巡、軽巡、駆逐艦の改装内容です。次回「改装内容後半」をお送りします」

第14話 改装内容後半

続きです。どうぞ

高雄・妙高型重巡

全長 220m

全幅 変わらず

基準排水量 1万9900t

満載排水量 2万6700t

速度 50ノット

航続距離 18ノットで1万2000海里

武装 60口径25.5?3連装主砲5基15門

50口径12.7?3連装高角砲10基30門

62?4連装魚雷発射管6基

40mmレーダー連動機関砲30基120門

37mmレーダー連動機銃 30基90門

20?36連装噴進弾6基

水上機 6機

カタパルト 2基

最上型重巡

全長 230m

全幅 変わらず

基準排水量 2万1000t

満載排水量 2万7300t

速度 50ノット

航続距離 18ノットで1万2200海里

武装 60口径25.5?3連装主砲5基15門（最上のみ4基12門）

50口径12.7?3連装高角砲10基30門
62?4連装魚雷発射管6基

40mmレーダー連動機関砲30基120門

37mmレーダー連動機銃 30基90門

20?36連装噴進弾6基

水上機 6機（最上は航空重巡のため20機を露天繫止で搭載可能）
カタパルト 2基

青葉・古鷹型重巡

全長 220m

全幅 変わらず

基準排水量 1万9500t

満載排水量 2万5200t

速度 50ノット

航続距離 18ノットで1万2000海里

武装 60口径25.5?3連装主砲5基15門

50口径12.7?3連装高角砲10基30門

62?4連装魚雷発射管6基

40mmレーダー連動機関砲30基120門

37mmレーダー連動機銃 30基90門

20?36連装噴進弾6基

水上機 6機

カタパルト 2基

利根型航空重巡

全長 240m

全幅 20m

基準排水量 2万1800t

満載排水量 2万7300t

速度 50ノット

航続距離 18ノットで1万2000海里
武装 60口径25.5?3連装主砲4基12門
50口径12.7?3連装高角砲16基48門
62?4連装魚雷発射管6基
40mmレーダー連動機関砲30基120門
37mmレーダー連動機銃 30基90門
20?36連装噴進弾10基
水上機 15機
カタパルト 2基

天龍・球磨・長良・川内・夕張型軽巡

全長 190m

全幅 17m

基準排水量 7000t

満載排水量 8100t

速度 53ノット

航続距離 18ノットで1万1800海里

武装 60口径15?3連装主砲4基12門

50口径12.7?3連装高角砲12基36門

62?4連装魚雷発射管4基

40mmレーダー連動機関砲20基80門

37mmレーダー連動機銃30基90門

20?36連装噴進弾6基

水上機 4機

カタパルト 2基

峯風・睦月・吹雪・初春・白露・朝潮型駆逐艦

全長 160m

全幅 変わらず

基準排水量 3000t

満載排水量	3500t
速度	60ノット
航続距離	14ノットで1万海里
武装	60口径12.7?連装主砲4基8門
	62?4連装魚雷発射管4基
	40mmレーダー連動機関砲20基80門
	37mmレーダー連動機銃20基60門
	ヘッジホック2基
	爆雷投下台6基

第14話 改装内容後半（後書き）

作者

「これで改装などの説明は終わったな」

暁

「長かったですよ」

炎龍

「そういえば改装でトップヘビーになる可能性が・・・」

作者

「それは武装の軽量化や重心バランスなどを考えて改装などを行っています。関係ない話ですが今日は2話投稿する事になりました」

水龍

「いいじゃないの、本編からずれた分の修正にもなるから」

作者

「ずれた分って・・・」

佐渡

「そろそろ次回を」

作者

「次回は開発した最新鋭兵器が登場します。次回「最新鋭登場」お楽しみに」

第15話 最新鋭登場

1938年10月10日 海軍横須賀飛行場

ここに多数の飛行機が並んでいる。よく見ると低翼単葉であるが固定脚ではない。

これを見ている人間がいた。構成は海軍から米内光政総理大臣、山本五十六連合艦隊司令長官、小沢治三郎、山口多聞、南雲忠一、そして如月である。陸軍からは陸軍大臣の宇垣一成、石原莞爾で、三菱の堀越二郎技師、昭和天皇も来ていたのである。

天皇

「あれらが開発した最新鋭機なのか？」

如月

「はい、陛下。この戦闘機達は未来の後知恵をも使って完成しました」

完成したのは後に『零戦』となる『一二試艦上戦闘機』『天山』となる『一八試局艦上攻撃機』『彗星』となる『二三試艦上爆撃機』『流星改』となる『一六試艦上攻撃機』『隼』となる『キ43』『鍾馗』となる『キ44』である。

堀越

「『零戦』のスペックとしましては、発動機を『誉』エンジンにし搭載した事により、高度6000mで587?/h、高度6000mまで5分12秒。武装は機首20mm機銃2挺、翼内12.7mm機銃4挺、爆装ですと500?爆弾1発、翼に60?爆弾2発ま

で搭載可能です。航続距離は3400?となります」

ちなみに『誉』エンジンは事実のとは全くと言っていいほど変わっており2000馬力と大出力でありながら量産性も優れていて中島飛行機のライセンス生産品である。

宇垣

「ほう、我が陸軍にも欲しいな」

堀越

「陸軍には『零戦』の陸軍版であります『隼』と『鍾馗』があります。それに関しては糸川技師が」

糸川

「『隼』のスペックは『誉』を搭載し高度6000mで551?/h、高度6000mまで5分52秒、武装、爆装は一緒に航続距離は3300?で、『鍾馗』は局地戦闘機として開発したため高度6000mで566?/h、高度6000mまで4分54秒、武装は翼内20mm機銃4挺もしくは12.7mm機銃6挺、爆装は一緒に航続距離は2000?となります」

石原

「素晴らしいではないか」

堀越

「全機体には防御装甲、防弾ガラス、脱出装置、自動消火剤を常備できるように設計しました。けどこれで貴重な熟練搭乗員の命が守れるなら安いものです」

これらを命令したのは如月で事実のようにすぐ落ちてしまい戦死率

が7／8割という航空隊もあり、これでは貴重な搭乗員が少なくない結果特攻という考えになってしまったという事を防ぐために設計者に命令した。

翌日11日 富士陸軍演習場

この日も昨日来た人に加えバレン西こと西竹一、栗林忠道、そして10名位の陸軍軍人が来ていた。

そして山本に一人の陸軍軍人が近づいてきた。

？

「山本長官ですね？」

山本

「そつだが、あなたは？」

？

「私は新型戦車開発会議のメンバーであります重見伊佐雄中佐です」
そう言い終わると2両の戦車がやってきた。

如月

「開発した新型戦車はあれですか？」

重見

「そうです。右から九八式中戦車『チホ』で左は九八式重戦車であります。『チホ』のスペックにおきましては最大速度50？／h、航続距離300？、武装は貫通性に優れた50口径50mm戦車砲、12・7mm機銃2挺、九八式重戦車は最大速度45？／h、航続

距離330?、武装は40口径100mm滑空砲、12・7mm機銃3挺となります」

如月

「そういえば君達の中では九七式中戦車の方がアメリカの戦車より優れているという奴らがいるが本当か?」

重見

「はっ、そうであります。現時点で来ている人もいます」

如月

「あれを見せるしかないな」

山本

「あれって?」

如月

「言うより見たほうが早いです」

そう言う後ろから二両の戦車がやってきた。

如月

「ドイツ陸軍から輸入した四号戦車、六号戦車です」

九七式中戦車の戦車砲はドイツの戦車を貫けず逆にドイツの戦車砲によってジュミラルンの塊になってしまった。

精神論に凝り固まった陸軍首脳部を一瞬にして沈黙させてしまった。

九八式重戦車が四号戦車に日本軍初の滑空砲を発射するとなんと前

部を貫通した。

栗林

「すごいな滑空砲とやらは」

宇垣

「私としてはこの九八式重戦車を正式採用したいな」

如月

「閣下そう言うかと思つて生産性も高い傑作戦車となっています」

こうして陸海そしてできたばかりの空軍三軍の最新鋭兵器が完成し
着実に日本は変わりつつあった。

第15話 最新鋭登場（後書き）

作者

「一日に二話投稿するってすごいな」

炎龍

「そうだな作者、それよりも2000馬力なのに587？/hしか出ないとはどういうことだ」

作者

「それはネタばれになってしまいましたが改良機ができるので問題ないと思います」

水龍

「そろそろ次回を」

作者

「さて次回はある事件が勃発します。次回「ノモンハン事件1」お楽しみに」

第16話 ノモンハン事件1

昭和一四年（1939）五月一日

この世界でもノモンハン事件が起ころうとしていた。そのため陸海空軍は戦力を国境に配備した。

ハイラル航空基地

？

「あれが海空軍の最新鋭機なのか？」

？

「はい、海空軍が開発しました零式艦上戦闘機『零戦六二型』、『天山一型』、『彗星二一型』、『流星改一型』、『彩雲二一型』そして零戦の後継機の『烈風一型』です」

質問したのはハイラル航空基地司令の嵯峨徹二中将で答えたのは海軍航空隊隊長の淵田美津雄中佐である。

嵯峨

「しかしなぜ彼女達まで」

実は二年前から女性航空隊の育成が始まっており実戦経験として各女性航空隊を集めたためここにいるのである。

淵田

「しかし山口少将は『女性を甘く見ないほうがいいと思うな』と言っていました」

淵田は嵯峨中将に報告した

ハイルルに來た航空機は『零戦六二型』百二十機、『天山一型』百二十機、『彗星二一型』百二十機、『流星改一型』百二十機、『彩雲二一型』百二十機、『烈風一型』百機であり元からいた陸軍機は『隼三型』百二十機、『鍾馗二型』百二十機、『飛燕一型』百機、『九六式陸攻』百二十機、『一式陸攻』百二十機そして最新鋭四発爆撃機として『呑龍』が百二十機である。

淵田

「戦況はどうなっていますか？」

嵯峨

「今の所は膠着状態だ。それにしてもあの戦車は凄いと改めて思うぞ」

あの戦車とは九九式中戦車『チト』と九九式重戦車のことである。

参謀A

「では全航空機を持ってソ連を叩きますか」

嵯峨

「うむ、それがいいな」

？

「待ってください」

そう言ったのは事実で加藤隼戦闘隊の隊長として有名になる加藤建夫中佐である。

嵯峨

「どういうしたのかね？」

加藤

「目先の敵を叩くよりも敵の補給線を潰したほうがいいと思います」

加藤はきっぱりと言った。

嵯峨

「何故だ？」

加藤

「未来からの情報によりますとあのガダルカナル島を思い出してください」

全員がはっとした。

嵯峨

「補給か・・・」

嵯峨中將が呟いた。

淵田

「確かに補給さえ断てばソ連の勢いは弱まると小官は思います」

淵田の言葉に他の者が頷く

嵯峨

「よし敵の補給線を叩こう。偵察部隊に補給線の場所を偵察してき

てくれ」

全員

『はっ！！！！』

全員が嵯峨中將に敬礼し各自の持ち場に戻った。

やがて彩雲偵察機による偵察部隊が帰還し補給線が地図に書き込まれていく。

嵯峨

「よし全機、明日に出撃だ！」

翌日

嵯峨

「全機出撃せよ！」

爆装した天山一型、彗星二型、流星改一型、九六式陸攻、一式陸攻、呑龍が轟音を唸らせて大空に舞い上がっていく。

爆撃機の護衛として零戦六二型、烈風一型、隼三型、鍾馗二型、飛燕一型が出撃していく。

攻撃機部隊は決戦の地であるノモンハンに向かった。

こうして日本軍初の大規模な航空戦と陸上戦が開始された。

第16話 ノモンハン事件1（後書き）

作者

「また終わった」

佐渡

「そう言えばなぜ隼や鍾馗や飛燕や烈風などがいるんですか？」

作者

「それは技術的開発により早期完成したからだよ」

雷龍

「噂ではただの好みだからという事があるけど？」

炎龍

「ほう、覚悟はいいな？（刀の柄を握りながら）」

作者

「ソナコトハナイデスヨゼツタイ」

水龍

「今片言になっている」

炎龍

「ちよつとこつちにこい。なに命までは取らん」

作者

「ちよつと待てったらおい」

作者の襟をつかみながら隣の部屋に連れていく

雷龍

「しょうがない私がやろう。次回は航空戦と陸上戦が行われるぞ。次回「ノモンハン事件2」ご期待を」

第17話 ノモンハン事件2

ノモンハン上空

現在ノモンハン上空には『零戦六二型』百機、『烈風一一型』百機、『隼三型』百機、『鍾馗二型』百機、『飛燕一型』八十機が先回りして敵を待ち伏せていた。

キラアアアアー！ー！ー！！

加藤

「来たぞ！全機必ず二機で行動せよ！」

来たのはソ連機であるI-15、I-16がそれぞれ40機ずつ、編隊を組んでやってきた。

加藤

「喰らえ！」

愛機である隼3型の機首20mm機関砲が火を噴く。そしてI-15の翼が折れエンジンから火を噴きながら落ちていく。

一方最新鋭機である烈風一一型を操る女性航空隊、通称『大和撫子航空隊』は烈風の圧倒的な機動性と機首30mm機関砲2門と翼内20mm機関砲4門という圧倒的な火力でI-15、I-16を次々と落としていった。

？

「落ちろー！」

そう言ったのは『大和撫子航空隊』隊長の笹原美樹中佐である。

笹原は機関砲のボタンを押す。すると機首30mm機関砲が唸りI-16のエンジンに当たると火を噴きながら爆発した。

しかし

笹原

「しまった」

I-16から後ろを取られてしまったが

ズガガガガーーン！

どこからか機関砲が飛んでくるとI-16の翼に当たり翼が吹き飛んだ

？

「隊長油断しないでください」

無線から聞こえてきたのは副隊長である宮間渚少佐であった。

笹原

「ありがとうな宮間！次行くぞ！」

宮間

「はい隊長！」

その後敵編隊は全機撃墜した。味方の損害はゼロ、完勝であった。

また、攻撃部隊による補給線攻撃によりソ連軍はこれにより苦戦していくことになっていった。

一方、陸上戦でも日本軍とソ連軍は激突していた。

ノモンハン

ゴゴゴゴゴゴー！！

日本軍は九八式重戦車と九九式重戦車そして国防陸軍の七四式戦車改、九〇式戦車改そして最新鋭の一五式戦車を先頭に進軍していた。

ドウウウーーン！ドウウウーーン！

ソ連のBT-5戦車、BT-7戦車、T-26軽戦車が発射した。

カキイイーーン！カキイイーーン！

しかし全車両を貫くことができなかった。

ソ連戦車兵

「何だと！」

彼に限らず全員が驚愕した。

自動車後退国がこんな戦車を作ることが信じられないからであった。

西

「撃たれたら撃ち返せ！」

戦車部隊指揮官である西竹一中佐の搭乗する九九式重戦車の50口径105mm滑空砲が放たれる。

ドガガガガーン！

BT-5戦車が一瞬にしてジュミラルンの塊と化した。

ズババババーン！

さらに九八式重戦車、九九式重戦車に搭載した2基の60mm6連装ガンランチャーがT-26軽戦車の上空で空中分解し中の炸裂弾がT-26に容赦なく降ってくる。

バアアアアーン！バアアアアアーン！

立て続きに撃破されていくソ連戦車隊、そのほかに多連装噴進弾を搭載した九八式装甲戦闘車が装甲車に狙って一斉に噴進弾を降らせ撃破していく。

次々と撃破される戦車隊を見て、ソビエト・モンゴル軍集団司令官のジューコフ司令は遂に撤退を決意し各部隊に連絡し撤退させた。

しかし37mm対戦車機関砲を積んだ襲撃部隊が残った戦車隊に機関砲を放って行く。

補給を済ませた攻撃部隊や航空隊は撤退するソ連軍に次々と30？爆弾や60？爆弾さらには500？爆弾をも投下、その後に機銃掃射を行い徹底的に攻撃した。

同じ頃、事実ではなかった作戦が行われようとしていた。

第17話 ノモンハン事件2（後書き）

作者

「今までの中で本格的な戦闘を書いたぞ」

炎龍

「しかし圧倒的なのでは？それに60mm6連装ガンランチャーってなんだ！あれかもしかして」

作者

「その通りです。着脱式のガンランチャーです」

雷龍

「最後のなんだあれは？」

作者

「これと言ってしまうとネタばれになるのでノーコメントで」

水龍

「次回をお願いします」

作者

「次回はウラジオストク・ナホトカへの攻撃が行われます。次回「ノモンハン事件3」お楽しみに」

第18話 ノモンハン事件3（前書き）

登場人物紹介

笹原美樹

身長162？

年齢18歳

階級中佐

日本初の女性航空隊『大和撫子航空隊』の隊長で腕は加藤中佐並で性格は少し無茶をするタイプである。

宮間渚

身長160？

年齢17歳

階級少佐

『大和撫子航空隊』の副隊長で無茶をする隊長のストッパー役であり性格は真面目である。

第18話 ノモンハン事件3

ウラジオストク沖1000?

暁 CIC

水兵

「ウラジオストクまで後1000?です」

如月

「分かった。しかし壮大だな」

有賀

「けれど両軍港を攻略するのにこんなに戦力が必要なのですか?」

何を言っているのかそれはソ連極東艦隊の拠点であるウラジオストク・ナホトカを上陸による制圧作戦をやるうとしていた。

戦力は彼ら連合艦隊第二艦隊と二か月前に竣工した戦艦『大和』、『武蔵』空母『翔鶴』、『瑞鶴』、『飛鷹』、『隼鷹』、『蒼龍』、『飛龍』、『信濃』、『紀伊』改装が終わった戦艦『長門』、『陸奥』、『扶桑』、『山城』、『伊勢』、『日向』、『金剛』、『比叡』、『榛名』、『霧島』空母『赤城』、『加賀』、『鳳翔』、『龍驤』、『瑞鳳』、『祥鳳』、『龍鳳』、『千歳』、『千代田』で要約すると戦艦18隻、空母31隻重巡20隻、軽巡11隻、駆逐艦30隻、イージス艦40隻さらに強襲揚陸艦100隻の特別編成艦隊である。

如月が圧倒的な戦力に感慨に浸っている所に

？

「お兄ちゃん」

如月

「わぁ隼鷹じゃないか」

いきなり如月の後ろから抱きついてきた見た目が13歳位の短いツインテールの少女は飛鷹型空母二番艦である隼鷹の艦魂の隼鷹である。

隼鷹

「お兄ちゃん、私と一緒に遊んでよ」

如月

「隼鷹今はちょっと、それよりいいのか持ち場を離れて？」

隼鷹

「いいんだよお兄ちゃんのためなら」

？

「こらっ、ここにいたのね隼鷹」

来たのは14歳位の至って真面目な性格の飛鷹型空母一番艦飛鷹の艦魂、飛鷹である。

隼鷹

「飛鷹お姉ちゃん」

飛鷹

「まったく何処に行っていたかとまた如月司令の所なのね。ほら行

きますよ如月司令も迷惑していますよ」

隼鷹

「えーっ、もう少しお兄ちゃんの所に居たいのに」

如月

「別に迷惑していないけど、そろそろ作戦時間だろ、持ち場に戻った方が」

隼鷹

「ぶっこれが終わったら遊ぶって約束してよね？」

如月

「ああ約束する」

隼鷹

「分かった、お姉ちゃん行こう」

そう言うと二人はそれぞれの艦に戻って行った。

そして

水兵

「作戦時間です！」

如月

「全戦艦一斉発射！」

ドオオオーーーーン！ドオオオオーーーーン！

発射したのは暁型66?60発、慶良間型60?30発、大和型51?30発、長門型46?16発、扶桑、伊勢、金剛型41?72発がウラジオストク・ナホトカに降り注いでいく。

さらに空母31隻からの爆装した艦載機が対空陣地や司令部を攻撃していった。燃料タンクは命令により狙わなかった。

一段落すると各軍港に二個師団の上陸部隊が強襲揚陸艦に乗って上陸し難なく制圧した。

第18話 ノモンハン事件3（後書き）

作者

「終わったぞ」

隼鷹

「皆さん、お兄ちゃん専用の癒し系キャラ兼アイドルの隼鷹です」

水龍

「ほづ、これは私に対する宣戦布告ですか？」

如月

「作者に言われて来たら一体何が起こっているんだ？」

隼鷹

「わぁーお兄ちゃんだ」

そう言いながら如月に抱きついた。

水龍

「ちょっと何しているんですか！」

隼鷹

「アイドルならこんな事をしないと」

水龍

「うっくやしい」

炎龍

「ほう作者、私のかわいい妹を泣かせるとはいいい度胸だ」

雷龍

「そうだな姉貴、こういう奴にはお仕置きが必要だな」

作者

「ちよつと待てつたらおい」

二人は作者の襟を掴み隣の部屋に連れていく。

作者

「ぴぎやややーーーー!!」

隼鷹

「作者がいないので私が、次回はソ連との講和を描きます。次回「ノモンハン事件講和」お楽しみに」

第19話 ノモンハン事件講和と戦勝宴会（前書き）

実は前のあとがきで戦勝宴会の事について書き忘れたので突然ですが戦勝宴会の方も追加します。

第19話 ノモンハン事件講和と戦勝宴会

モスクワ

ここでノモンハン事件に関する話し合いが行われた。

満州国とモンゴルの国境線について日本側の要求通りになり国境線はハルハ川に置く事となった。

またソ連は日本が占領したウラジオストク・ナホトカさらに北樺太を割譲すると言いついてきたので日本政府は混乱した。

今回の事件であつて戦争ではなかったためである。

そのため米内総理は如月と相談した。

米内

「ソ連の割譲についてどう思っているかね？」

如月

「ソ連は日本に恩を売りたいのでしょう、大戦になった時にドイツとの挟み撃ちにならないための安全が欲しいのでしょう」

米内

「なるほど、中国から引き揚げた兵士を満州に動員するか」

如月

「北樺太には油田があり対米戦になったとしても石油不足は防げます」

米内

「それなら北樺太などの割譲を受け入れよう」

そしてモスクワで休戦条約が結ばれ、ウラジオストク・ナホトカ・北樺太は日本の領土となった。

その夜

如月は事件後の処理をしていた。そんな中突然隼鷹がやってきた。

隼鷹

「お兄ちゃん」

如月

「隼鷹か、何しに来たのか？」

隼鷹

「あのね皆が戦勝会をするって、それにお兄ちゃんも連れて行きたいから来たの」

如月

「ふっそうか。でどこでやるんだ？」

隼鷹

「旗艦の大和の予備会議室」

如月

「分かった」

そう言つと向かおうとした所

隼鷹

「お兄ちゃん、私が連れてつてあげるよ」

如月

「できるのか？」

隼鷹

「任せて」

そう言つて二人は大和の予備会議室に飛んで言った。

予備会議室

隼鷹

「皆お兄ちゃんを連れて来たよ」

？

「おお来たか隼鷹」

？

「如月司令お待ちしていました」

如月の目の前にはたくさんの艦魂がいておりいつ来たのか有賀や音羽もいた。

如月

「誰なんだお前は？」

？

「自己紹介がまだだったな。私は金剛型戦艦一番艦金剛の艦魂の金剛だ」

金剛といった22、3歳位の金髪の女性は後で聞いたのだが艦魂達の中では『鬼の金剛』と呼ばれているらしい。

？

「私は金剛型戦艦二番艦比叡の艦魂の比叡と申します」

比叡は20歳位の優しそうな礼儀正しいお姉さんに見える。

？

「金剛型戦艦三番艦榛名の艦魂の榛名だ。よろしくな司令殿」

榛名は比叡と同一年に見えるのだが比叡とは性格が逆と思った。

次は霧島だなと思ったらその本人は比叡の後ろに隠れっぱなしで

比叡

「ほら霧島、如月司令に挨拶しなさい」

そう言つて霧島と呼ばれた16歳位の少女は

霧島

「金剛型戦艦4番艦霧島の艦魂の霧島です。よろしく……お願いします……」

そう言つとすぐに比叡の後ろに隠れてしまった。

？

「私は扶桑型戦艦一番艦扶桑の艦魂の扶桑だ。よろしく」

扶桑と言った女性は18歳位で黒髪を肩まで伸ばしていた。

？

「扶桑型戦艦二番艦山城の艦魂の山城だ。よろしく」

山城は17歳位で長い黒髪を腰まで伸ばしていた。

？

「伊勢型航空戦艦一番艦伊勢の艦魂の伊勢です。よろしくお願いします」

伊勢は18歳位で栗色の髪を肩まで伸ばしていた。

？

「伊勢型航空戦艦二番艦日向の艦魂の日向だ。よろしくな如月司令」

日向は17歳位で茶髪をポニーテールにしている。

？

「連合艦隊旗艦大和の艦魂の大和です」

？

「・・・武蔵の艦魂の武蔵です。・・・よろしく」

大和は短いポニーテールをしれいて、武蔵は短い黒髪をしていて無口である。

第19話 ノモンハン事件講和と戦勝宴会（後書き）

作者

「終わった」

山城

「あとがきに参加することになった山城だ。よろしく」

炎龍

「しかし最後のあれはなんだ？」

作者

「あまり言えませんが対米戦に備えて兵器の設計図書きに行ったのだ」

佐渡

「それってまさか・・・核弾頭」

作者

「そんなことはありません！絶対！」

雷龍

「そつだ最悪共倒れだからな」

慶良間

「ちゃっかりと失礼する。佐渡それはさすがに如月司令はそんなこととはしませんよ」

佐渡

「そうですね」

隼鷹

「そろそろ次回を」

作者

「次回はある設計図の内容を描きます。次回「第一期新兵器案」お楽しみに」

第20話 第一期新兵器案

如月が対米戦に備えて書いた航空機の設計図は早速開発部に提出され開発されることになった。主な物はこちら

双発爆撃機『銀河』

全長 14.8m

全幅 22m

発動機 『誉』二一型二発

最大速度 562?/h(高度6000m)

航続距離 5800?

武装 20mm旋回機関砲4挺(機首1後部1上部2)

雷装 1t魚雷

爆装 500?爆弾2発

1t爆弾1発

特殊誘導弾『桜花』1発

四式爆撃機『飛龍』

全長 19m

全幅 23m

発動機 『誉』二一型二発

最大速度 578?/h(高度6000m)

航続距離 6000?

武装 20mm旋回機関砲4挺(機首1後部1上部2)

雷装 1t魚雷

爆装 500?爆弾2発

1t爆弾1発

『桜花』1発

四発重爆撃機『連山』

全長 23 m

全幅 33 m

発動機 『誉』二一型四発

最大速度 603? / h (高度6000 m)

航続距離 7500? (重量によって変化)

武装 20 mm旋回機関砲8挺(機首2上部4後部2)

爆装 1 t爆弾4発

500?爆弾8発

250?爆弾16発

『桜花』2発

局地戦闘機『震電』

全長 9.91 m

全幅 11.2 m

発動機 『誉』三二型

最大速度 777? / h (高度6000 m)

航続距離 2000?

武装 機首30 mm機関砲4門

噴進弾12発

事実では実戦導入ができなかった局地戦闘機で未来の技術で早期完成ができた。改装する事で艦上戦闘機としても運用ができる。特徴としては二重反転プロペラを採用し逆ガル翼となっている。

ジェット戦闘機『火龍』

全長 10.5 m

全幅 12.7 m

発動機 『ネ20』二発

最大速度 930? / h

航続距離 1700?

武装 機首30mm機関砲4門

噴進弾12発

雷装 1t魚雷

日本いや世界初のジェット戦闘機で陸軍名は『火龍』、海軍名は『橘花』で本来ならば対米戦前に導入したかったが偽装のためわざと遅らせて運用した。

超大型六発戦略重爆撃機『富嶽』

全長 33.9m

全幅 45m

発動機 『誉』七二型(5200馬力)六発

最大速度 782?/h(高度8000m)

航続距離 30000?

武装 30mm連装旋回機関砲12基24門(上部3基、胴部3基
ずつ、下部2基、後部1基)

爆弾搭載量 20t

事実では机上プランだけで終わったがこの世界では開戦時もしくは開戦前半に完成できるように陸海空軍が一致団結して開発している。なお掃射型や輸送型なども開発されている。

特殊誘導弾『桜花』

全長 7m

全幅 5m

発動機 ロケットエンジン4発

速度 770?/h

航続距離 100?

爆弾搭載量 2t炸裂弾もしくは2t徹甲弾

事実では有人特攻機であるがこれは赤外線と内蔵レーダーによる無人誘導弾であり各爆撃機に搭載し敵艦艇にダメージを与える事ができる。

第20話 第一期新兵器案（後書き）

作者

「書き終わりました」

山城

「しかし桜花を誘導弾にするとは」

暁

「しかも今回紹介した機体にも運用ができると書いてありました」

作者

「さすがに2t炸裂弾が当たれば重巡以下なら確実に轟沈できるほどの威力ですから」

隼鷹

「そろそろ次回を」

作者

「次回はまさかの事態が起こります。次回「陸軍反乱」ご期待を」

第21話 陸軍反乱

昭和14年（1939）10月3日 帝都

夜も明けぬ帝都をトラックで移動する集団がいた。

この集団が向かう場所は・・・

兵士

「各部隊準備完了！」

隊長

「では始めてくれ」

午前6時、配置していた分隊、中隊規模の部隊は首相官邸、参謀本部、陸軍省、警視庁、海軍省・軍令部などを瞬く間に占領した。たった一つを除いて

彼らはなんとクーデターを行っていたのだ。

彼らは今行っている改革に反発しておりさらには中国からの撤退など陸軍の、特に若い士官達は人一倍に反発、一部の過激な士官達がクーデターを計画しそれに陸軍が立ち上がりクーデターが勃発した。

首謀者はなんと悪名高き独断参謀の辻正信中佐であった。

兵士

「中佐、参謀本部の制圧に成功しました」

兵士

「同じく警視庁も占領しました」

辻の元には続々と朗報が入っていく。

しかし・・・

兵士

「た、大変です！海軍省・軍令部に大隊規模の部隊が展開しています！」

辻

「何だと！」

兵士

「さらに部隊には1個戦車大隊も確認できます！」

兵士

「見張りから東京湾に機動艦隊が現れました！」

辻

「馬鹿な、一体誰なんだ？こんなに早く部隊展開できる奴は？」

海軍省・軍令部

西

「全車！敵が発砲する行動を取ったら砲撃せよ！」

そう言って西は目の前にいる反乱部隊を見据えた。

読者はこれでお分かりだろう。

海軍省・軍令部に展開したのはノモンハン事件の時に活躍したバレン西こと西竹一中佐率いる九九式重戦車隊を中心とする精鋭部隊である。

一方東京湾に居る第二艦隊と特別編成艦隊＋最新鋭艦である戦艦『輝龍』『神龍』『大淀』『仁淀』『空母』『大鳳』『海鳳』『雲龍』『天城』『葛城』『羽田』『伊丹』『重巡』『伊吹』『吾妻』『飯豊』『蔵王』『軽巡』『阿賀野』『能代』『矢矧』『酒匂』『吉野』『吉井』さらには駆逐艦が多数と合計150隻近い艦隊が反乱部隊が立てこもっている陸軍省に艦砲の狙いを定めている。

海軍省の一室

臨時の鎮圧司令部では米内首相、堀海軍大臣（堀とは堀悌吉の事）宇垣陸軍大臣、山本長官、そして如月が集まっていた。

如月

「まさかクーデターまでやるとは、どこまで反発的なんだ陸軍は！」

山本

「情報によると海軍省・軍令部以外は占領されたらしい」

如月

「そうですか、それより・・・」

いきなり水兵が部屋に飛び込まんばかりに入ってきた。

水兵

「大変です！彩雲偵察機によりますと敵中隊が皇居を囲んでいます！」

如月

「まずいぞ！奴ら天皇陛下を使うに違いない！近衛師団に連絡を！」

「それなら大丈夫だ」

声が聞こえ全員が後ろを振り向くとそこには昭和天皇だった。

天皇

「クーデターの報告を聞いて脱出しようとした時にちょうど彩雲が来て脱出できたのだ」

如月

「そうですか、では反乱部隊に呼びかけましょう」

天皇自身がラジオを通して行った原隊復帰勧告はクーデター部隊の特に辻中佐から偽の命令書で集められた兵士に効きほとんどの兵士が原隊に戻って行った。

反乱部隊の中枢にいた人物は全員逮捕し裁判にかけられた。さらに戻った士官達からの証言により革命反対派を逮捕した。

結果、革命反対派は完全に沈黙し今後改革を阻む壁はほぼ払拭した。

第21話 陸軍反乱（後書き）

作者

「ついに艦魂会のメンバーになりました」

暁

「よかったですね」

隼鷹

「これでお友達が増えますね」

炎龍

「まあよかったな作者」

作者

「これからも作品を書き続けますので皆さんよろしくお願いします」

水龍

「そつえば他の作者さんのキャラは来ないの？」

作者

「それはまだ未定です」

雷龍

「さてそろそろ次回をお願いします」

作者

「さて今回は第二次世界大戦が起こります。次回「第二次世界大戦勃発」お楽しみに」

第22話 第二次世界大戦勃発（前書き）

今回は予定を変更していきます。さらに今回はとても短いです。

第22話 第二次世界大戦勃発

1939年9月1日

ドイツ軍がポーランドに侵攻、この瞬間第二次世界大戦が勃発した。

9月17日 ソ連がポーランドとの条約を一方的に破棄し東側から侵攻。

9月23日 事実よりも5日早い独ソ友好条約が調印。ポーランドを分割独ソの新国境線を決定した。

9月28日 ソ連はバルト3国とフィンランドに対し相互援助条約と軍隊の駐留権を要求。この日はエストニア、10月5日ラトビアと、10月10日にはリトアニアとそれぞれ条約を締結し要求を押し通した。

しかしフィンランドは拒否、ソ連はレニングラード防衛を理由に1月30日にフィンランドに侵攻。(冬戦争)

日本ではドイツとの軍事条約を締結させようと陸軍を中心に唱えていたが政府の重役全員が親米英派でさらに如月から事実を言っていたため政府は反独派であり8月23日の独ソ不可侵条約はノモンハン事件直後の事もありドイツとのすべての条約を破棄。これよりドイツから離れていく事となった。(一説によるとこの事もクーデターの動機だとクーデターに参加した将校が語った)

第22話 第二次世界大戦勃発（後書き）

作者

「今回はとても短かったです」

暁

「しかし要約し過ぎではないでしょうか？」

炎龍

「まあしょうがないんじゃないの」

作者

「すみません次回はちゃんとします」

水龍

「そろそろ次回をお願いします」

作者

「今回は前できなかった新鋭艦や新鋭機そして新しい仲間が出てきます。次回「新鋭艦と新鋭機と時々飛魂」お楽しみに」

第23話 新鋭艦と新鋭機と時々飛魂

昭和15年（1940）1月24日

呉造船所

ここに連合艦隊旗艦大和の後継艦として建造された『尾張』が今進水しようとしていた。

如月と艦魂達は艦橋付近で尾張の艦魂が出てくるのを待っていた。

進水式が行われ無事に進水できた。

すると艦首付近から光が放たれ光が収まるとそこには18歳前後の女性が礼装に身を包んで直立していた。

まず艦魂達が出向いて挨拶と状況説明をして、急いで予備会議室へと向かった。このとき如月が向かわなかったのは人目を避けるためであった。

予備会議室

如月が予備会議室に入ると先ほど見た尾張の艦魂らしき女性がいた。

？

「お初にお目にかかります。私は大日本帝国海軍尾張型戦艦一番艦『尾張』の艦魂、尾張と申します。以後、お見知りおきを」

尾張の礼儀正しさに驚きながら如月達も礼を返す。驚いたのは尾張

の声はとても低く聞いた者が思わず背伸びしてしまうほどの凜々しさを持っていたからである。

大和

「私は現連合艦隊旗艦の大和です。よろしく願いします」

さつきいなかった艦魂もいたので自己紹介が終えた所で

尾張

「皆さんの事は大体分かりました。しかし軍人である以上威厳や風格を持たないといけません。榛名さんや日向さんあなた達です」

榛名・日向

「「うっ！」」

尾張の容赦ない指摘に二人は思わずたじろぐ。以前から不真面目な性格であったのは自認していたがこうも今日会ったばかりの人に言われては彼女としては面食らうしかなかった。

如月

「しかしな尾張、そんなことでは後の連合艦隊旗艦になったとしても将来部下の心が離れてしまいますよ」

尾張

「しかし司令殿、今甘やかしては不必要な緊張の緩和を招き、やがて士気の低下などを招きます」

金剛

「まあまあ尾張の言う事も分かるがな、確かに部下を甘やかしすぎるのは規律上悪いがだからって気を張り過ぎては将兵や艦魂もすぐ

に倒れてしまう。要は塩梅の問題だろ」

日本海軍最古参艦魂である金剛の言葉で尾張は渋々とだが納得した。

如月是最悪の事態は避けれたと思わず心の中で思ってしまった。

この騒動（？）から三日後

海軍横須賀飛行場

ここに如月が設計した航空機の試作が集結していた。

その中で特に目立つ機体がいた。

その名は『火龍』海空軍名『橘花』世界初のジェット機である。動力であるターボプロップエンジンは彼らが転生した昭和一二年末から始まっておりこの時期に完成した。そのため機体が開発され試作機として完成したのは15機である。

その他に『銀河』『飛龍』海空軍名『靖国』『連山』『震電』がそれぞれ試作が10機ずつ集結していた。

火龍のテストパイロットは全員エースを導入することになった。

加藤

「さてジェット機はどういう物か？」

キユイイイーン！バシユユーン！

加藤

「うっ！」

加藤は今まで味わったことのないGを感じながら加藤の乗る『火龍』は大空に羽ばたいた。

そこからは編隊を組んだりとしていたがいよいよ模擬訓練が行われた。

第23話 新鋭艦と新鋭機と時々飛魂（後書き）

作者

「またやりました」

暁

「しかし尾張さんの性格が」

炎龍

「確かに厳し過ぎでは？」

作者

「けど連合艦隊旗艦になる艦魂ですからこれくらいは必要ですよ」

隼鷹

「そろそろ次回をお願いします」

作者

「今回は予定を変更して飛魂を出したいと思います。次回「飛魂とは」お楽しみに」

第24話 飛魂とは（前書き）

続きます。どうぞ

第24話 飛魂とは

『火龍』 15機は5機3編成の編隊を組み模擬戦闘に入った。

ちなみに編成はこちら

1組目 加藤建夫、源田実、武藤金義、坂井三郎、管野直

2組目 杉田庄一、岩本徹三、笹原美樹、宮間渚、西澤広義

3組目 笹井醇一、篠原弘道、若松幸善、南郷茂男、檜与平

源田

「さて全機編隊を崩すなよ」

1組目全員

「了解！」「了解！」「了解！」

1組目の編隊は2組目の編隊に攻撃を仕掛けに行った。

笹原

「来たわね、全機返り討ちよ」

2組目全員

「了解！」「了解！」「了解！」

一方3組目はというと

南郷

「隊長我々も行きましょう！」

篠原

「いや全機待て、あの戦闘が終わったら突っ込むぞ！」

なんと3組目は漁夫の利を得るうとしていた。

その頃

キイイーーーーン！

1組目と2組目の激しい空中戦が繰り広げていた。

加藤

「中々やるな」

加藤は笹原機と空中戦を繰り広げていた。

加藤

「くっしっこい！」

そう言いながらジグザグで飛行していたが

加藤

「しまった！」

なんと後ろには宮間機と合流し2機掛かりで狙っていた。

笹原

「狙いつ！」

加藤

「まずい！」

笹原機の写真銃が加藤機に狙いを定めて引き金を引こうとした。

すると

？

「左急旋回よ」

何処からもなく少女の声が聞こえてきた。

加藤

「そうか！」

加藤は意味を確認して操縦桿を倒し機体を左へと傾けた。

笹原

「何！？」

一時前まで前に居た加藤機が一瞬にして消えたように見えただからである。

宮間

「隊長上！」

笹原

「はっ！」

上を向いたときには加藤機が急降下しながら写真銃の狙いを定め撃っていたのだ。

宮間

「隊長……」

笹原

「くやしいけど私の負けね」

40分に及ぶ訓練飛行が終わり全機が見事に着陸した。

加藤

「しかし一体誰なんだ？あの声は？」

加藤は分からなかった。その夜

皆が寝ている頃、加藤はあの機体の近くに来ていた。

すると『火龍』の風防の後ろに12歳前後の少女が座っていたのだ。

加藤

「お前は一体誰だ！」

？

「私？私はこの機体の飛魂です」

加藤

「飛魂だと？」

聞いた事があった。機体と共に激戦を勝ち抜きそして機体を本当に

大切にする物のみに見えるだと聞いた。

加藤

「分かった。それにしてもお前の名前は？」

？

「私には名前が無いの」

加藤

「そうか、じゃあお前の名前は火龍の名を取って『火音』だ」

火音

「火音ですか・・・いい名前です。ありがとうございます」

こうして新しい仲間ができた。

第24話 飛魂とは（後書き）

作者

「火龍の飛魂の火音は妹キャラという設定ですけど・・・ライバルが増えるな」

水龍

「お久です。作者様」

隼鷹

「そうですよ妹キャラは私で十分よ！」

火音

「皆さん初めまして火音です。よろしくお願いします」

炎龍

「新参者にキャラが務まりますかね？」

雷龍

「また作者の趣味ですか」

作者

「今回は大丈夫です」

火音

「そろそろ次回をお願いします」

作者

「さて今回は輸送船団についてです。次回「海上輸送護衛艦隊結成」

「ご期待ください」

第25話 海上輸送護衛艦隊結成

2月1日 海軍佐世保軍港

ここに事実で日本軍が軽視した輸送護衛であるがこの世界では1年前から輸送護衛についての計画をしておりそして今日その実りを咲かせようとしていた。

戦力については旗艦の輝龍型護衛戦艦2隻を筆頭に対潜レーダー、ソナーを搭載した海鷹型護衛空母5隻、大鷹型護衛空母5隻、松型駆逐艦18隻、橘型駆逐艦15隻、海防艦30隻と事実とは遙かに優れている。

輸送艦も一等輸送艦は全長100m、全幅12m、速力25ノット
搭載量400t 武装は50口径12.7?連装高角砲1門、40mm連装機関砲4基8門、25mm単装機関砲6基6門、ヘッジホック2基、爆雷48個であり二等輸送艦は全長90m、全幅10m、速度22ノット 搭載量400t 武装は共通であり両艦共量産性が高く起工から進水まで2週間と大変優秀な艦である。

護衛戦艦『輝龍』 防空指揮所

?

「しかし海上輸送なんて必要なかね？」

そう文句を言うのは輝龍型護衛戦艦1番艦輝龍の艦魂の輝龍であり

?

「何言ってるんですかお姉さん？輸送部隊の護衛こそが私達姉妹が

生まれた理由だと如月司令がそう言っていました」

姉をそう諭すのは2番艦神龍の艦魂の神龍である。

輝龍

「しかしよ私達戦艦なのに艦隊決戦じゃなくて輸送護衛だって、まったくあの司令は何を考えてるんだか？」

神龍

「けど艦隊決戦なんて時代遅れです。それに事実みたいにアメリカの潜水艦が暴れて我が軍の輸送艦隊を壊滅まで追い込まれたのを司令から聞きませんでしたか？」

神龍の言葉には理由があり如月は彼女達二人に事実の輸送護衛について話しており自分達の存在意義を教えたのである。

輝龍

「ちえつつまんないの」

そう言っている間にも海上輸送護衛艦隊は輸送任務へと向かおうとしていた。

場所はサウジアラビア王国である。

なぜかというと一年前のノモンハン事件の勝利は全世界に広がり、これに喜んだのはソ連によって苦しまれていた中東諸国であり日本はこれに乗り中東諸国との国交を持ったからである。

サウジアラビア王国から石油や鉄などを輸入する代わりに日本は零戦二一型、隼一型、九七艦攻、九九艦爆などを輸出していった。

こうして対米戦に備えての準備が順調に行われていった。

第25話 海上輸送護衛艦隊結成（後書き）

作者

「終わりました」

暁

「作者さんなぜ遅れたのですか？」

炎龍

「そつだ、またサボりか？」

作者

「いや、この頃忙しくてやっと投稿できました」

雷龍

「まったく起伏の激しい作者だな」

隼鷹

「そろそろ次回をお願いします」

作者

「さて次回は観艦式が始まります。次回「観艦式」お楽しみに」

第26話 皇紀二千六百年観艦式（前書き）

突然ですが11話～14話までの艦艇のデータを大幅に変更します。
理由は艦艇の性能がおかしいという指摘を受けたので性能を変更します。

第26話 皇紀二千六百年觀艦式

1940年5月27日、横須賀沖で皇紀二千六百年觀艦式が開催された。この式典に参加した艦艇は陛下を乗せた御召艦「尾張」を筆頭に

戦艦「大和」「武蔵」「長門」「陸奥」「扶桑」「山城」「伊勢」「日向」「金剛」「比叡」「榛名」「霧島」「美濃」「甲斐」「水戸」「相模」「三河」「遠江」「伊豆」「大淀」「仁淀」「剣淀」「鎧淀」「翔淀」「瑞淀」「輝龍」「神龍」

空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」「翔鶴」「瑞鶴」「鳳鶴」「龍鶴」「天鶴」「隼鶴」「飛鷹」「隼鷹」「天鷹」「翔鷹」「瑞鷹」「大鳳」「海鳳」「天鳳」「雷鳳」「蒼鳳」「桜鳳」「雲龍」「天城」「葛城」「笠置」「阿蘇」「生駒」「鞍馬」「日立」「信濃」「紀伊」「千歳」「千代田」「羽田」「伊丹」「瑞鳳」「祥鳳」「龍鳳」

重巡「高雄」「愛宕」「鳥海」「摩耶」「妙高」「那智」「足柄」「羽黒」「最上」「三隈」「鈴谷」「熊野」「青葉」「衣笠」「古鷹」「加古」「利根」「筑摩」「伊吹」「吾妻」「磐梯」「飯豊」「飯盛」「姫神」「蔵王」「蓬莱」「赤石」「安達太良」

軽巡「天龍」「龍田」「球磨」「多摩」「北上」「大井」「長良」「五十鈴」「名取」「由良」「鬼怒」「阿武隈」「川内」「神通」「那珂」「夕張」「香取」「鹿島」「香椎」「阿賀野」「能代」「矢矧」「酒匂」「吉野」「吉井」「小瀬」「成羽」

駆逐艦「峯風」「澤風」「沖風」「島風」「灘風」「睦月」「如

月『弥生』『卯月』『皋月』『吹雪』『白雪』『初雪』『深雪』
『叢雲』『初春』『子曰』『若葉』『初霜』『有明』『白露』『時
雨』『村雨』『有立』『春雨』『朝潮』『大潮』『満潮』『荒潮』
『朝潮』『陽炎』『不知火』『夏潮』『黒潮』『親潮』『早潮』
『初風』『雪風』『秋月』『冬月』『涼月』『照月』

潜水艦 伊400、伊401、伊402、伊500、伊501、伊
502、伊503、伊600、伊601、伊602、伊603、伊
604

工作艦 『明石』『早柄』『未来』

給糧艦 『間宮』『伊良湖』『野崎』『杵崎』

であり要約すると、戦艦28隻、空母38隻、重巡28隻、軽巡2
7隻、駆逐艦42隻、潜水艦12隻、工作艦3隻、給糧艦4隻、航
空機5000機が参加した。

その他にも第二独立機動艦隊を参加させたかったが何時アメリカの
スパイが見ているか分からないため全艦に光学迷彩を展開させて和
歌の浦湾に停泊していた。

そのため如月は今回だけ尾張に乗っていた。

如月

「しかしすごいな」

参加した艦艇は186隻でありその陣形は少しのずれもない見事で
あった。

天皇

「見事な陣形だな」

山本

「これらはすべて如月君達のおかげだよ」

尾張

「陛下お待ちしておりました」

天皇

「ほう君が尾張の艦魂かね？」

尾張

「はっそうです」

尾張は今までにないほど綺麗に敬礼した。

如月

「陛下、艦魂が見えるのでありますか？」

天皇

「うむ、天皇家は代々に渡って霊的な物が見えるのだ」

如月

「そうですか」

そんな話をしていると艦隊同士に分かれての演習が行われた。

そして無事観艦式は大成功に終わった。

第26話 皇紀二千六百年観艦式（後書き）

作者

「やっとできた」

炎龍

「いつもの勢いはどこに行った！」

雷龍

「1日に1回の投稿はやはりまぐれだったのか？」

作者

「そんなこと言わないでください」

隼鷹

「まあまあ作者だって都合があるんですから」

作者

「ありがとう隼鷹」

水龍

「そろそろ次回を」

作者

「さて今回はアメリカの戦略会議について書きます。次回「戦略会議」ご期待ください」

第27話 戦略会議

6月2日

戦艦尾張会議室

山本

「さて今回の会議内容はアメリカについてだが」

如月

「ええ今交渉を行っていますがアメリカは頑固です」

井上

「このままでは如月君がいた世界と同じアメリカと戦争が起こってしまいます」

山口

「つまり開戦まで後一年と半分です」

如月

「もしアメリカと戦争になったとしても我々は何としても勝たなきゃいけないのです」

山本

「未確認情報だがアメリカ太平洋艦隊の規模が拡大されている」

井上

「どうするのだ？」

如月

「決まってるじゃないですが！陸海空軍・民間問わず協力し合い戦術・戦略を立て外交戦・情報戦・宣伝戦を制すれば戦争に勝てます！」

如月は思わず立ち上がりそう発言した。

山口

「うむっ、その通りだ。いくら交渉で頑張っても、我々の被害が大きければ、アメリカは戦争の長期化を図るつもりだ」

全員が山口少将の言葉に頷いた。

井上

「ところで、どういう風に対米戦を戦っていくのかね？」

如月

「簡単に言うかもしれませんが、攻めて攻めてアメリカの領土を分捕って、そしてワシントンまでも占領するまで戦うまでです」

数時間後

如月

「ふう・・・っ」

尾張から暁に向かう内火艇でため息をつく。

如月

「（さてと、帰ったら対米戦の作戦を立てないと・・・また大変になるな）」

当分は時間に余裕がないとそう思った。

第27話 戦略会議（後書き）

作者

「いやゝ終わりました」

炎龍

「まあ今日は頑張ったな」

作者

「今日はもう一つの方も投稿したので疲れました」

雷龍

「これを投稿するのにすら疲れているのか？」

作者

「・・・（何も言えない）」

隼鷹

「えゝ作者が茫然のままなので私が代わりに。次回はついにあの艦隊が誕生します。次回「第二独立機動艦隊結成と訓練航行」お楽しみに」

第28話 第二独立機動艦隊結成と訓練航行

6月9日

呉海軍基地

ここに大本営直属となった第二艦隊『第二独立機動艦隊』が結成された。

なぜ大本営直属かというと『陸海軍の好き勝手な指揮だけは困る』と如月から言われさらに独立機動艦隊の規模拡大と大戦になった時に捕獲した艦艇の指揮権を要求。困った首脳部は大本営直属で手を打ちそれに第二艦隊が了承したため大本営直属となった。

編成はこちら

旗艦『暁』

第一戦隊『暁』『不知火』『太陽』『召雷』

第二戦隊『慶良間』『佐渡』後に『輝龍』『神龍』も含まれる

第十一航空戦隊『炎龍』『水龍』『雷龍』『風龍』

第十二航空戦隊『桜龍』『氷龍』『鳳龍』『聖龍』

第十三航空戦隊『轟龍』『機龍』『電龍』『海龍』

第十四航空戦隊『飛鷹』『隼鷹』『天鷹』『天鶴』

第十五航空戦隊『隼鶴』『蒼鶴』『桜鶴』『天鳳』

第十六航空戦隊『翔鷹』『瑞鷹』『雷鳳』『蒼鳳』

第十七航空戦隊『桜鳳』『幻龍』『霸龍』『閃龍』

第十八航空戦隊『狼龍』（旧しらね）『迅龍』（旧くらま）『耐龍』（旧ひゅうが）『偵龍』（旧いせ）

第十九航空戦隊『土龍』（旧ふそう）『空龍』（旧やましろ）『山龍』（旧ながと）『湖龍』（旧むつ）

第一護衛戦隊『大電』『蒼電』『飛電』『祥電』『瑞電』『鳳電』

第二護衛戦隊『龍電』『隼電』『海電』『雲電』『夕電』『閃電』

第三護衛戦隊『鋭電』『撃電』『連電』『剣電』『妙電』『鷹電』

第四護衛戦隊『風電』『天電』『轟電』『涼電』『急電』『空電』

第五護衛戦隊『紺電』（旧こんこう）『碧電』（旧きりしま）『極電』（旧みょうこう）『重電』（旧ちようかい）『剣電』（旧あたご）『霧電』（旧あしがら）

第六護衛戦隊『巡電』（旧あきづき）『駆電』（旧ゆきかぜ）『烈電』（旧かげろう）『光電』（旧しまかぜ）『幻電』（旧いかづち）『闇電』（旧いなづま）

同日深夜二時

暁　C I C

なぜ深夜かと言うとアメリカのスパイが何時見ているか分からないため深夜でないと安全に航行できないためである。

如月

「さてと、これから訓練航行を開始する。全艦我に続け」

そう言うのと戦艦六隻、空母三十二隻、イージス艦三十六隻が伊予灘を過ぎ太平洋に出た後輪形陣に艦隊を動かした。

目標は日本の委任統治領であるミクロネシア海域であり全艦隊は速度45ノットで海上を進んでいった。

如月

「もしものことに備え偵察機を発進させろ」

そういった後、空母炎龍、水龍からF-25A型五機ずつと飛鷹、隼鷹から艦上偵察機である彩雲二二型五機ずつが出撃していった。

数時間後、偵察機からとんでもない連絡が入った。

内容は「小島に凄く古い艦艇を確認、艦種は明治の艦艇と思われる」

如月

「そうか・・・よしその小島に進路を変更！全艦隊に通達せよ！」

如月の言葉にC I Cが騒がしくなった。

有賀

「艦長なぜですか？」

如月

「理由か？ そうだな・・・もしかしたら未来では見つからない艦艇かもしれないからだ」

有賀

「見つからない艦艇？」

有賀は意味がわからないのか首を傾げた。

この言葉が分かるのはあと少し後のことである。

第28話 第二独立機動艦隊結成と訓練航行（後書き）

作者

「いや、今日はいいいだ」

暁

「作者の学校では今日は三時間しかなかったからですね」

作者

「今日は四時間もカラオケしてきたぞ」

炎龍

「そうか、それはよかった」

隼鷹

「そろそろ次回を」

作者

「さて次回はあの巡洋艦が見つかります。次回「幻の巡洋艦敵傍発見」ご期待ください」

第29話 幻の巡洋艦敵傍発見

6月10日

偵察機から報告が入ってから第二独立機動艦隊は進路を変更しその島に向かった。

一時間後

如月

「よし、全艦隊機関停止！土龍、空龍、山龍、湖龍に潜水艦警戒用の対潜ヘリを出せ！」

ここで一応説明します。土龍、空龍もとい『ふそう』『やましろ』は改ひゅうが型ヘリコプター搭載護衛艦の一番艦、二番艦として竣工し、山龍、湖龍もとい『ながと』『むつ』は1万9500トン型護衛艦の一番艦、二番艦として竣工した。四艦は『ひゅうが』『いせ』と護衛目標の輸送船団と共に過去にタイムスリップし数奇な運命から第二独立機動艦隊所属となった。

四艦から対潜装備のヘリが出撃し艦隊周りの警戒に当たった。

有賀

「しかし艦長、後ろ姿とはいえ確かに明治の艦艇そっくりです」

如月

「うん、分かっている。上陸して調べよう。だがな人選は？」

有賀

「艦長！私も行きます！」

逢沢

「私も同じく！」

森下

「私もあの艦艇に興味がありますので連れてってください！」

如月

「分かった。人選は俺と有賀、逢沢、森下、後艦魂達だ」

有賀

「艦魂達ですか？」

如月

「一応艦魂に会ったときに役に立つかもしれないからな」

準備が出来上がり四人は内火艇に乗り込み軍艦がいる小島に向かった。

島は偵察機によると丸型で湾があり半月状であった。しかし潮の流れが悪く軍艦の横に上陸が不可能なため少し離れた場所で上陸歩いて向かった。

逢沢

「しかし、すごい事になっています」

森下

「10年、20年放置された所ではありません」

軍艦は錆が付き苔が生えている状態であり、如月はそんな状態の艦尾に書かれているとされている艦名を解読していた。

ラッタルで甲板に上がっているときにかろうじて一文字だけ分かった。

たった一文字でも防衛大学をオール5で卒業した如月にはピンと来ていた。

甲板に上がっても勿論誰もいない。

如月

「では艦内を搜索する。必ず複数で行動し搜索せよ。」

そう言った瞬間

？

「誰だ！貴様らは！」

声のした方を振り向くとそこには一人の少女、というより艦魂がいた。

格好こそは如月達が来ている士官服にそっくりだが、いかにも明治の面影を残している士官服であり、一番の特徴は外国産艦の証である髪型は金髪であった。

？

「もう一回言っ！貴様らは誰だ！言わないと」

そう言ってサーベルの柄に手を添える。

如月

「待ってくれ！我々は大日本帝国軍所属第二独立機動艦隊司令長官の如月大悟大将だ！」

それを聞いた瞬間、彼女はサーベルから手を離し、その場でゆつくりと膝を折り、そして泣きながら

？

「やっと・・・やっと来てくれたんですね」

そう言った後、彼女は号泣した。

一時間後、暁 予備会議室

？

「先ほどは失礼した。私は巡洋艦畝傍の艦魂の畝傍だ」

有賀

「畝傍ですって！艦長！」

如月

「やはり、そうか」

逢沢

「艦長、分かってたんですか」

如月

「ああ、艦尾の艦名を調べていたときに『う』の一字だけ分かっていたんだが『う』の平仮名で20年、30年たっている艦艇と

言ったら畝傍しかないからな」

森下

「なるほど」

暁

「けど、畝傍は南シナ海で行方不明になったんですよ？何でミクロネシアで見つかったんですか？」

畝傍

「私にもよくわからない」

慶良間

「分からないだと」

畝傍

「私は12月3日にシンガポールを出港したんだが途中、嵐に巻き込まれて乗員が一致団結して立ち向かったが」

佐渡

「だが？」

畝傍

「何度かの高波で、船体が海面から浮き上がった事までは覚えてるんだが、気づいた時にはこの島に居てな、艦内を何度も探したが乗員は誰もいなかった」

逢沢

「何ですって、海面から浮き上がる事でも驚きなのに」

森下

「それに気づいた時にはその島に居て乗員は誰もいなかったなんね」

如月

「うーん、海って分からない事がいろいろあるな」

その後、行方不明になった1886年から54年間分の歴史を手短かに話した。

畝傍

「そうか、そんな事が起こっていたなんて」

如月

「そうです、今の世界情勢はあなたが竣工した時よりも混乱となっています。ドイツは独裁主義となり世界大戦を引き起こし、今はイギリス、フランスを相手に戦争中です。アメリカは中国から手を引いたのに我が日本を未だに警戒しています」

こんな話をしながら夜が明けていく。

第29話 幻の巡洋艦畝傍発見（後書き）

作者

「終わりました」

暁

「しかしもしかしてとは思っていましたが」

炎龍

「ああ、まさか畝傍を出すなんて」

作者

「ええ、一応考えられていたので」

雷龍

「それで、畝傍をどうするつもりだ」

作者

「それは次回で」

隼鷹

「そろそろ次回をお願いします」

作者

「さて次回は畝傍の処遇についてお伝えします。次回「畝傍の処遇」ご期待ください」

第30話 畝傍の処遇

翌日

暁 予備会議室

ここに集められたのは如月、有賀、逢沢、森下、宮下と第二独立機動艦隊の艦魂達であった。

如月

「昨晚、畝傍と今後について話し合いました」

有賀

「それで艦長？」

如月

「結果、日本に持ち帰ることになりました」

暁

「本当ですか？」

有賀

「しかし艦長、軍艦とはいえ半世紀前の艦艇ではとても・・・」

如月

「実は『ZZ計画』になかった艦艇のためどうしてもその艦艇の予算が取れなくてな」

逢沢

「それってZ200艦のことですよね」

如月

「そうだ」

有賀

「しかしあの艦艇は計画では基準排水量3万5000トンクラスですよ」

如月

「問題ない、どうせ改良などで何とかなるし」

有賀

「そうですね」

如月

「でもやはり、畝傍をあそこから出さないと話にならない。総員準備に書かれ！」

全員

「了解！」「」

二時間後

有賀

「艦長、ワイヤーの固定準備ができました」

如月

「そうか、では機関長、航海長始めてくれ」

森下・宮下

「「まかせて（よ・ください）！！」」

返事の後、引っ張り作業が始まった。慎重にワイヤーを引っ張っていき、畝傍を島から出していく。

作業から一時間後

水兵

「こちら見張り、無事畝傍は湾から出られました。艦内も損傷がありませんとの事です！」

その報告の瞬間、誰もが喜びあい、万歳三唱の嵐が起こった。

この報告は日本へと伝わり

宇垣

「たっ大変です！長官！」

山本

「どうした、黄金仮面の君がそんなに慌てて」

宇垣

「訓練航行の第二独立機動艦隊より報告です！幻の巡洋艦畝傍を発見し救出作業を終え、只今畝傍と共に帰還する事です！」

山本

「そうか、やはり彼らは・・・」

6月12日無事、第二独立機動艦隊は呉に帰還した。勿論その中に

は畝傍がいた。

第30話 畝傍の処遇（後書き）

作者

「完成しました。後お知らせです」

暁

「何でしょうか？」

炎龍

「作者の事だ、また何かくだらないことだろ」

作者

「そんな事はありません。えゝお知らせとはこの後書きについてです」

水龍

「お知らせ？」

作者

「えーそうです。後書きを変えることで視聴率を上げていきたいと考えました」

暁

「それで何をするつもりですか？」

作者

「次回予告をガンダムSEED DESTINY風にしていきたいと思います」

炎龍

「そりゃいい意見だけどな、考えられるのか毎回？」

作者

「大丈夫です。後次回予告は作者が言うのではなく艦魂達であるあなた達が言う事になっています」

雷龍

「反対はしないけどな、まあがんばれ」

作者

「さて今回から始めます。では暁次回予告をお願いします」

暁

「分かりました。艦隊に助けられた敵傍、そこで目にしたのは半世紀の技術の開きそして新たに生まれる翼に一同は、次回蒼穹の艦隊（第二独立機動艦隊出撃せよ）第31話『次世代の翼』 未来に羽ばたけフリーダム」

第31話 次世代の翼

7月1日

暁 一番砲塔付近

畝傍

「ふーっ、分からない事がたくさんあるなー」

彼女の言葉には無理もない。なぜなら半世紀近く航空機どころか艦艇すら見ていない彼女には理解できない事がたくさんあるからである。

特に航空機と空母に関して、空母の艦魂からの説明でも未だに理解できていないのである。

如月

「畝傍じゃないか」

畝傍

「如月司令殿」

如月

「どうだ、この頃」

畝傍

「ええ、ここの艦魂達が教えてくれるから何とか」

如月

「そうか、無理しなくてもいいんだ。ゆっくり分かれればいいんだから」

畝傍

「そうですよね。では」

そう言うところかに瞬間移動していった。

如月

「さてと俺もがんばりますか」

そう言うと艦内に戻って行った。

翌日

呉造船所

ここに新しい艦艇が生まれようとしていた。その名は『神楽』（かぐら）、正式名称は神楽型巡洋戦艦である。本来この艦艇は重巡洋艦として設計され1939年竣工の計画でいたが、途中通商破壊と水雷戦闘が可能な構造という条件が追加されたため設計を最初から変更したため遅れたため突貫建造により今日竣工したのである。

無事進水式を終え如月は暁の予備会議室へと向かった。

暁 予備会議室

如月が到着すると第一艦隊と第二独立機動艦隊の艦魂と見覚えのない艦魂達がいた。

尾張

「お待ちしていました如月司令。では自己紹介を」

現連合艦隊旗艦の尾張がそう言うと四人の艦魂が前に出てきて

？

「初めまして皆様、私は神楽型巡洋戦艦一番艦の神楽です。よろしくお願ひします」

？

「初めまして、同じく二番艦の天羽です。よろしくお願ひします」

？

「初めまして、同じく三番艦の十六夜です。皆さんよろしく」

？

「初めまして、同じく四番艦の十五夜です。よろしく」

如月

「第二独立機動艦隊司令の如月大悟大将だ。こちらこそよろしくな」

天羽

「えーっ！あの第二独立機動艦隊の司令官ですか！若いです！」

如月

「そうか？今年で27歳だが？」

神楽

「27歳で大将！どんな才能を持っているんですか！」

如月

「何というか、才能と実力・・・かな？」

十六夜

「とにかく優秀な司令官だけは分かる」

如月

「まあ皆、これから神楽達の誕生を祝って宴会でもしますか」

全員

「」「」「賛成！」「」「」

一週間後

横須賀海軍飛行場

現在ここに集まっているのはいつものメンバーに加え山本五十六、源田実、小沢治三郎、大西瀧治郎などと言ったいわゆる航空屋達である。

時間になるとハンガーから三機種の航空機が牽引車に運ばれてやってきた。

三機の内一機は普通の航空機だが残りの二機は特殊な形状である。

運ばれてきた航空機を見てみると堀越技師と見覚えのない二人の技師がやってきた。

？

「皆さん、初めまして私は川西航空機の責任者の菊原静夫と申しま

す」

？

「初めまして私は九州飛行機の責任者の清原邦武と言います」

山本

「早速だが、あの機体の説明をしてくれ」

菊原

「まずは私から、最初に運ばれてきた機体は『紫電』と言います。特徴は新型の発動機であります二六〇〇馬力の出力を誇ります『竜』エンジンを搭載しまして、更に自動空戦フラップや自動消火剤、防弾ガラスと言った新機軸な要素が入った機体でありまして、制式採用の暁には名前を『紫電改』としていく予定です」

如月

「そうか、二〇〇〇馬力以上のエンジンができたのか」

菊原

「はい、これもあなた達の技術提供のおかげです」

清原

「次は私が、真ん中の機体は局地戦闘機として震電の後継機として開発しました『蒼雷』と言います。特徴は新型噴進機関の『ネ20』を導入し、翼は逆ガルでエンテ型と自動空戦フラップを採用しさらに機首には全天候型レーダーと一撃で重爆撃機をも葬る事が出来ます57mm機関砲4門を搭載し、噴進弾の運用も可能な設計となっております。ちなみに一撃離脱型なので格闘戦は烈風に劣りますが零戦よりは優れています。改装によっては艦上戦闘機にもなります」

山本

「何と57mmだと！弾丸数は大丈夫なのか？」

清原

「はい、57mm機関砲の弾丸数は1門につき100発、4門で400発となります」

如月

「ほう、B-29も一撃か、レーダー包囲網との連動でなら蒼雷も強いな」

清原

「はい、未来の情報を元にやっと完成しました。これで帝都の空も安全です」

源田

「最後の機体は？」

菊原

「それは堀越技師からどうぞ」

堀越

「はい、最後の機体は彩雲の後継機として開発しました艦上偵察機『星電』と言います。特徴は『竜』エンジン二基を搭載した事により彩雲を越える速度が期待できます。さらに航空機用レーダーおよび対潜レーダーを搭載したことにより早期発見からの早期迎撃が可能となりました。改良によっては魚雷や爆弾、対潜爆雷、噴進弾を搭載することが可能です」

大西

「すごいな、わが日本の航空技術は」

如月

「ええ、事実の日本の航空機技術は世界に誇れていましたが運用方法や上層部の軽視などで活躍できませんでした。しかしこの世界は違います。運用方法を間違わずにさえすれば通用します」

源田

「乗ってもいいか？」

菊原

「どうぞ」

そう言つて源田は蒼雷に乗って大空に飛んでいき40分後戻つてくると、興奮じみてながら

源田

「これは凄い機体ですよ！この機体が千機あればアメリカにも勝てます！」

山本

「源田サーカスが言うなら本当だ」

山本は三機の機体を見ながらそう言った。

この機体達が活躍する事を祈つて

艦艇説明

神楽型巡洋戦艦

全長	263 m
全幅	35 m
基準排水量	3万5000 t
満載排水量	6万5000 t
最大速度	52ノット
武装	60口径30.5?4連装主砲4基16門 60口径20.3?4連装副砲2基8門 50口径12.7?3連装高角砲20基60門 5連装魚雷発射管6基（内蔵式、重巡のような形） 40mmレーダー連動機関砲70基280門 37mmレーダー連動機銃50基150門 20?36連装噴進弾10基 6連装対潜噴進弾6基 零式垂直発射管100セル 水上機 6機 カタパルト 2基

元々は重巡洋艦として計画されていたが途中の変更により建造が遅れた。そのため排水量などが増えたため戦艦より弱く重巡より強い事から措置として巡洋戦艦となった。

第31話 次世代の翼（後書き）

作者

「完成です」

暁

「しかしもはやすごいとしか言いようがありません」

炎龍

「そつだな、震電の後継機なんてジェット戦闘機だぞ」

作者

「名前の由来は『蒼い空に輝く一筋の雷』の略称です」

雷龍

「なあ思っただけどなんかな、どっかで見た事があるな」

作者

「気のせいでしょう。炎龍次回予告を」

炎龍

「ああ、日本の事実の道それは破滅、破滅から救うために日本は翻弄しそれに大国アメリカは、次回蒼穹の艦隊、第二独立機動艦隊出撃せよ、第32話『和平を求めて』平和の道切り開けデスティニー！」

第32話 和平を求めて

昭和15年以降、如月達が軍拡を行っている頃、水面下ではアメリカとの戦争を外交によって回避すべく日本は翻弄していた。

その事はアメリカの会議でも取り上げられていた。

8月20日

アメリカ合衆国 ワシントンDC

ホワイトハウス 大統領執務室

ハル

「大統領、日本はどうやら戦争だけはしたくないと必死で外交を行っていますが、日本の考えは丸見えです」

そう言ったのはコーデル・ハル国務長官である。

ルーズベルト

「そうだな、やはりジャップ共は愚かだな」

ハル

「そうとは言えません。先ほど陸海軍にノモンハン戦時の戦況などを調べ上げましたが不快な事があるとの事です」

ルーズベルト

「それは一体何だ？」

ハル

「それは日本軍の使用していた兵器ですがまず陸軍からソ連の戦車の砲弾を跳ね返し逆にソ連の戦車を正面から貫通するほどの戦車を保有していたとの事です。海軍からウラジオストク・ナホトカに駐留していた兵士からの証言によりまずと日本海軍の戦艦による艦砲射撃の際16インチ以上の威力を持つ戦艦が確認できたとの事です。さらに日本軍が使用していた航空機について生き残りの搭乗員から時速600キロは出ていたとの事です」

この言葉はすべて正しいのだが・・・

ルーズベルト

「馬鹿な！ジャップにそんな高性能な兵器が作れるわけがない！敗者の戯言にすぎない言葉だ！」

ルーズベルト大統領はそれを全否定しそれにハル国务長官が

ハル

「確かに日本の工業力から考えてまず不可能なことです」

ルーズベルト

「そうだろ！ジャップの兵器は一代遅れだ！それを踏まえて戦略を考えてくれ」

ハル

「分かりました。そう伝えていきます」

この会話は完全に日本を甘く考えており、そのツケが回ってくるのはもう少し後のことである。

一方、その頃

戦艦尾張 会議室

如月

「さて会議の内容ですが、やはりアメリカは日本との戦争を望んでいます」

山本

「それは状況からして分かる事だ」

井上

「我々がどれだけ譲歩しようとアメリカはそれ以上の条件を付けてきます」

山口

「我々の譲歩案の中の上限であります乙案さえも了承しないのか」

乙案の内容とは

1、満州から日本人駐留地区以外からの撤兵

2、南洋諸島の配置戦力の制限

3、占領した中国領土の南京、上海などの返還

4、民間人への無差別攻撃、虐殺行為を認め賠償金を中国に支払う。

日本はこれ以上容認できないほどの譲歩案をアメリカに提示していた。

如月

「もしアメリカが容認できなかったとして仮に戦争になった時は計画通りの作戦を発動させます」

井上

「そうだな、兵力はどうなっているのだ？」

山本

「今戦力化しているのは戦艦四二隻、巡洋戦艦四隻、空母六三隻、重巡二八隻、軽巡二七隻、駆逐艦六六隻、イージス艦三六隻となっています」

山口

「しかし四六隻もの戦艦なんて必要でしょうか？これからは航空機の時代と言うのに」

如月

「山口中将、確かに戦艦は航空機に弱いです。しかしそれを補うために過剰と言える対空火器が搭載されています。艦隊決戦が行わなくともせめて空母の護衛としては使えるほど心強いと思います」

井上

「対空火器のすごさは演習でも分かるがレーダー連動の対空機銃は自動でとらえるので高速を誇ります最新鋭の烈風二二型さえも撃ち落してしまうほどです。高角砲の砲弾の近接信管はほぼ100%の命中率を出しています。これなら突然の空襲にも対応できます」

山本

「我々の艦艇もそうだが未来の艦艇は特にすごいと思っている。本

当に君たちには感謝しています」

如月

「ありがとうございます山本長官、我々は破滅から救うためにこうして頑張っています」

会議は順調に進んでいき

如月

「そういえば長官、航空機の品質管理はどのような状態ですか？」

山本

「君らの情報通り品質管理には特に目を配っているよ」

この会話については事実の日本は二〇〇〇馬力『誉』を完成し航空機に搭載していたが、品質管理の悪さや熟練工の不足により規定の性能を出せず、時には一三〇〇馬力程度しか出していないもしばしばあったのである。そのためこのような状態を防ぐべく熟練工の除隊やまだドイツと国交があった時に買い占めた優秀な工業機械をフル導入するなど対策を十分にしたため二〇〇〇馬力の『誉』エンジンが予定以上の出力を出したのである。

如月

「良い航空機とは良いエンジンと熟練搭乗員で成り立っています。撃破されても何とか脱出し捕虜になったとしても捕虜交換によって帰って来る事が出来ます。捕虜になる事を恥だと自殺するのは継続能力を捨てるようなものです。そのため搭乗員には自爆などをするないように徹底してください」

如月は事実の行いから会議で何度も呼びかけており、そのため説得

力のある呼びかけになった。

山口

「分かっている。我々は勝たなくてはならない。アジアのため、アジアの繁栄のために。そのためならどんな高く硬く厚い壁をも我々は打ち砕く！」

山口中将がそう言つと皆が力強く頷いた。

彼らの目には教えられた事実の二の舞を起こさせないという決意を秘めていた。

第32話 和平を求めて（後書き）

作者

「完成しました」

暁

「うーん、アメリカは我々を甘く見過ぎでしょうか？」

炎龍

「いいんじゃない、甘く見ていたツケは数倍になって帰ってくるかな」

雷龍

「やはり戦争が起こるのかな」

水龍

「私としてはやはり戦争は起こってほしくくないです」

作者

「それはそうですね。次回予告を水龍どうぞ」

水龍

「はい、如月司令達は走った。あの忌まわしい戦争を回避するため、そして海軍最大最強の戦艦『上総』が竣工した時世界は、次回蒼穹の艦隊〜第二独立機動艦隊出撃せよ〜第33話『世界最大最強の降臨』蒼き空、飛べ！インパルス！」

第33話 世界最大最強の降臨

11月20日

呉 桂島

桂島には連合艦隊と第二独立機動艦隊が集結しある新造艦を待っていた。

その戦艦の名は『上総』である。竣工した時点で第二独立機動艦隊の戦艦を除く全世界の海軍の戦艦を圧倒する性能を誇っており次期連合艦隊旗艦となる戦艦である。

戦艦尾張 前方甲板

？

「うわゝ！どんなのかな妹って」

そう言うのは尾張型戦艦二番艦の美濃である。見た目は一六歳位で髪型は短く切っており活発な性格である。

？

「姉上、そんなこと言わなくても逃げませんよ」

そう諭すのは尾張型戦艦三番艦の甲斐である。見た目は美濃と同じ位で髪型はセミロングで冷静な性格である。

？

「早く来ないかな」

そう言いながら水平線を見るのは尾張型戦艦四番艦の水戸である。
見た目は一五歳位で髪型は短い髪をポニーテールにしており口調は
幼い部分を残している。

尾張

「あなた達少しは礼儀というものをわきまえなさい」

大和

「司令、今日位いいじゃないですか？」

尾張

「しかし・・・」

長門

「そうですね、たまには息抜きが必要ですから」

陸奥

「しかし、如月司令はどんな妹を連れてくるのかな？」

同尾張艦橋

山本

「そろそろ時間だな」

如月

「ええそうですね、もう視認できるはずですが」

見張りの水兵

「十時の方向！新型戦艦を確認！」

その報告が入ると双眼鏡を向けると駆逐艦と巡洋艦に守られて四隻の戦艦が巡航速度で向かっていた。

戦艦『上総』艦橋

見張りの兵士

「連合艦隊旗艦尾張以下戦艦群を確認」

？

「そうか。そのままで」

副長

「森下艦長、旗艦の尾張に連絡を入れておきます」

この森下とは事実の戦艦大和の艦長であり旧日本海軍屈指の操艦の名手であり暁の航海長森下飛鳥の祖父の森下信衛大佐である。

森下（信）

「分かった。このまま警戒と監視を続け」

副長

「了解しました」

数分後、旗艦尾張から約10mほど離れた地点に四戦艦は停止し、尾張から内火艇が二隻が出され如月達が一番艦に乗り込む。

森下（信）

「お久しぶりです。長官」

山本

「そうだな、元気で何よりだ」

如月

「初めまして、森下艦長。第二独立機動艦隊司令長官の如月大悟大將です」

森下（信）

「おつ、君があゝの機動艦隊司令だつて、話は聞いている。愛娘の飛鳥によろしくと言ってくれ」

山本

「話は済んだか？説明を如月君から」

如月

「ではこの戦艦の説明をします」

ちなみに上総に移つたは山本長官、米内首相、宇垣参謀長など
の一部の人間

この時に説明された性能データはこちら（一部変更あり）

全長 400 m

全幅 40 m

基準排水量 15万5000 t

満載排水量 20万7000 t

速度 48ノット

航続距離 18ノットで2万7000海里

武装 50口径60？3連装主砲6基18門

60口径30．5？4連装副砲2基8門

50口径12.7?3連装高角砲50基150門

40mmレーダー連動機関砲100基400門

37mmレーダー連動機銃70基210門

30mmレーダー連動機銃60基180門

20?36連装噴進弾16基

零式垂直発射管200セル

水上機 10機

カタパルト 2基

長官達の案内を森下艦長が行い、如月は艦魂達が集まっている一番主砲?三番主砲辺りに足を運んだ。

尾張

「お待ちしておりました。司令殿」

美濃

「早く新しい妹達を紹介しなさい」

甲斐

「そんなに急かさしないで、では司令お願いします」

如月

「ああ、では皆出てきてもどうぞ」

そう言うと彼女たちの前で突然光りだし、光がおさまると四人の少女が現れた。

如月

「では、自己紹介をお願いします」

？

「初めまして上総型戦艦一番艦の上総と申します。皆さん何卒よろしく願います」

？

「同じく二番艦の下総と言います。皆さんよろしく願います」

？

「同じく三番艦の磐城と申します。皆さんいろいろよろしく」

？

「同じく四番艦の岩代だよ皆さんよろしくね」

尾張

「現旗艦の尾張です。あなた達を歓迎します」

上総

「ええ、これからも末長く願います」

下総

「長い付き合いになりますがよろしく願います」

磐城

「皆さんこれからもよろしく願います」

岩代

「お手柔らかにお願いね」

如月

「これから上総達の編入を祝って宴会だ！」

慶良間

「いつも済まないね、司令殿」

炎龍

「早速、行くぞ慶良間」

上総

「如月司令、大丈夫でしょうか？」

如月

「何、新造艦ができたときの伝統だ。止められないよ」

下総

「そうですね、では先に行きます」

上総 予備会議室

如月

「では、上総達の誕生に乾杯！」

全員

「『乾杯！』」「『乾杯！』」

その後は祝賀会と言って好き勝手にやり始めた。すると上総と下総は不機嫌そうな表情で如月に愚痴をこぼした。

上総

「一体何なんですか。あれが日本海軍が世界に誇れる戦艦の艦魂なのですか？」

下総

「もう少し礼儀正しいのかと思いましたがまさかです」

如月

「しょうがないよ、進水のたびに祝賀会や歓迎会と銘打ってどんちやん騒ぎするからな。現に連合艦隊旗艦の尾張も止めるどころか注意一つないほどだからな。一応言っておくが止めようとしても無駄だからな」

そう言つとコップのジュースを一気に飲んだ

上総

「そんな殺生な・・・」

あまりの事にへたり込んでしまった。

下総

「姉さん」

如月

「今はこんな有様だが演習などになると豹変するから、心配するな」

上総

「こんな有様とは何ですか、有様とは」

歓迎会はいつものように酔った勢いで乱闘などが勃発し、これにはさすがに全員で抑え込むなど時間が経つにつれて荒れ具合が増していった。

ちなみに余談だが翌日各艦隊の機関などが不調や不具合が発生した
そうである。

第33話 世界最大最強の降臨（後書き）

作者

「やっと完成しました」

暁

「これまた真面目な性格の艦魂ですね」

炎龍

「そつだな、尾張よりも厳しいんだろうな？」

作者

「ええ、一応次期旗艦ですから、必要な範囲に入っています」

雷龍

「そう言えばそろそろ別な作者さんの艦魂達も呼んでもいいんじゃないかな」

作者

「ええ、一応バレンタインの時に出せますように交渉を始めます。では次回予告を雷龍どうぞ」

雷龍

「分かった。新たに加わった仲間と共に練習に励む艦魂達、そんな中ヨーロッパでは大変なことが起こっていた。次回蒼穹の艦隊／＼第二独立機動艦隊出撃せよ／＼第34話『破壊神の蹂躪』大地を駆け抜けるガイア！」

第34話 破壊神の蹂躪

12月1日

呉 桂島泊地旗艦上総

如月

「およびでしょうか長官？」

山本長官

「うむ、実は君達の世界の歴史とは違う事が起き始めたんだ」

そう言つと一冊の計画書が如月に渡された。

如月

「これは・・・」

計画書を読んだ如月は思わずそう言つてしまった。

昭和15年（1940）

5月10日 ドイツ軍オランダ・ベルギー・ルクセンブルクへ侵攻。

5月27日 英仏軍ダンケルクから撤退

6月14日 ドイツ軍フランスに無血入城

ここから歴史が代わり事実では7月3日、ドイツ軍に奪取される事を防ぐためH部隊によるアルジェリアのメルセルケビール港に展開

しているフランス艦隊攻撃を行った（カタパルト作戦）がこの世界では早期完成したアルザス型戦艦四隻を筆頭とするフランス艦隊は事前にメルセルケビル港からイギリスへと脱出したためH部隊による攻撃は行われなかった。

そのため事実では沈むはずの戦艦『ブルターニュ』、大破の戦艦『プロヴァンス』や『ダンケルク』も無事であった。

この結果自由フランス軍には戦艦『アルザス』、『ノルマンディー』、『フランドル』、『ブルゴーニュ』、『ダンケルク』、『ストラスブール』、『リシユリユー』、『ジャン・バール』、『ブルターニュ』、『プロヴァンス』、『ロレーヌ』の一一隻の戦艦と空母『ベアルン』が存在し以後ヴィシー政権下の海軍の脅威となった。

9月23日、事実では仏領インドシナへの武力進駐は如月の助言により行われず、9月27日に結ばれるはずの日独伊三国同盟はアメリカの反日感情を植えさせないため日本が拒否したため破局となった。

11月11日、タラント空襲は事実通り行われたが、事実とは違う所はドイツから借り受けたBf109E型一六機の反撃によりソードフィッシュ雷撃機はほぼ全滅。戦果は駆逐艦二隻沈んだだけであった。

それどころかイタリア空軍はJu87B型一六機による急降下爆撃の反撃により四機の損害と引き換えに作戦に参加した戦艦『ラミリアーズ』と空母『イラストリアス』にそれぞれ二発の500?爆弾が炸裂し、両艦共中破し駆逐艦三隻が沈んでしまった。

そのため大鑑巨砲主義の終焉の一つと呼ばれるはずのタラント空襲

は失敗に終わった。

如月

「まずい事になりました。事実とはかなり違う事が起こってしまったため、これでは欧州戦線の状況が分からなくなってしまうました」

山本長官

「ああ、そうだな。まさに欧州戦線は奇々怪々だな」

ついに事実とは違う第二世界大戦がはじまってしまった。

そのため日本は戦略の見直しを行い、イギリスは余計に枢軸国を警戒しアメリカは事実ほどではないが日本を警戒するなど様々な波乱を生むことになった。

ちなみにアルザス型戦艦は事実では竣工してないため一応性能データはこちら

全長	255 m
全幅	35 m
基準排水量	4万5000 t
満載排水量	6万2300 t
最大速度	31ノット
航続距離	18ノットで1万8000海里
武装	45口径38?4連装主砲3基12門
	52口径15.2?3連装砲3基9門
	45口径10?連装高角砲12基24門
	60口径40 mm連装機銃22基44門
	70口径12.7 mm4連装機銃16基64門

第34話 破壊神の蹂躪（後書き）

作者

「今回は世界大戦の状況を出しました」

暁

「それにしてもだいぶ違っています」

炎龍

「大丈夫か？後で混乱してわけのわからない事になっても知らないぞ」

作者

「大丈夫です。それくらい想定範囲内です」

隼鷹

「それにしても許可取れましたね。零戦先生のキャラクター使用許可」

雷龍

「本当か！」

作者

「ええ、許可が取れましたよ」

炎龍

「やったな」

作者

「ええ、がんばりますよ。次回予告を隼鷹どうぞ」

隼鷹

「はい、お兄ちゃんがいた歴史とはかけ離れてしまい予測できなくなつた欧州戦線。そんな中、アメリカが追い打ちをかけるかのよ
うな政策を行いそれに日本は。次回蒼穹の艦隊／＼第二独立機動艦隊
出撃せよ／＼第35話『戦争への序曲』 混迷の空進め！ガンダム！」

第35話 戦争への序曲（前書き）

かなり文字が抜けていたりしたので改めて修復しました。

第35話 戦争への序曲

昭和16年（1941）11月27日

アメリカは日本との戦争を望んでいる。これは前の世界と同じことであり、それが明白になっても日本は戦争回避に必死だった。

しかし、アメリカは非情にも事実と同じ最後通告、ハル・ノートを日本に突きつけた。

日本政府はある程度予測していたものの、現実を突き付けられたため政府高官、軍人達に困惑の表情がうかがえた。

呉 戦艦暁CIC

如月

「くそっ……!!」

如月はCICの壁を思いっきり殴ったが、怒りで痛みも感じなかった。

有賀

「艦長、我々は戦争を回避することができませんでした」

逢沢

「それにしても、内容は事実よりも厳しいものになっています」

ハル・ノートの内容を簡単にすると以下の通り

1、 中国大陸からの完全撤退（満州や朝鮮などを含み、軍民間問わず）

2、 中国人に対する虐殺を認め、賠償金として10億円を中国に支払う

3、 台湾、ミクロネシアなどの破棄

4、 中国に対して持っているすべての権限の破棄

5、 日本が現在他国と結んでいる条約と同盟を全て破棄する

森下（飛）

「それは確実にアメリカの陰謀が丸見えな内容です。断固拒否しましょう」

如月

「そうだ、中国大陸や台湾など先人達が血と汗と涙で勝ち取ってきた領土なのだからな。自己中のアメリカに無条件で渡すわけにはいかない」

有賀

「では・・・」

如月

「そうだ、たった今入った情報によると全機動艦隊の出撃が発令された。我々第二独立機動艦隊も出撃する。目標はハワイおよびミッドウェー両島だ。艦隊出撃用意！」

同日、深夜に呉を出撃。大本営より事前に話し合ったハワイ、ミッドウェーの占領作戦その名も『天一号作戦』

事実では艦隊特攻と言われた作戦名だが今回は天をも揺るがす史上最大の作戦となるためこの作戦名となった。

実質、この作戦に参加する艦隊は三個機動艦隊と五千機を越す航空機、上陸用の陸戦隊十五個師団、参加将兵は五十万と言う一大作戦となっている。

この作戦に第一機動艦隊と第三機動艦隊が参加することになりトラック諸島まで同行し、補給の後に別行動を行った。

12月7日午後9時45分（日本時間）

三機動艦隊はそれぞれ第一機動艦隊はオアフ島北300海里、第二独立機動艦隊は二つに分断しており本隊は南500海里、別動隊は別任務でミッドウェー南東400海里に、第三機動艦隊はミッドウェー全方向に展開している。

本隊は第一戦隊と神楽型で結成された第三戦隊と第十一から第十七航空戦隊さらに第一から第五護衛戦隊であり、別動隊は第二戦隊（ブラス輝龍型二隻）と第一八から第一九航空戦隊と第六護衛戦隊で結成されてある。

第二独立機動艦隊本隊、旗艦暁

如月

「各航空隊、発進準備」

命令から15分で第十一から第十七航空戦隊から第一攻撃部隊が発進した。

第一攻撃部隊は・・・

星電	10機
彩雲	20機
烈風二二型	120機
天山二二型	150機
彗星三二型	180機
流星改	66機
紫電改	150機
合計	696機

第二攻撃部隊も遅れて出撃していった。

星電	10機
彩雲	20機
烈風二二型	180機
天山二二型	150機
彗星三二型	150機
流星改	60機
F-18G型	150機
F-125A型	150機
F-127A型	150機
合計	1020機となっている。

ちなみにF-18G型とは『スーパー・ホーネット?』のことであ

り名前の通りF-18E『スーパー・ホーネット』の後継機であり、F-25A型やF-27A型とは違いアメリカ（勿論未来の）との共同開発により完成した航空機であり、次世代型の艦載機として配備されていた。（後者の二機は日本独自の開発で完成した艦載機である）

発進した各航空隊は新兵器を積み込み星電と彩雲に誘導されハワイへと向かっていた。

そして今、望まぬ戦争が始まろうとしていた。

機体説明

F-18G型『スーパー・ホーネット？』

全長 19.1m

全幅 12.0m

全高 3.5m

発動機 GRX-200ターボエンジン×2

最大速度 マッハ3.5

航続距離 5000?

武装 30mmガトリング機関砲2門

対空・対艦ミサイル計15t

特殊兵装 ハイマット・フルバーストシステム

未来艦隊の艦載機で日米共同開発により完成した機体であり、コストパフォーマンスに優れ対空・対艦・対潜・偵察がすべてできる万能機として空母に配備されている。

第35話 戦争への序曲（後書き）

作者

「・・・あの〴〵皆さん、主砲を向けるのをやめてもらえませんか？」

暁

「今までサボったからいけないのです。後バレンタイン特別編の本文をミスで削除してしまった事により投稿できなかった罰として主砲一斉射の刑です」

慶良間

「何か言い残す事はないか？」

作者

「皆さん、サボってしまいすみませんでした。これからは計画を持つて投稿しますので勘弁してください」

暁

「では一斉射！」

ドオオオーーーーン！ドオオオオーーーーン！ドオオオオーーーーン！

作者

「ぎいいやーーーーー！」

暁

「刑罰がすみしましたので、作者に代わり指名します。では慶良間さん」

慶良間

「分かったぜ、ついに太平洋戦争が勃発してしまい望まぬ戦争へと進んでしまった日本。このために導入された最新鋭兵器達が活躍するとき戦況は大いに変わる。次回蒼穹の艦隊〜第二独立機動艦隊出撃せよ〜第36話『開戦』紺碧の空、飛べレジエンド!」

第36話 運命の開戦

12月8日（日本時間）

星電と彩雲に誘導され目標の真珠湾へと向かっていた。一千機近い航空機は見事な編隊を組んで飛行していた。攻撃隊隊長は山口昇中佐である。

開戦前、在米大使は宣戦布告通知書を提出し各マスコミに声明文を発表した。これは事実の教訓からである。そのため騙し討ちを望んでいたアメリカ首脳陣の目論見が崩れた。

余談が過ぎた。話を戻そう。

山口

「各機、そろそろ時間だ。戦闘用意！」

隊長からの一声で各機は目標の真珠湾へ向かうべく機体を旋回した。

そして・・・運命の時が

山口

「全部隊一斉射撃てー！」

カチッ！ヒューーーーーッ、ドガアアーーーーン！

山口は対地ミサイルの発射トリガーを引くと真っ直ぐヒットカム飛行場の滑走路へとミサイルは飛んでいき直撃すると大穴をあけた。

他の機体も対地ミサイルを放ち、滑走路や駐機していたP - 40、P - 38、B - 17などに当たるとたちまち滑走路には大穴が空き機体はジュラルミンの塊と化した。

ここまで順調だった攻撃部隊に誤算が起こった。

それは停泊しているはずの太平洋艦隊が存在していなかったのである。

太平洋艦隊は大統領命令でかねてより計画されていた『レインボー5号計画』に基づき日本時間の午後9時にハワイを出港していたのだ。

ちょうど第一機動艦隊と第二独立機動艦隊の攻撃部隊がすれ違ったのである。

ハワイ奇襲の電文は太平洋艦隊旗艦のコロラドで伝わった。

？

「何だと！ハワイが襲撃されただど！」

そう怒鳴ったのは太平洋艦隊司令のキンメルである。

参謀A

「はい、襲撃したのは多数の艦載機です」

キンメルは驚いた。遠く離れた島国がハワイまで来れるわけがないと信じていたからである。

参謀長

「敵は艦載機をすべて出撃しているはずです。今すぐ引き返しまして敵空母に砲撃しましょう！」

参謀長は進言したが怯将キンメルはどちらかと言えば慎重な性格なため反撃のチャンスを逃していた。

キンメル

「いや、ここはハルゼーに連絡してからでも遅くはない」

しかし、目も眩むかのような凶報が舞い降りた。

士官A

「大変です！ハルゼー艦隊は敵機動艦隊の襲撃に遭い空母ヨークタウン、エンタープライズ、ホーネット、重巡ニユーオーリンズ、ボルチモア、軽巡アトランタ、ジュノーが捕獲されました！」

キンメル

「馬鹿な！あのハルゼーがだと・・・」

凶報はそれだけでは無かった。

士官B

「緊急事態です！空母レキシントンが正体不明の艦隊の襲撃によりレキシントン、クリーブランド、ウィチタが捕獲されました！」

キンメル

「馬鹿な！いったい何が起こったんだ！」

前者は第二独立機動艦隊本隊の攻撃で後者は別動隊の攻撃である。

時間をさかのぼると・・・

ハルゼー艦隊はハワイ奇襲の電文が届いたときオアフ島西120海里に艦隊を展開していた。

旗艦エンタープライズ 艦橋

？

「何だと！ハワイが奇襲されただと！」

怒髪天突く勢いで怒鳴ったのは猛将ハルゼーであった。

士官A

「は、はい。どうやら艦載機の攻撃のようです」

ハルゼー

「ちくしょー！日本軍に先を越されるなんて！」

士官B

「提督、日本の偵察機が・・・」

ハルゼー

「さっさと撃ち落とせ！」

士官B

「は、はい！」

エンタープライズからF4F二機が出撃し偵察していた星電に襲いかかった。しかし時速630キロもの星電に翻弄され逆に翼内に搭載された一式噴進弾により二機とも粉碎されてしまった。

その様子を見ていた水兵達は啞然とした。たかが偵察機にF4Fが撃ち落とされることに不安を隠せないでいた。

ハルゼー

「何だあの機体は早すぎる！F4Fが軽く撃ち落とされてしまったぞ！」

士官C

「提督、偵察に出ていたドントレスより報告、オアフ島南東50海里に敵艦隊を確認。戦艦8、空母12、駆逐艦18との事です。この報告以降連絡が取れない事から撃墜されたと推測しました」

ハルゼー

「そいつらがハワイを襲撃した艦隊なのか・・・攻撃部隊を出撃させろ！一隻も残らずに沈めろ！」

士官A

「は、はい！」

3隻の空母からF4F70機、デバステーター85機、ドントレス75機が次々と出撃していった。

一方その頃、本隊はというと

暁CIC

桜井

「艦長、攻撃部隊より『我、峻烈な攻撃によりハワイの機能停止を認める』との事です」

如月

「そうか、攻撃部隊収集のため第十一、十四航空戦隊と護衛を残し以下我に続け！」

八隻の空母と六隻のイージス艦を残しハルゼー艦隊のいる方向に最大速度で向かった。

しばらくすると

桜井

「レーダーに反応！航空機が230」

如月

「迎撃用の戦闘機を上げる」

迎撃用の戦闘機として飛鷹、隼鷹から大和撫子航空隊が運用する紫電改100機と烈風150機が向かった。

そんな事は知らないアメリカの航空隊はというと

爆撃機搭乗員

『そろそろだ、ジャップの空母なんて軽く沈めてやるぜ！』

戦闘機搭乗員

『安心しろ、ジャップのオンボロ戦闘機なんて軽く打ち落としてやるぜ！』

彼らは日本軍を甘く見ていた。そのツケはあまりにも大きかった。

宮間

「隊長、3時の方向に敵爆撃連合確認」

笹原

「ええ、そのようだね。全機私に続け！」

彼女の乗る紫電改は隊長機だと思われるF4Fに狙いを定めるとトリガーを引いた。

キュイイーーーーン！ババババツ！

翼下に搭載された航空機用の12.7mm6砲身ガトリングが火を噴くとたちまち穴だらけになり落ちて行った。

他の機体もデバスターやドントレスに襲いかかると鈍足が祟ったのかすぐ撃ち落とされ10分もかからずに230機すべて撃ち落とされた。一機も爆弾や魚雷を投下できずに。

ハルゼー

「どういう事だ！全滅だと！一機も攻撃できなかったとは！」

士官B

「どうやら待ち伏せに遭った様子で」

水兵

「敵航空隊接近！数多数！」

ハルゼー

「出せる戦闘機は！？」

士官B

「F4Fが10機のみ」

ハルゼー

「とにかくすべて出せ！全艦対空戦闘用意！」

攻撃部隊の編成は

スーパー・ホーネット？150機

流星改（艦攻、艦爆仕様）200機

戦闘機だけなら1.5倍の差が、全体なら3.5倍の差と歴然としていた。それでも突っ込んだF4FはAAM（空対空ミサイル）により瞬殺されてしまった。

護衛戦闘機もないハルゼー艦隊に襲いかかった。

対空砲火を浴びせる駆逐艦にASM（空対艦ミサイル）を放つと一瞬にして真つ二つに折れてしまった。

カチッ！ヒューーーーーン！ドガアアーーーーン！

ハルゼー

「なんてことだ！一瞬で沈めただと！しかもジェット機だと！」

そんな事を言っている間にも攻撃を続けヨークタウンに1発爆弾3発と1発魚雷2発、エンタープライズに1発爆弾3発と1発魚雷が3発、ホーネットに1発爆弾2発と1発魚雷が2発を浴びせ帰還した。

士官A

「提督、被害の集計が終わりました」

ハルゼー

「・・・報告しろ」

士官A

「はっ、我が艦を含む空母3隻は大破、機関室がやられましたので3隻とも18ノットが限界です。重巡ニューオーリンズ、ボルチモア、軽巡アトランタ、ジューノーは艦上構造物が滅茶苦茶です。駆逐艦は全滅しました」

ハルゼー

「最悪だな。これからどうすれば・・・」

士官B

「大変です！前方に敵艦隊確認！」

士官C

「さらに後方にも敵艦隊が！」

ハルゼー

「挟み撃ちか・・・」

士官A

「敵艦より光信号『降伏せよ、さもなくば発砲する』とのことですよ」

ハルゼー

「・・・白旗を掲げよ」

士官B

「提督！」

ハルゼー

「これ以上戦っても犠牲ばかりが出る！手負いの艦艇で何ができる！」

士官B

「・・・分かりました」

エンタープライズが白旗を掲げた事により一連の戦闘が終了した。

暁CIC

桜井

「艦長、敵旗艦より白旗です」

如月

「やっと終わった。これより接近する」

ハルゼーは迫ってくる戦艦に驚いた。なぜならこの時代の戦艦は全長が220mくらいが常識だが暁は全長が500m近いのだから無理はない。

如月

「ハルゼー提督ですね。暁艦長の如月大悟大将です」

ハルゼー

「ああそうだ、降伏の件だが・・・」

如月

「ええ安心してください。ジュネーブ条約に基づき皆さんを保護いたします」

水兵

「艦長、別動隊より連絡、空母レキシントンとおまけに重巡ウィチタ、軽巡クリーブランドを捕獲しました」

如月

「後藤もやるなあ」

ハルゼーはこの報告を無線でちゃんと聞いていたので

ハルゼー

「嘘だ、レキシントンが・・・」

別動隊の戦闘を簡略するところなる

1、レキシントンは太平洋艦隊と合流すべく南下していたが太平洋艦隊が北上すると聞いたレキシントンは合流地点に向かった

←
2、その情報を手に入れた別動隊は艦載機のF-35『ライトニング?』40機をレキシントンに向かわせた。

←
3、上空のF4FをAAMで落とした後、周りの護衛している艦にASMを放ち沈めた。

←
4、さらに艦隊が出現した事により敵わないと感じたレキシントンとウィチタ、クリーブランドは降伏した。

となっている。

如月

「提督たちには輸送艦で捕獲艦と共に日本に回航させます」

あらかじめ持ってきた輸送艦に捕虜を乗せると別動隊と合流すべく
最大速度で向かった。

第36話 運命の開戦（後書き）

作者

「完成です。それと連絡」

暁

「またですか？」

炎龍

「どうせ次回予告を元に戻すことだろ」

作者

「（ぎくっ）何故それを・・・」

雷龍

「作者の性格から考えるのが面倒だからってね」

作者

「その通りです・・・」

水龍

「やっぱり前が一番です」

暁

「私的にも一緒です。早速次回予告を」

作者

「はい、太平洋艦隊と第一機動艦隊との艦隊戦を描きます。次回『掲げよZ旗、ハワイ沖海戦』お楽しみに」

第37話 掲げよZ旗、ハワイ沖海戦

同日、午前11時

オアフ島北300海里

この地点には戦艦上総を旗艦とする第一機動艦隊が展開していた。

ちなみに艦隊編成はこちら

第一戦隊『上総』『下総』『磐城』『岩代』

第二戦隊『尾張』『美濃』『甲斐』『水戸』

第三戦隊『大和』『武蔵』『大淀』『仁淀』

第一航空戦隊『赤城』『加賀』『蒼龍』『飛龍』

第二航空戦隊『翔鶴』『瑞鶴』『大鳳』『海鳳』

第三航空戦隊『信濃』『紀伊』『千歳』『千代田』

第四航空戦隊『羽田』『伊丹』『雲龍』『天城』

第五航空戦隊『葛城』『笠置』『阿蘇』『生駒』

第六航空戦隊『鞍馬』『日立』『鳳龍』『龍驤』

第一水雷戦隊『阿賀野』『能代』『矢矧』『酒匂』

第一駆逐戦隊『秋月』『照月』『涼月』『初月』

第二駆逐戦隊『陽炎』『夏潮』『黒潮』『親潮』

第三駆逐戦隊『早潮』『初風』『雪風』『天津風』

第四駆逐戦隊『時津風』『浦潮』『磯風』『浜風』

第二水雷戦隊『吉野』『吉井』『小瀬』『成羽』

第五駆逐戦隊『新月』『若月』『霜月』『冬月』

第六駆逐戦隊『夕雲』『秋雲』『巻雲』『風雲』

第七駆逐戦隊『長波』『巻波』『高波』『大波』

第八駆逐戦隊『清波』『玉波』『涼波』『藤波』

となっており要約すると戦艦12、空母24、軽巡8、駆逐艦32
という大艦隊である。

旗艦上総 艦橋

山本

「あちらの作戦はうまくいったようだな」

宇垣

「はい、情報によりますと空母4隻、重巡と軽巡がそれぞれ3隻を
捕獲したもようです」

水兵

「報告、ハワイ攻撃部隊が帰還しました。何と落伍機ゼロです!」

その瞬間艦橋では歓喜の声が立った。

実際ハワイへ出撃させた攻撃部隊は一千機近くがなんの損害もなく帰還できたのだから驚くのも無理はない。開戦の戦果にしては大戦果であるのだから。

歓喜の声はすぐに終わった。全員が持ち場に戻り情報収集や索敵などに精を出した。

水兵

「電探室より連絡!偵察機接近!」

山本

「そうか、烈空弾用意!」

砲術長

「了解、烈空弾装填急げ!電探と連動完了!」

上総に搭載されている零式垂直発射管に誘導式烈空弾が装填されていく。

水兵

「電探と連動よし!目標捕捉!」

砲術長

「発射!」

ゴウウー！

発射管が開き誘導弾が轟音を立てて目標に向かって飛んで行った。

宇垣

「本当に当たるんでしょうか？」

山本

「分からないな。しかし未来では主力兵器として運用されている」

宇垣

「恐ろしい兵器ですね」

山本

「しかし、使い方によっては突然の奇襲にもびくつかなくなる。もしだめだとしても連合艦隊の艦艇は対空兵器の城だ」

水兵

「電探室より、敵機消滅！命中です！」

山本

「どうやら、成功のようだな」

水兵

「彩雲より連絡、敵艦隊はオアフ島南西300海里を速度21ノットで航行との事です」

山本

「ほう、そうか。宇垣参謀長、敵艦隊との会合時刻は？」

宇垣

「速度35ノットで一三三〇ふヒトサンサンマルです。敵艦隊は10分後に到着予定との計算結果です」

山本

「やはり、速度を少し落とすべきであろうな」

宇垣

「計算では32ノットで敵艦隊と同時刻に到着します」

山本

「そうか、機関長速度32ノットに」

その頃、太平洋艦隊はというと

戦艦コロラド 艦橋

参謀A

「閣下、水偵より報告、位置オアフ島北200海里、敵戦力は戦艦12、空母24、軽巡8、駆逐艦24です」

キンメル

「空母が24隻だと！そいつらがハワイを攻撃した部隊なのか！？」

参謀A

「おそらく・・・」

キンメル

「空母はともかく戦艦は同等か。砲撃戦なら勝てるかもしれん」

参謀B

「閣下、敵艦隊は位置からしてパールハーバーへと向かっているのではないのでしょうか？」

キンメル

「何故だ？パールハーバーは破壊されつくされているはずだ」

キンメルは首を傾げた。

参謀B

「いいえ、基地の近くには450万バレルもの重油を保有する燃料基地が存在しています。破壊されますと我が艦隊は最低でも半年は動けません」

キンメル

「まさか、奴らの狙いはそれか」

キンメルは目を剥きながらそう言った。

参謀B

「閣下、我が艦隊は総力を挙げて絶対阻止しなければなりません」

キンメル

「全艦隊、カウアイ海峡に急行だ！アメリカ海軍のメンツにかけてもな！」

太平洋艦隊は進路を変更し第一機動艦隊が向かうであろうカウアイ海峡に向かった。

その頃、第二独立機動艦隊はというと

暁 CIC

桜井

「艦長、別動隊を確認」

如月

「分かった。無線をつないでくれ」

桜井

「了解。艦長どうぞ」

如月

「よお、後藤。そちらはうまくいったようだな」

後藤

「ああ、そちらこそ」

如月

「これから決戦が起こるであろうカウアイ海峡へと向かう。だから第二戦隊を譲ってくれ」

後藤

「ああ、いいさ親友よ」

如月

「それと、捕獲した艦艇の面倒を頼む」

後藤

「了解だ。如月幸運を祈るからな」

如月

「ふつ、分かっているよ。お前こそな」

そう言うとも無線のスイッチを切った。

その後、別動隊から慶良間、佐渡、輝龍、神龍が向かっていき合流した。捕獲した艦艇を曳航していた空母は別動隊と合流した後、遠回りでトラック諸島へと向かった。

それを見届けた後

如月

「森下航海長、カウアイ海峡へと進路を変更してくれ。最大速度でな」

森下（飛）

「アイ・サー。機関室最大速度！」

如月

「さてと、今回のメインイベント世紀の艦隊決戦が起これるとなると圧倒的だな」

有賀

「確かに相手は最大でも41センチ砲搭載のコロラド型3隻ですから」

本隊の保有する戦艦は66センチ15門の暁型4隻に60センチ15門の慶良間型2隻、41センチ15門の輝龍型2隻、30.5セ

ンチ16門の神楽型4隻と太平洋艦隊の戦艦とは数は一緒、質は10倍以上と圧倒的である。

午後1時、キンメル率いる太平洋艦隊はオアフ島が右舷に差し掛かるのを見ながら海峡へと急いだ。

心の中で心配していた潜水艦の攻撃は全くなかった。ただ、時々わが海軍の彩雲が現れすぐに去っていくのが確認できただけである。

キンメル

「もうすぐだ、戦闘準備を命じよ」

敵艦隊とは遭遇していないが、キンメルは早めの攻撃準備を行う。

実は少し前オアフ島北端にそびえるカラ山の山頂監視哨から連絡が入っていた。

監視兵はよほど慌てていたのか『ワレ東方水平線上二敵艦影ヲ確認』と平文で打電してきたのだ。

さらにオアフ島からも無線が届いた。空襲のために陸軍機は全滅。砲台も壊滅し抵抗手段は皆無だという。

『陸軍の助けなどあてにしていない。我々だけで片付けるので安心してよい』

という返事をキンメルは返してやった。

午後1時30分、太平洋艦隊はカウアイ海峡西入口へと到着した。

ふたたびカーラ山から連絡が入った。敵艦隊は海峡東入口の外に艦隊を展開しながら向かっているとのことである。

一方、第一機動艦隊は・・・

戦艦上総 艦橋

水兵

「森下艦長、敵艦隊との距離10万を切りました」

森下（信）

「全艦隊砲撃準備急げ！目標太平洋艦隊！」

上総以下12隻の戦艦は対艦用の徹甲弾を主砲へと装填させていく。

水兵

「光学照準よし！」

水兵

「電探と連動よし！」

砲術長

「距離6万まで待機せよ」

上総型の射程距離は最大で6万メートル、尾張型は5万5000メートル、大和型で5万メートル、大淀型は4万6000メートルである。

水兵

「敵艦隊との距離6万1千・・・6万！」

山本

「**撃ち方始めッ！！**」

森下（信）

「**撃ち方始めッ！！**」

砲術長

「撃てえーっ！っ！」

ズドオオオー！

この瞬間、上総が初めて敵艦隊に向けて自慢の主砲を発射した。

旗艦
コロラド

防空指揮所

水兵

「敵艦隊発砲！」

見張り員が報告しそこにいたコロラドが笑う

クロムド

「どっから撃っているんだよ」

ヒューーーーーン！バシャーーーーーン！バシャーーーーーン！バシ
 ヤーーーーン！

コロラド以下12隻の戦艦は単横陣となっている敵艦隊に合わせ横

に艦隊を展開していた所に敵艦隊の砲弾が落下してきたのだ。

一瞬にして海面を沸騰させたかのように水柱を立ちあげた。しかも・

コロラド

「馬鹿な、初弾から夾叉だと！」

夾叉つまり落下地点にコロラドを捉えていることである。

水兵

「敵艦再び発砲！」

見張り員の悲鳴のような報告にコロラドは青ざめた。

ドガアアアーーーーン！！ドガアアアーーーーン！

コロラド

「キャアーーーーッ！！」

防空指揮所で絶叫を上げ、辺り一面に血が飛び散る。

キンメル

「ひ、被害報告！！」

艦橋内であせりながら報告を仰いだ。

水兵

「被害報告ッ！1番砲塔と4番砲塔に被弾！両方とも使用不能！さらに火薬庫が引火する恐れあり！注水しませんと誘爆してしまいま

す！」

上総から放った徹甲弾は真つ直ぐに砲塔へと直撃し、何と主砲塔を貫通し火薬庫付近に着弾していた。

キンメル

「まずいぞ！注水急げ！」

ヒューーーーーッ！ドガアーーーーン！

キンメル

「どうした！？」

艦長

「大変です！ウェスト・ヴァージニア艦橋に被弾！」

これは磐城の砲弾が命中したのである。

さらに・・・ドガアーーーーン！ドガアーーーーン！ドガアア
ーーーーン！

水兵

「緊急事態です！テネシー、カリフォルニア、アリゾナに被弾！いずれも戦闘不能！」

前者は岩代の3発、中者は大淀の3発、後者は尾張4発の砲弾が命中したからである。

旗艦戦艦上総 艦橋

水兵

「報告、敵戦艦4隻に命中確認、うち3隻は戦闘不能」

山本

「なかなかやるようだな」

宇垣

「長官、そろそろ時間のようです」

山本

「ああ、そうだな」

水兵

「右舷より戦艦12隻接近！艦種神楽を確認！」

これは第二独立機動艦隊本隊である。

さらに・・・

水兵

「左舷より航空戦艦相模以下12隻確認！」

これは小沢治三郎中将を司令官とする第三機動艦隊が到着したのである。

旗艦戦艦コロラド

水兵

「左舷より敵の増援です！巡洋艦を前衛に戦艦12！」

水兵

「右舷からも敵の増援！巡洋艦、駆逐艦を前衛に戦艦12隻接近！」

キンメル

「謀られたか」

キンメルは歯ぎしりした。

ドガアアー——ン！ドガアアー——ン！ドガアアー——ン！

水兵

「軽巡ローレイ轟沈！駆逐艦ブルー、バートン轟沈！」

水兵

「敵水雷戦隊接近！あつ魚雷発射しました！」

見張り員は狼狽しながらも報告した。

シュー————ッ！ドガアアー——ン！

水兵

「重巡ノーザンプトン轟沈！」

キンメル

「誰か！私に教えてくれっ！私はどうしたらいいんだ！」

もはや恐怖により適切な判断ができなくなっていた。

コロラドでは地獄の惨状を見せていた。

同時刻、旗艦暁　C I C

如月は今山本長官と無線で連絡し合っていた。

如月

「長官、遅くなりなした」

山本

「いや、ちょうど良かったよ」

如月

「小沢長官も間に合ってよかったようです」

山本

「ああそつだな。このまま例の作戦を発動させよう」

如月

「ええ、では作戦を開始します」

山本

「よろしく頼む」

如月

「はい、ではまた」

山本

「鳴門作戦を発動する。各艦にも連絡せよ！」

宇垣

「了解しました！上総より各艦へ鳴門作戦展開！」

暁 C I C

如月

「鳴門作戦発令！艦隊の後方に回る！」

森下（飛）

「アイ・サー！」

有賀

「しかし艦長、作戦は成功するでしょうか？」

如月

「任せろ、未来艦隊に不可能はない！」

暁

「ええ、やりましょう！」

如月

「砲撃戦闘用意！」

逢沢

「了解、任せなさい！」

旗艦戦艦コロラド

水兵

「敵艦隊が後方に！」

キンメル

「このままなぶり殺しにする気か!？」

水兵

「後方敵艦隊発砲!」

ヒューーーーーッ! ドガアアーーーーン! ドガアアーーーーン!

水兵

「後方艦橋と水上機カタパルトに被弾!」

艦長

「提督、これ以上は・・・」

キンメル

「ああ、責任はすべて私を取る。白旗を掲げ!」

艦長

「残存艦艇に連絡、戦闘行為を終了せよ」

旗艦戦艦 上総

水兵

「長官、敵旗艦から白旗が!」

水兵

「敵からの発砲が止まりました」

宇垣

「長官、これは」

山本

「分かった。発砲中止。本艦は敵旗艦に接近する。対空、対潜警戒を密に」

上総は敵艦隊旗艦のコロラドへと向かった。

第37話 掲げよZ旗、ハワイ沖海戦（後書き）

作者

「完成！」

暁

「何か一方的に描いていませんか？」

炎龍

「どうであれすごい展開だな」

水龍

「作者、私に出番を！」

雷龍

「そつだ！この頃出ていないぞ！何時出すんだ！」

作者

「それはですね、もう少しかかります」

炎龍

「いつだ！」

作者

「計画ではアクション攻撃には出す予定です10話後の」

3人

「「「長い……」」」

作者

「ぎいややーーーーっ!!!」

暁

「はあ、作者があんな感じなので代わりに私が次回はいいよ！月号作戦の大詰めとなります。次回『ハワイ、ミッドウェー上陸』お楽しみに」

第38話 ハワイ、ミッドウェー上陸

太平洋艦隊旗艦コロラド 艦橋

水兵

「敵戦艦が向かってきます」

キンメル

「艦種は分かるか？」

水兵

「識別不明です。おそらく新型戦艦だと思います」

上総が近づいてくるにつれて全員が驚いた。

無理もない。上総の全長は400mでコロラドは236mと1.5倍も違う。

そして上総はコロラドの横に着いた。

山本

「キンメル提督でありますね。私は山本五十六連合艦隊司令長官であります」

キンメル

「ああそつだ。部下達の安全を保証していただけないか？」

山本

「安心してください。ジュネーブ条約に基づき安全を保障します」

こうしてあっさりと降伏交渉が成立した。

第二独立機動艦隊旗艦暁 C I C

桜井

「艦長、上総より電文『ワレ交渉成功セリ』との事です」

如月

「よかった。これで無駄な犠牲を出さなくて済む」

有賀

「艦長、天一号作戦の第三段階の発動許可を」

如月

「分かっているよ許可する。それと捕獲した艦艇は護衛戦隊に任せる」

その後、敵艦の艦長とわずかの機関科員を残し残りの乗員は日本軍が用意した輸送船に乗船しアメリカ本土へと向かわせた。

日没前、ハワイとミッドウエーの各島々に対し陸軍精鋭の一個師団が上陸、日本機動艦隊の戦艦は艦砲射撃と時雨弾による陸上支援を行った。

その結果パールハーバー軍港地帯は瞬時に占領。軍港に有った重油450万バレルを無傷で獲得。ミッドウエーも航空部隊による波状攻撃によって抵抗能力は皆無に近くミッドウエーの各島々も難なく制圧した。

深夜、ダイヤモンドヘッド付近の海域

各機動艦隊の戦艦部隊が集結していた。勿論理由もなく集結しているのではない。

集結している理由はダイヤモンドヘッドに対し威嚇射撃を行い降伏を促すためである。

如月

「全戰艦砲擊開始！」

ドオオオーーーーン！ドオオオーーーーン！ドオオオーーーーン！
ドオオオーーーーン！

これに驚いたのはハワイの住民達であり延々と続いた艦砲射撃の後に降伏勧告が出されたのを知った住民はオアフ島守備隊長と協議した。

守備隊長は援軍が望めない事を知っていたので無駄な犠牲を出したくないと降伏した。

こうしてハワイ守備部隊は次々と降伏し結果日本軍はハワイ諸島を完全に制圧した。

同じくミッドウェー諸島も完全に制圧しこの瞬間、天一号作戦は完全に成功した。

任務を終えた第二独立機動艦隊は先の捕獲艦を曳航していた別動隊と合流し予備会議室に艦魂を集めさせ如月と有賀は予備会議室へと向かっていた。

その途中どこから来たのか後藤がやってきた。

後藤

「よお、親友よ。あっちの艦魂はやばいぞ」

如月

「おい、艦魂が見えるのかよ。そしてなぜここに」

後藤

「いや、耐龍が送ってきたからだよ」

有賀

「しかし何故警告を？」

後藤

「今見てきたけど相当やばいぞ。キルジャップなんて連呼して言うていたからな」

如月

「警告ありがとう。気をつけるぜ」

後藤

「じゃあな親友よ」

後藤と別れた後、予備会議室の扉を開くと

慶良間

「こいつ大人しくしろ！」

エンタープライズ
「離せ！ジャップ！」

後藤の忠告通り相当やばい艦魂がいた。

如月

「一体何が起きたんだ？」

慶良間

「とにかくこいつがこんな状態なんだよ司令殿」

ヨークタウン

「エンター止めなさい！」

ホーネット

「そうだよこんなことしても何も変わらないよ！」

エンタープライズ

「ヨーク姉、ホーネットも何で落ち着いてられるのよ！」

レキシントン

「私達が暴れても実際艦を動かしているのは人なのよ。抵抗しても意味ないからだよ」

如月

「はあー一体何があったかと思えばそんな事か？」

エンタープライズ

「何よ！こんな事って何よ！こんな事ってねえ！」

如月

「いいか、あの時俺の命令一つで沈めれたんだぞお前ら全員を」

そう言うのと敵の艦魂は青ざめた。特に大破しているニューオーリンズ、ボルチモア、アトランタ、ジュノーは尚更であった。なにせ自分達が持っていない超高速機で一方的に沈んでいった駆逐艦を思えばそうなるだろう。

ヨークタウン

「つまりそれって・・・」

声を震わしながらそう言う

如月

「そうだ生殺与奪権を俺達が握っている事だ」

そうきっぱりと言うとエンタープライズが過剰に反応し

エンタープライズ

「ふざけるなぁー！ー！ジャップ！ー！」

そう言ながら如月に向かって襲いかかったが・・・

慶良間・炎龍

「「確保！ー！」」

二人が上から乗る形となりエンタープライズを抑え込んだ。

慶良間

「誰かロープを持ってきてくれ、こいつを抑え込むから」

佐渡

「持ってきました姉さん」

如月

「無駄な事を・・・」

レキシントン

「あの〜」

如月

「あつごめん、えーとレキシントンさんとヨークタウンさん、ホーネットさんですよね」

レキシントン

「あ、はいそうです」

ヨークタウン

「すみません、うちの妹が」

如月

「驚かしてすまないな俺もあんな事を言っただから悪いのだがな・・・あ、そうだまだ自己紹介していなかったな。初めまして第二独立機動艦隊司令長官の如月大悟大將だ。よろしくな」

ホーネット

「うそっ、若い!？」

如月

「よく言われるよそれは」

同日深夜 暁 防空指揮所

如月は満月を見ながら酒を飲んでいた。

？

「あのく如月司令ですよね？」

後ろから声が聞こえ振り向くと一人の少女が立っていた。

如月

「誰だ」

？

「申し遅れました。アトランタと申します」

如月

「何しに来た？」

アトランタ

「司令はこの戦争をどう思っているかって？司令は早期講和を考えているって聞いたから真相を聞きたくて」

如月

「はっ、そう言う事か。まあこっちに来て話すから」

アトランタ

「あっはい」

そう言うと如月の横に座った。

如月

「俺はな、こんな戦争は馬鹿げているって考えているんだ。俺達は戦争するなんて誰ひとり考えていなかった。みんな平和を望んでいたが、それなのにアメリカは己の私利私欲のために日本を戦争へと引きずり込んだ。これが俺の考えだ」

アトランタ

「私もそんな事を考えていた。けど言えなかった」

如月

「分かっているよ。こんな馬鹿げた戦争は早く終わらす。皆が平和に暮らせる世界を作るために」

そう言った如月は目には決意がうかがえた。

そんな話をしながら夜が明けていった。

第38話 ハワイ、ミッドウェー上陸（後書き）

作者

「完成だよ」

暁

「うーん開戦からいきなりハワイとミッドウェーを占領するなんて」

炎龍

「まあいいだろう。それとやっと出て来た」

慶良間

「私もだよ」

水龍

「作者殿、私にも出番を」

雷龍

「早く出してくれ少しでもいいから」

作者

「ちゃんと出しますから落ち着いて」

暁

「ではそろそろ次回予告を」

作者

「さてと今回は台湾付近の戦闘について描きます。次回『台湾沖航空戦』お楽しみに」

第39話 台湾沖航空戦

第二独立機動艦隊達がハワイで戦っていた頃、台湾では・・・

？

「加藤隊長！大変です！」

加藤

「どうした檜、いつもらしくないぞ」

檜とは事実で義足のエースと言われた檜与平であり歴史の変革により加藤火龍戦闘隊（戦闘隊自体が火龍に乗り換えた事により命名変更）の副隊長を務めている。

檜

「ついにアメリカに対し宣戦布告を通知しました！」

加藤

「何だと！」

そんな時・・・

ウウ~~~~~！

アナウンス

『各戦闘隊に告ぐ！敵爆撃連合接近！これは演習では無い！これは演習では無い！』

グオオオ~~~~~ン！

台湾沖南西を飛ぶのはアメリカが誇る『空の要塞』B17フライングフォートレスと護衛機のP38からなる大規模な爆撃連合であった。

彼らの向かう先は日本軍の飛行場

爆撃機隊長

『もうそろそろだ！全員爆撃準備！それと迎撃機に注意しろよ！』

爆撃機隊員

『何大丈夫ですよジャップの戦闘機なんて寄せ付けませんよ』

戦闘機隊員

『そんな手間は掛けさせねーよ！ジャップのオンボロ戦闘機なんて軽く打ち落としてやる！』

ここでも日本軍をなめていた。そのツケは大きく返される事となった。

台湾 高雄飛行場

檣

「隊長、準備OKです」

滑走路には火龍30機が並べられ発進準備ができていた。ちなみにB17に対して有効な兵器として37mmガンポッド2基と一式噴進弾12発を翼下に搭載していた。

加藤

「そうか、行くぞ火音！」

火音

「はい隊長！」

加藤

「全機発進！」

キユイイーーーーン！バシユーーーーッ！

滑走路から勢いよく火龍が発進していった。

その後、さらに鍾馗、飛燕、疾風、月光、屠龍からなる迎撃部隊が次々と発進していった。

同海軍飛行場

整備員

「あつ、隊長！早くしてください！」

隊長

「分かっている！秋水改発進するぞ！」

ヒューーーーン！ドーーーーン！

秋水改が次々と発進していった。秋水改とは迎撃機としては火龍の性能はいいのだが生産コストが高く大量生産が難しいので性能を簡易化しなお且つ大量生産を考えた機体である。

形は事実の秋水を元に機体下部に可動式の大型フロートを一基、両

翼に可動式の小型のフロートを2基搭載しそれにより全長が10・4 m、全幅が11・4 mと大型化したものの武装は翼内30 m機関砲4門と強化され噴進弾が6発だが搭載できるようになった。生産元は川西飛行機で既にライセンス生産を取っている。

秋水改が発進したと同時に滑走路から零戦六四型、烈風二二型、雷電、月光、震電が発進していった。

その頃、高度5000 m地点

加藤

「よし敵爆撃連合を確認、各機行くぞ!」

火龍戦闘隊はP38に挑んでいった。

加藤

「よし、良いぞ」

精鋭ぞろいの戦闘隊は巧みな指揮のもとで有利に戦闘を進ませている。

加藤

「喰らえ!」

火音

「我が剣の切れ味を受け取れ!」

シューパーーン! ドガァーーン!

翼下から発射機にセットされた一式噴進弾が放たれ真っ直ぐP38

に直撃。機体から火を噴きながら海面に落ちて行った。

加藤

「他の奴らはどうなっているんだ？」

火音

「今海軍さんの航空隊がやってきました」

加藤

「そうかでは俺らも行くか」

火音

「ええ行きましょう」

そう言うのと機体を翻しB17の迎撃へと向かった。

一方、爆撃連合はと言うと

爆撃機機長

『前方にジャップの部隊確認！』

爆撃機隊隊長

『全機ボックス隊形を維持したまま我に続け！』

無敵のボックス隊形だが、如月はこれを打ち破るべく作戦を立てていた。

まずB17の遙か上空から震電が30mm機関砲を放ち隊形を崩すと鍾馗、飛燕、疾風、雷電が一式噴進弾で、屠龍と月光は37mm連装斜銃で爆弾倉や翼を狙う。

翼に当たれば翼が折れ飛べなくなるし、爆弾倉なら爆弾に直撃し誘爆そして大爆発という結末だ（？）

爆撃機搭乗員 A

『何だ！全然当たらないぞ！』

爆撃機搭乗員 B

『ジャップの戦闘機がこんなに早いなんて聞いていないぞ！』

爆撃機機長 A

『双発機に気をつけろ！大砲を積んでいるぞ！』

爆撃機機長 B

『わあー！助けてくれ！』

爆撃機機長 C

『ガッデム！ジャップの奴！俺の機体到大穴をあけたぞ！』

爆撃機隊隊長

『全機上昇！急げ！』

爆撃機機長 A

『無理だ！付いて来やがる！』

爆撃機機長 B

『馬鹿な！プロペラが無い機体だと！速すぎるぞ！振り切れない！』

爆撃隊隊長

『嘘だ！この『空の要塞』がジャップごときに落とされるなんて悪

夢だ！』

その時、隊長機に向かい一機の火龍が急降下し30mm機関砲を放ち操縦席に当たると颯爽と離脱した。

操縦する人を失った機体はガクンと機首を下げ落下していった。

結局、爆撃作戦は失敗に終わり参加したB17が100機のうち87機が未帰還、護衛のP38にいたっては全機未帰還と言う大敗を喫した。

作戦の後、台湾から陸海空軍の爆撃連合がフィリピンの飛行場を爆撃。

まさか往復2000キロ飛べる飛行機（零戦や烈風など）があるとは思っていなかったアメリカ軍は奇襲を受け、2日に渡る空襲の後フィリピンの航空隊は全滅。作戦行動にも大きな影響が出たのは言うまでもない。

第39話 台湾沖航空戦（後書き）

作者

「投稿完了！」

暁

「何かですね、秋水改って」

炎龍

「作者の事だから予想はしていたが」

作者

「やっぱり日本の生産状況では火龍の大量生産は無理だと考え考えた挙句にこうなりました」

雷龍

「しかしよ。水上機にするって言うのはちょっと・・・」

作者

「そんな事はない！意外とこれが活躍しますよ」

慶良間

「ほう、期待しているよ」

暁

「そろそろ次回予告を」

作者

「さて今回は東南アジアの戦況状態について描きます。次回『天二

号作戦』お楽しみに」

第40話 天二号作戦

ハワイ・ミッドウェー攻略艦隊がトラック諸島に帰還する頃、日本軍は開戦と同時に、アジア解放作戦『天二号作戦』を発動。フィリピン・マレー半島・香港・シンガポール・インドネシアに上陸し各地で激戦を繰り広げていた。

ウェーク西方沖

第四機動艦隊旗艦凍鶴 艦橋

ちなみに凍鶴とは翔鶴型空母九番艦であり、第四機動艦隊には十番艦の烈鶴、大鳳型装甲空母七番艦の電鳳、八番艦の空鳳が参加している。司令官は山口多聞中将である。

艦隊編成はこちら

第四戦隊『土佐』『伊予』『淡路』『讃岐』

第五戦隊『長門』『陸奥』『剣淀』『鎧淀』

第六戦隊『伊勢』『日向』『扶桑』『山城』

第七戦隊『金剛』『比叡』『榛名』『霧島』

第二十航空戦隊『凍鶴』『烈鶴』『電鳳』『空鳳』

第二一航空戦隊『蒼鷹』『桜鷹』『雷鷹』『閃鷹』

第三水雷戦隊『天龍』『龍田』『球磨』『多摩』

第九駆逐戦隊『春月』『宵月』『花月』『夏月』

第十駆逐戦隊『谷風』『嵐風』『萩風』『舞風』

第十一駆逐戦隊『秋風』『瀧風』『棚風』『空月』

第十二駆逐戦隊『微風』『東風』『早風』『横風』

第四水雷戦隊『北上』『大井』『木曾』『夕張』

第一三駆逐戦隊『棚月』『高月』『島月』『朝月』

第一四駆逐戦隊『藤波』『早波』『浜波』『沖波』

第一五駆逐戦隊『岸波』『朝霜』『早霜』『秋霜』

第一六駆逐戦隊『清霜』『春霜』『夏霜』『冬霜』

しかしウェークに展開しているのは第七戦隊と第二十航空戦隊、第三水雷戦隊とその隷下の第十、十一、十二駆逐戦隊のみで残りはグアム、テニアンに艦隊を展開させている。

水兵

「中将！大本営より電文！攻撃開始との事です！」

山口

「そつか！全攻撃部隊攻撃開始！」

4隻の空母から爆装した烈風、天山、彗星、流星改がウェークに容赦ない爆撃を行い、海上では金剛型の主砲41？砲合計32門が各島々に降り注ぎ軒並み滑走路や駐機している機体を破壊。

その後に上陸部隊が上陸するや否や守備部隊は降伏した。

一方、別に展開していた艦隊はグアム、テニアンに対し空爆と艦砲射撃を相次いで行い、結果は上陸部隊を出さずに降伏させた。

第四機動艦隊は艦隊を合流させトラック諸島へと向かった。

その頃、ようやくハワイ・ミッドウェー攻略艦隊はトラック諸島へと帰還できた。

帰還中、ダンパー型潜水艦の襲撃があったものの対潜能力の優れたイージス艦の攻撃により次々と海の藻屑へと変えていった。

ちなみにアメリカの艦魂がイージス艦のアスロックによって自軍の潜水艦が沈んでいくのを見終わった後、全員顔を青ざめながらもんでもない物を相手にしてしまったと心の中で感じたのは別の問題。

第40話 天二号作戦（後書き）

作者

「はー終わった、終わった」

暁

「何か今回あっさりとしてませんか？」

炎龍

「そついや、今日昨日と早く帰ってきたのに投稿していないのは何故だ？」

作者

「それはね・・・テストに備えてさ」

雷龍

「ほづ、勉強嫌いの作者がか」

作者

「今の所テストで赤点さえ取らなければ進級間違いなしだよ」

炎龍

「そつかい、ではしょうがないな」

暁

「ええそうですね。作者殿そろそろ次回予告を」

作者

「さて今回はフィリピン攻略について描きます。次回『堅城フィリ

ピン陥落セリ
お楽しみに」

第41話 堅城フィリピン陥落セリ

12月23日

日本軍は『天二号作戦』に基づき香港・マレーシア・ブルネイ・ボルネオ・パラオ・マーシャル諸島を占領し残るは事実で日本軍を苦しめたフィリピン・シンガポール・インドネシアだけである。

ちなみに12月10日に起きるはずのマレー沖海戦は歴史の改変により起こっていないので大艦巨砲主義の終焉は勿論無い。

この攻略戦に参加したのは機械化された精鋭の3個師団と台湾の航空隊、そしてトラック諸島から向かった第一機動艦隊と第二独立機動艦隊である。

残った第三機動艦隊はハワイに、第四機動艦隊は日本本土へとそれぞれ向かった。

第二独立機動艦隊は別ルートからフィリピンへ向かっている。

シブヤン海

第一機動艦隊旗艦上総 艦橋

宇垣

「長官、陸軍の報告によりますと敵はマニラを放棄、バターン半島へと逃げたとの事です」

山本

「そうか事実と同じコレヒドール要塞に立てこもるつもりか」

宇垣

「はっ、それと陸軍から航空支援の要請がありました」

山本

「では第一、二、航空戦隊に攻撃部隊を出すように指示してくれ」

宇垣

「了解、各空母に打電！攻撃部隊発進せよ！」

8空母から爆装した零戦、烈風、天山、彗星、流星改が30機ずつ発進していった。

コレヒドール要塞

士官A

「マッカーサー元帥、まずい事態が起こりました」

マッカーサー

「何だ一体？」

士官A

「そ、それが敵の無線を傍受した所トラックから機動艦隊を向かわせるとの事がありました」

マッカーサー

「それはまずい事態だ！海軍さえしっかりしていればこんな事態にならなかったのに！」

ハワイ沖での艦隊戦に敗れた海軍は援護のための艦隊を派遣できず、頼みの極東艦隊も奇襲を受け壊滅し、その上台湾からの爆撃隊により陸海軍の航空隊や滑走路は軒並み全滅という絶体絶命の事態となっていた。

士官A

「幸いなことに何とか戦線を保っていますが、破られるのは時間の問題かと・・・」

マッカーサー

「しかし、こここの要塞はまず撃ち敗れる事はない！」

そう自信満々に言ったがその自信を砕く事が起こった。

ヒュルルル~~~~ドォーーーーン!!ドォーーーーン!!ドォーーーーン!!ドォーーーーン!!

士官B

「元帥!敵の戦爆連合が・・・」

士官C

「さ、さらに水平線上に敵機動艦隊が出現しました!」

第二独立機動艦隊旗艦暁　CIC

如月

「プラズマキャノン砲撃開始、目標コレヒドール要塞、一斉射撃撃てー!」

カッ!バシューーーーーン!バシューーーーーン!バシューーーーーン!バシューーーーーン!

ーン！

暁・不知火・太陽・召雷・慶良間・佐渡・輝龍・神龍・神楽・天羽・十六夜・十五夜の12隻がコレヒドール要塞に砲撃を行った。

それに続き第一機動艦隊の上総・下総・磐城・岩代・尾張・美濃・甲斐・水戸・大和・武蔵・大淀・仁淀がコレヒドール要塞に砲撃を行った。

しかし、砲撃は一回のみでやめた。

如月

「砲撃中止、降伏の打電を」

士官A

「元帥！敵から電文です」

マッカーサー

「何だと！見せたまえ！」

士官から電文を受け取り紙を見た。

マッカーサー

「・・・・・・・・・・」

士官A

「元帥？」

マッカーサー

「敵の司令官からだ、今すぐに降伏しないと徹底した砲爆撃を行う
そうだと。この辺一帯を更地にする位だと」

士官B

「元帥・・・」

マツカーサー

「白旗を挙げてくれ・・・」

桜井

「艦長、敵要塞より白旗が挙がりました」

外の様子を映像で見っていた桜井電側長が報告してきた。

如月

「良かった。これで犠牲が減らせた。敵に不穏な動きが無いが警戒
せよ」

事実で散々日本軍を困らせたコレヒドール要塞はわずか一日にして
陥落した。

その一週間後にフィリピン全土を占領。バターン死の行進のような
悲劇は徹底とした教育勅諭により起こらなかった。

第41話 堅城フィリピン陥落セリ（後書き）

作者

「完成しました」

暁

「作者殿いいのですか？テスト中なのに？」

作者

「明日は自信ある教科だからな」

炎龍

「ほづ、そう言って点数が低いつていうオチはないよね」

作者

「そんな事はない。多分」

雷龍

「そつか、そろそろ次回予告を頼むぜ」

作者

「分かりました。さて次回は東洋のジブラルタルと言われたシンガポールの攻略を行います。次回『シンガポール総攻撃』お楽しみに」

第42話 シンガポール総攻撃

1月14日

ブルネイ

現在ブルネイには第一機動艦隊および第二独立機動艦隊が集結しており第一機動艦隊の艦艇はブルネイ産の重油を給油していた。

第一機動艦隊旗艦上総 会議室

如月

「山本長官、いよいよシンガポールを攻略する 때가 来ました」

山本

「ああ、そうだな。陸軍が最新鋭兵器を揃えたからな」

如月

「127mm滑空砲搭載の一式重戦車の事ですよね？」

一式重戦車とは国防陸軍の保有する10式、15式戦車を元に駆逐艦の主砲から代用した127mm滑空砲を搭載。さらに航空機のエンジンを改良した小型でかつ大出力のエンジンや対トーチカ用の60mm10連装ガンランチャー2基など米軍の重戦車『M26パーシング』は元よりドイツの『ケーニヒス・ティーガー』と互角以上に戦える性能を誇っている。見た目は現ドイツのレオパルド2そっくりである。

山本

「そう言えば2日後に出撃するが敵艦隊の動きはどうか？」

如月

「偵察機による航空写真、敵の無線傍受により分かっている範囲では英東洋艦隊に一部自由フランス軍の艦艇が見受けられます。英戦艦はプリンス・オブ・ウェールズ、巡洋戦艦レナウン、レパルス、さらに何故だか知りませんがフッドが確認できました。フッドは事実ではドイツ戦艦ビスマルクの砲撃で轟沈した巡洋戦艦です。仏戦艦はリシユリュー、ジャン・バール、クレマンソー、ガスコーニユです。仏戦艦の后者2隻は事実通りならばまだ完成していない戦艦のはずです。それに前者2隻はヴィシーフランスの戦艦のはずです。その他に巡洋艦、駆逐艦多数確認できました」

山本

「うーん、もしかしたら君達が介入した事による歴史の变革とやらかもしれないな」

如月

「まずいですね。でもこうなる事を予想しての介入ですから」

山本

「分かった。では2日後に出港する。陽動の方は任せるぞ」

如月

「任せてください」

1月16日

ブルネイより第一機動艦隊、第二独立機動艦隊が出港。第二独立機動艦隊は陽動のため別ルートからマレー沖に向かった。

第二独立機動艦隊旗艦暁 C I C

如月

「順調だな」

有賀

「ええ、この頃敵潜水艦以外確認できませんからね」

水兵

「ソナーに反応！11時方向！」

如月

「我が軍の潜水艦か？」

水兵

「スクリー音からしてガトー級です！」

如月

「アスロック用意！」

逢沢

「了解、アスロック用意」

遠藤

「VLS、アスロックのデータ入力完了！」

如月

「発射！」

パカッ！シュドーーーーン！ドゴーーーーン！

水兵

「敵潜轟沈確認！轟沈前に敵潜からの電波を受信しました」

如月

「内容は？」

桜井

「シンガポールの航空戦力についてです。解読した内容によりますと爆撃機はB17、B25がそれぞれ60機ずつで戦闘機はP38、P40が100機ずつです」

如月

「事実以上に戦力が充実しているな」

有賀

「相当我々を目の敵にしていますね」

水兵

「！偵察に出ていました飛鷹の星電が敵の大編隊を確認したとの連絡です！」

如月

「やはり来ていたか、各空母に迎撃用の戦闘機を上げさせろ」

桜井

「了解！」

空母飛鷹 飛行甲板

甲板には紫電改戦闘機、蒼雷艦上戦闘機が40機ずつカタパルトから迎撃のために発進していった。

飛鷹

「皆、頑張ってきて」

隼鷹

「大丈夫だよ、私達の戦闘機は無敵だよ」

飛鷹

「隼鷹、あまり客観的に見るなよ」

隼鷹

「うう分かっているよ」

この会話の間にも隼鷹、天鷹、天鶴からも零戦六四型、烈風二三型、紫電改、蒼雷が30機ずつカタパルトから出撃していった。

戦艦暁 CIC

攻撃部隊が発進した1時間後、レーダーが150機の敵編隊を捉えた。

水兵

「敵編隊、ESSMの射程範囲に入りました」

如月

「対空ミサイル目標！敵戦闘機P38、P40！ESSM用意」

逢沢

「了解！ESSM、リーダーと連動良し、一斉発射撃てー！」

シュツ！バババーーーン！バババーーーン！バババーーーン！

VLSから勢いよくESSMが発射されP38、P40からなる護衛戦闘機80機に80本の矢が放たれていった。

水兵

「着弾まで3、2、1・・・着弾確認！」

桜井

「敵爆撃機、針路を変えません！」

如月

「後は戦闘機部隊が何とかしてくれるさ」

上空

順調に飛行していた英爆撃部隊は先ほどの攻撃より戦闘機が軒並み全滅し浮足立っていた。

爆撃隊隊長

「何だ！いきなり戦闘機がやられたぞ！」

爆撃機搭乗員A

「敵戦闘機部隊接近！迎撃！」

ヒュツ！ドオオオーーン！

爆撃機機長

「後続の13、16、17、18番機がやられました！」

爆撃機搭乗員B

「くそっ 早すぎる！情報部は何をしてたんだ！」

爆撃機機長

「何が日本軍機はオンボロだって！どっからどう見たって早すぎるぞ！」

爆撃機搭乗員C

「後続の爆撃機が全滅！後は我々だけです！」

爆撃隊隊長

「くそっ、撤退するぞ！」

敵の姿を見る事なく爆撃機部隊はシンガポールへ撤退したがそのシンガポールは総攻撃を受けていた。

シンガポール要塞

英国兵A

「弾幕を密にしろ！くそっ 早すぎるぞ！情報部は何をしていたんだよ！」

英国兵B

「うわっ！マチルダ戦車がやられたぞ！あの戦車を狙え！」

ヒュポーン！ドン！

向かって来る一式重戦車に向かって正面から迫撃砲を撃つものの・

英国兵 B

「なんて重装甲なんだ！効かないぞ！」

英国兵 C

「くらえ対戦車砲！」

そう言つて肩に背負つていたバズーカを撃つた。

ヒュッ！カーーーン！

しかし、前面装甲180ミリの一式重戦車を貫く事は出来なかった。

英国兵 C

「ウソだろ！対戦車砲までもが効かないなんて！」

英国兵 D

「ああ滑走路が・・・」

第一機動艦隊の空母から発進した艦載機が滑走路や燃料タンク、弾薬集積所などを軒並み破壊し、颯爽と帰って行った。

戦艦 暁 C I C

桜井

「艦長、シンガポールには艦隊が存在していませんでした」

如月

「そうか・・・かえって都合がいいんだがな」

桜井

「あつ艦長、第一機動艦隊から電文です」

如月

「内容は？」

桜井

「はつ、『本艦搭載ノ水上電信ニ反応アリ、英仏東洋連合艦隊卜判断、タダチ二本艦隊ハ敵艦隊ニ突入スル』との事です」

如月

「分かった。全航空戦隊と第1、第2護衛戦隊は北上し退避、残り
はすべて我に続け」

36隻の空母と12隻の護衛艦を退避させ、戦艦8隻、巡洋戦艦4
隻、護衛艦24隻は最大速度で会敵予想地点に向かった。

第42話 シンガポール総攻撃（後書き）

作者

「やっとテストが終わりました」

暁

「それは良かったですね」

炎龍

「まったくこんな調子なんだから」

雷龍

「大丈夫かテストは？」

慶良間

「進級が掛かっているんだからな」

佐渡

「そう言えば明日から5連休ですね」

作者

「おう、部活があるからな。それでも連休はうれしいぞ」

炎龍

「勿論投稿するよな」

作者

「ええ、できれば2〜3話は投稿したいな」

暁

「そろそろ次回を」

作者

「さて次回は遅まきながらのマレー沖海戦が起こります。次回『マレー沖海戦』お楽しみに」

第43話 マレー沖海戦

1月16日

マレー半島沖

第一機動艦隊旗艦上総 艦橋

宇垣

「長官、敵艦隊との距離8万を切りました」

山本

「そうか、これで二度目の艦隊戦か・・・」

宇垣

「はい、腕が鳴ります」

山本

「それにしても壮大だな」

第一機動艦隊の戦艦は上総型を筆頭に尾張型、大和型、大淀型の計12隻で形成されこの時点で第二独立機動艦隊の戦艦群を除けば最大最強の戦艦群となっている。

宇垣

「確かに壮大です。大英帝国はおろかアメリカ合衆国すら持っていない51?級以上の主砲を保有する艦隊。まさしく彼らのおかげです」

山本

「そつだな、敵艦隊との距離は？」

宇垣

「距離4万2000」

山本

「よし、全艦順次取り舵一杯！バウ・スラスタ―機動！」

森下（信）

「取り舵ですか！？」

山本

「何をしている！取り舵一杯！」

森下（信）

「…取り舵一杯！バウ・スラスタ―機動！総員何かにつかまれ！」

艦底のバルバス・バウに搭載されているバウ・スラスタ―が回転し左への回頭を早めた。

上総が取り舵を切った事で最初他の艦長達も驚いたが、山本長官の命令に従わざるを得なかった。

驚いたのは日本軍よりもむしろ英仏東洋連合艦隊司令のトーマス・フィリップス提督が驚いた。

水兵A

「先頭の敵戦艦以下、左に回頭していきます！」

トーマス

「何だと！丁字バツク戦法をかけるつもりか！こちらにも面舵一杯！」

何とか同航戦に持ち込もうとするトーマス。しかし日本海軍の戦艦は偽装とはいえ33ノットを出しており、速度に差がありすぎるため食い下がるのが精一杯で砲撃する暇もなかった。

一方、回頭を終えた上総以下16隻の戦艦が持ち前の主砲を一斉に発射した。

戦艦上総
艦橋

山本

「砲擊開始！！」

森下（信）

「全砲門砲擊開始！！」

ズドオオオーン！ズドオオオーン！ズドオオオーン！ズドオオオーン！ズドオオオーン！

英仏東洋連合艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズ 艦橋

水兵A

「敵艦発砲！」

水兵の悲鳴に似た報告の瞬間……

ヒュッ！ズガアアアーーーーン！！

何と一発目からプリンス・オブ・ウェールズの主砲に命中させ、前門の主砲6門が使えなくなった。

キング・ジョージ？世型は前方に6門、後方に4門と変則的な主砲配置をしており徹甲弾は1番砲塔に命中したため砲塔は大破し、爆風により2番砲塔の主砲が折れてしまった。

トーマス

「くそっ！これではロシア帝国の第二太平洋艦隊の二の舞になるぞ！」

士官A

「ほっ報告！一、二番砲塔大破！注水しませんと弾薬庫に引火し大爆発を引き起こします！」

リーチ艦長

「それはまずいぞ！注水急げ！」

トーマス

「これより指揮権をリシュリユーに渡す。これより我が艦はりだ・・」

トーマスは最後まで言えなかった。磐城から放たれた主砲弾が後方艦橋付近に命中させたためである。

士官B

「被害報告！後方艦橋大破！機関室にも命中しました！機関室との通信途絶！」

士官C

「機関停止します！」

水兵 A

「舵効きません！このままでは後方のレパルスと衝突してしまします！」

トーマス

「総員何かに掴まり衝撃に備えよ！」

英巡洋戦艦レパルス 艦橋

水兵 A

「旗艦回頭してきました！」

艦長

「何だと！ぶつかるぞ面舵一杯！」

水兵 B

「間に合いません！」

艦長

「総員！衝撃に備えよ！」

ガッコン！ガッ！ギギギッ！

右に曲がろうとしたレパルスが操舵不能のプリンス・オブ・ウェールズの艦尾に衝突した。

仏戦艦リシュリユー 艦橋

水兵A

「レパルス、プリンス・オブ・ウェールズと衝突しました!」

艦長

「これより指揮権を継承する。全艦最大戦速!各個自由砲撃せよ!」

水兵B

「主砲の射程距離に入りました!」

艦長

「目標!敵超戦艦!一斉射撃撃て!」

砲術長

「砲撃開始!ーっ!」

ズドオオオー!ー!ー!ー!

リシュリユーの38?砲が火を噴く。

戦艦上総 艦橋

水兵A

「敵戦艦2隻衝突、戦闘能力を損失した模様、仏戦艦4隻突撃してきます」

砲術長

「目標変更!目標仏戦艦!」

水兵B

「敵艦発砲!」

森下（信）

「取り舵30度急げ！」

ヒュッ！ガッコン！

リシュリユーから放たれた38？砲が命中した。

森下（信）

「被害報告！」

水兵C

「敵弾左舷に命中！被害皆無！戦闘に支障なし！」

敵主砲は上総の中でも最も厚い部分に命中したため貫通するどころが主砲弾をはじいてしまった。

山本

「砲術長！反撃だ！目標仏戦艦！対艦徹甲弾用意急げ！」

砲術長

「宜候っ！装填よし！主砲発射用意完了！」

山本

「撃てええっーーーー！！」

ズドオオオーーーーン！

上総、下総が仏戦艦群に向けて一斉射撃を開始した。

仏戦艦リシュリユー 艦橋

水兵 A

「敵戦艦に命中弾確認！」

艦長

「やったか？」

水兵 A

「敵速度、針路変更なし！まったく効いていません！」

艦長

「馬鹿な！38？が命中したんだ効かないわけがない！」

水兵 B

「敵艦発砲！」

艦長

「取り舵一杯！早く！」

ヒュッ！ズガガガアアアーーーーン！

上総が放った18発のうち4発が命中した。被弾箇所は艦首、2番砲塔、後方艦橋と煙突であった。

艦長

「ひつ被害報告！」

水兵 A

「艦首に被弾！浸水発生！」

水兵B

「2番砲塔に命中！戦力半減！」

水兵C

「後方艦橋と付属の煙突に命中！」

艦長

「ダメコン班修復急げ！」

バーバーン！バーバーン！バーバーン！

艦長

「どうした！？」

水兵A

「後方のジャン・バル、クレマンソー、ガスコーニュに命中！いずれも艦橋に命中しており統制がとれません！」

ジャン・バル、ガスコーニュは下総、美濃の主砲攻撃で、クレマンソーは大淀、仁淀の主砲攻撃がそれぞれ命中したためである。

戦艦上総 艦橋

水兵A

「敵仏戦艦に命中確認、他の3隻にも命中を確認」

山本

「敵さんはなかなかやるな」

水兵B

「後方より艦影多数確認・・・神楽型を確認」

水兵C

「長官、無線電話です」

山本

「分かった・・・山本だか」

如月

「長官、遅くなりました」

山本

「いや、丁度よかったよ」

如月

「では、また鳴門作戦を発動させます」

山本

「よろしく頼む」

如月

「分かりました。ではまた後で」

そう言うと電話が終わり

山本

「参謀長、鳴門作戦を発動するぞ」

宇垣

「了解、上総より各艦へ鳴門作戦展開」

第二独立機動艦隊旗艦暁 CIC

如月

「各員、鳴門作戦を発動する。敵艦隊の後方に回れ」

森下（飛）

「宜候！」

有賀

「艦長、射程圏内に入りました」

如月

「主砲用意！1番主砲はレナウン、2番主砲はレパルス、3番主砲はフッドの艦橋を狙え！」

逢沢

「了解！レーダーと連動、照準良し、発射！」

ドオオオーーーーン！ドオオオーーーーン！ドオオオーーーーン！

英戦艦プリンス・オブ・ウェールズ 艦橋

水兵A

「後方より敵艦隊確認！戦艦8、巡洋戦艦4、駆逐艦を前面に出して接近！あつ敵戦艦発砲！」

リーチ艦長

「何だと！」

ヒュッ！バーーーン！バーーーン！バーーーン！

水兵B

「レナウン・レパルス・フッドの艦橋に命中確認！」

ヒュッ！ズシャーーーン！ズシャーーーン！

トーマス

「被害報告！？」

水兵C

「報告！C砲塔大破！機関室を貫かれました！それにより艦尾から浸水！」

リーチ艦長

「司令・・・」

トーマス

「・・・分かっている、白旗を掲げ！各艦に砲撃中止を通告せよ」

戦艦上総 艦橋

水兵A

「敵戦艦から白旗が上がりました」

山本

「分かった。各艦に砲撃中止を命じよ。これより我が艦は敵艦隊旗艦に接近する。他の艦が脱走しないように包囲せよ。対潜・対空警戒を密に」

宇垣

「了解！」

こうして事実とは異なるマレー沖海戦が終了し、上総は旗艦のプリンス・オブ・ウェールズに向かっていった。

第43話 マレー沖海戦（後書き）

作者

「投稿完了っ」と

暁

「作者殿、そう言えば今日は入試でしたね」

作者

「入試か・・・懐かしいな」

炎龍

「一年前の事だからな」

雷龍

「一年前で思い出した。作者はこの物語を一年前から考えていたって本当か？」

作者

「本当です。考えていた原作と比較するとかなり変わっている部分がありますね」

炎龍

「どこだ？」

作者

「ここですってしまつと面白くなるので近日公開します」

暁

「そろそろ次回予告を」

作者

「さて今回はシンガポールの命運が決まります。次回『大英帝国の落日』お楽しみに」

第44話 大英帝国の落日（前書き）

いやゝ今日昨日は大変でした。自分は山形出身で揺れが酷かったのですが無事なのが幸いでした。

第44話 大英帝国の落日

1月16日 午後3時30分

英仏東洋連合艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズ 艦橋

水兵A

「敵戦艦接近してきます」

トーマス

「艦種は分かるか？」

水兵B

「識別表に有りません。新型戦艦でしょう」

水兵A

「敵戦艦右舷に・・・何だ！でかすぎるぞ！？」

何度も言いますが上総型の全長は400m、プリンス・オブ・ウェールズの全長は227・1mでありおよそ1・5倍の全長を誇っている。

トーマス

「馬鹿な！日本人があんな戦艦を建造できるなんて・・・日本人侮れないな」

そして上総はプリンス・オブ・ウェールズの右舷に着いた。

水兵C

「提督、無線で会話したいと」

そう言つてトーマスに無線を渡した。

トーマス

「分かつた・・・私は英仏東洋連合艦隊司令長官のトーマス・フィリップス大將だ」

山本

「トーマス大將、私は大日本帝国連合艦隊司令長官の山本五十六大將であります」

トーマス

「唐突ですが部下達の安全を保証してほしい」

山本

「我が日本は捕虜を養う経済力はありませんのであなた達には駆逐艦、巡洋艦、輸送艦に乗つてオーストラリア経由で母国に帰つてもらいます」

トーマス

「えつ、本当ですか!？」

山本

「ええ本当です。決して後ろから撃つ真似はしませんので安心してください」

こうして降伏交渉はあっさりと終え英仏東洋連合艦隊の艦艇に乗つていた将兵は駆逐艦、巡洋艦、輸送艦に分乗しオーストラリアへと向かつた。

捕獲した艦艇は第一機動艦隊の艦艇が曳航し日本本土へと連れていくことになった。

第二独立機動艦隊旗艦暁 C I C

如月

「さて今回我々は石油を含む戦略物資を運ぶ第一輸送艦隊の護衛を務める。本来この仕事は海上輸送護衛艦隊の仕事だが護衛艦隊は別の輸送艦隊の護衛を務めているため我々が護衛を務める」

第一輸送艦隊は後知恵で作った一等、二等輸送艦に石油、鉄、ボークサイト、ゴムなどの戦略物資を搭載しその周りには松型、橘型駆逐艦20隻ずつ、海鷹型護衛空母4隻、択捉型海防艦20隻が輪形陣を成して航行し上空には対潜装備の彩雲、対潜特化の東海が順次監視をするなど事実の教訓を生かしている。

勿論輸送艦は脆弱性については解決しており、駆逐艦も生産性を高めておりなお且つ対潜、対空装備は万全な設計を行っている。

森下（飛）

「了解しました」

如月

「一応潜水艦に対する装備は万全だが対潜警戒を厳重にしてくれ。以上だ解散」

各参謀たちは持ち場へと帰って行った。

如月

「さて、輸送艦隊を無事に運べるかな」

暁

「司令、気にしすぎですよ」

如月

「暁か、そりゃ気にするよ。いくら事実を元に輸送艦隊に護衛艦隊をつけているとはいえ全艦守り切れる訳じゃないからな」

暁

「大丈夫ですよ。いざって時にはアスロックがありますから」

こうした不安が残る中、輸送艦隊はパレンバンを1月17日に出港した。

1月17日 午後7時30分

第二独立機動艦隊旗艦暁 CIC

第二独立機動艦隊は海上輸送護衛艦隊と共に第一輸送艦隊を護衛しつつルソン海峡を通過していった。

如月

「ここまで何事もなく航行できたな」

有賀

「はい、普通なら潜水艦を用いた待ち伏せ戦法を取るのですが・・・」

「

桜井

「ソナーに反応！方向3時ガトー型潜水艦およそ5隻確認！」

如月

「彩雲と東海は何をしている！」

桜井

「只今迎撃に入っていますが爆雷の数が少ないので全て撃沈は不可能です！」

ヒューーーーーン！バジャーーーーーン！バジャーーーーーン！バジャー
ーーーーン！

如月

「ソナー、潜水艦はとらえているか！」

桜井

「ソナーの反応、数が5から4に減りました！」

如月

「1隻だけか、アスロック用意！」

遠藤

「了解！データ入力完了！VLS装填完了！発射サルボー！」

シュドーーーーン！シュドーーーーン！

桜井

「圧壊音確認！全艦轟沈確認」

如月

「よかった。このまま本土へ帰ろう」

その頃イギリスでは英仏東洋連合艦隊が敗れさらにマレー半島、シンガポールの占領に時のイギリスの首相ウィンストン・チャーチルは後の著書で『この戦争で私に最も直接的な衝撃を与えた事件』と言わしめたほどである。

第44話 大英帝国の落日（後書き）

作者

「昨日今日は地震で大変でした」

暁

「国内史上最大の震度でしたからね」

作者

「あの時さ、TSUTAYAにしましてね、携帯が震えていて見たら地震速報でその直後に地震が起こってね。びっくりしたよ」

炎龍

「山形でさえ震度5強だから宮城、福島なんて最悪な状態だな」

作者

「北海道の伊東 涼先生は大丈夫でしょうか？」

雷龍

「まあ無事を祈ろう」

暁

「そろそろ次回を」

作者

「さて次回は捕獲した艦艇の改装が終わります。次回『改装完了』お楽しみに」

第45話 改装完了

3月27日

現在、呉海軍工廠では捕獲した米戦艦、空母の改装で大いに活気づいていた。英戦艦、巡洋戦艦は佐世保海軍工廠で、仏戦艦は大神海軍工廠で改装に明け暮れていた。

第一機動艦隊旗艦上総 会議室

如月

「長官、捕獲艦艇の改装ですが予定通りに4月に完了します」

山本

「早いな、そろそろ改装の内容を話してもいいだろう」

如月

「分かりました。まず米戦艦コロラド以下12隻は主砲を50口径41?3連装4基にケースメイト式副砲を辞め代わりに60口径15.5?3連装副砲2基となります。ワイオミング、アーカンソーは50口径41?連装6基にしています。勿論全長、全幅を伸ばしました。英戦艦も一緒です。レナウン・レパルス・フッドの主砲は50口径41?連装主砲4基にして副砲は一緒です。仏戦艦は50口径41?4連装4基にして副砲を搭載します。ヨークタウン型空母につきましては全長、全幅を伸ばしアングルトデッキ、カタパルトを備え搭載量は220機。対空火器は50口径12.7?3連装高角砲30基、40mm4連装機関砲100基、20?36連装噴進弾10基となります。レキシントンは装甲空母にして基本構想および対空火器はヨークタウン型空母と一緒にです。重巡ニユーオーリ

ンズ・ボルチモア・ウィチタにつきましては主砲を60口径25・5?3連装6基にして高角砲を30基、機関砲を40mmに統一し50基搭載、噴進弾を10基、魚雷発射管は62?4連装6基となります。アトランタ・ジュノー・グリーブランドは防空軽巡として改装しており主砲を60口径15・5?3連装4基に高角砲を30基、機関砲を60基、噴進弾を12基、魚雷発射管は62?4連装6基にしました。改装計画は以上です」

山本

「長々と説明ありがとうございます」

如月

「ありがとうございます」

山本

「そう言えば本土の防衛はどうなっている?」

如月

「各航空基地には海空軍の零戦六四型、烈風一二型、紫電改、秋水改、陸軍の鍾馗、飛燕、疾風等を30機以上配備し重要都市の航空基地には震電、蒼雷を10機ずつ配備させています」

山本

「搭乗員の育成は済んでいるが、整備員の育成はどうなっている?」

蒼雷の発動機『ネ20』は日本初の噴進機関であり、未だに未知の部分があるため整備が難しいと考えているからである。

如月

「それにつきましては育成済みです」

山本

「早いな」

如月

「ええ、歴史を変えるためなら何でもやります。おっともつこんな時間ですか」

時刻は7時を回っていた。

如月

「では長官。これで失礼します」

如月は上総の会議室を後にして、内火艇で暁に戻って行った。

3月30日

第二独立機動艦隊旗艦暁 会議室

如月

「遅れてすまない」

会議室に入ると第二独立機動艦隊の全艦魂と米英仏の艦魂が集まっていた。

そこに如月、有賀、逢沢、森下、宮下が入ってきた。

如月

「暁、自己紹介とは終わったか？」

暁

「もうすでに終わっているわ」

如月

「そうか、改めてようこそ大日本帝国へ、俺は第二独立機動艦隊司令長官の如月大悟大将だ。よろしくな」

プリンス・オブ・ウェールズ

「私は元英仏東洋連合艦隊旗艦のプリンス・オブ・ウェールズです。こちらこそ宜しくお願いします」

コロラド

「私は元太平洋艦隊旗艦のコロラドです。宜しくお願いします」

そう言った後、互いに握手した。

コロラド

「長官、1ついいですか？」

如月

「うん、何だね？」

コロラド

「アトランタから聞いたのですが第二独立機動艦隊は未来から来た艦隊って本当ですか？」

如月

「うっ、本当の事だ」

ヨークタウン

「本当ですか!？」

如月

「本当の事だ。俺達は2020年の日本からやってきた日本人だ。俺達是对馬沖に核攻撃に会い、気が付いたらこの世界にいた」

レキシントン

「だとしたら、長官がいなかったらこの世界はどうなっていたのか？」

如月

「俺が話すより、見た方が早いな。有賀例のビデオを」

有賀

「了解、少し待ってください」

1分後

会議室に隠されたテレビが姿を現した。

如月

「このビデオには俺達がいた世界の歴史などを収録したもので、第二次世界大戦から現在までの映像や写真を編集して作ったビデオで1時間で終わる奴だ。見てくれ」

如月はBDレコーダーにBDを入れ映画が始まった。

1時間後

如月

「どうだったか？」

ヨークタウン

「原子爆弾・・・なんて兵器を・・・」

エンタープライズ

「嘘だ、嘘だ、嘘だ。祖国が、祖国があんな事をするなんて」

如月

「前にエンタープライズがこれはアメリカの正義の戦いだと言っていたが、俺は一般市民を平気で殺すアメリカを正義だとは考えられない。だからあんな悲劇をなくすために俺達は戦う。君たちの力を貸してくれないか」

プリンス・オブ・ウェールズ

「私達英国艦は協力しますよ」

コロラド

「米国艦も協力するよな」

ホーネット

「ああ、あんな事をするアメリカなんて祖国とは呼べない。協力するよ」

ヨークタウン

「私もだよ、エンターあなたも協力するよね？」

エンタープライズ

「・・・うん、協力するよ」

リシュリユー

「我々仏戦艦も協力するよ」

如月

「ありがとう、全艦の同意が確認できた所で全艦に新しい艦名を発表する。まずプリンス・オブ・ウェールズは因幡、レナウンは豊前、レパルスは豊後、フッドは対馬、リシュリユーは丹波、ジャン・バールは丹後、クレマンソーは美作、ガスコーニュは但馬、コロラドは越前、メリーランドは越中、ウェスト・ヴァージニアは越後、テネシーは筑前、カリフォルニアは筑後、ペンシルバニアは薩摩、アリゾナは大隅、ネヴァダは肥前、オクラホマは肥後、ニューメキシコは石見、ワイオミングは出雲、アーカンソーは安芸、ヨークタウンは翔龍、エンタープライズは瑞龍、ホーネットは桜龍、レキシントンは剣龍、ニューオーリンズは白根、ボルチモアは三峰、ウィチタは高原、アトランタは成瀬、ジュノーは綾瀬、グリーブランドは高瀬以上、これからよろしく頼む」

全員

『よろしく願います！』

如月

「以上！では解散！」

4月7日

呉

第二独立機動艦隊は午前2時を持って呉を出港した。夜中に出港したのは諜報員に気が付かないようにするためである。歴史通りに進めば4月18日に東京初空襲が起こるはずであり、太平洋上で米

艦隊を撃破し、空襲を阻止するために出港したのである。

水兵

「水道を抜けました。これより太平洋に進出します」

如月

「全艦隊、巡航速度で航行せよ」

こうして、また歴史を変えるべく、第二独立機動艦隊は出撃していた。

第45話 改装完了（後書き）

作者

「完成しました」

暁

「未だに余震が続きますね」

炎龍

「うん、店も品物が少なすぎたよ。こんなのは初めてだよ」

雷龍

「ガソリンも規制していたからな」

暁

「大変ですね。ではそろそろ次回予告を」

作者

「さて今回は日本初空襲を阻止するために敵艦隊を迎撃していきま
す。次回『日本本土初空襲』お楽しみに」

第46話 日本本土初空襲

4月17日（日本時間午後5時）

第二独立機動艦隊は太平洋を邁進していた。飛鷹、隼鷹から発進した星電から敵艦隊発見の報告を受け詳しい偵察の結果、敵艦隊の陣容は空母4、巡洋艦6、駆逐艦16であることが分かった。米艦隊は事実の航行を通じて日本本土へと近付いていった。

第二独立機動艦隊旗艦暁 CIC

水兵

「敵艦隊を発見しました」

如月

「よし各艦、作戦通りにペアになって米艦隊を待ち伏せし追い返せ！それと帝都防空隊に明日迎撃機を発進させるように打診せよ」

桜井

「了解、暗号回線で打診します」

如月

「慶良間に妨害電波を放つように連絡しろ」

水兵

「了解」

イージス戦艦慶良間 艦橋

水兵

「旗艦より連絡、妨害電波を放てとのことですよ」

音葉

「了解、これより電子戦に入ります！ECM攻撃用意！」

副長

「了解、電子戦用意！」

水兵

「用意完了！」

副長

「ECM攻撃開始！」

慶良間

「見てろよ米軍！これが私の力だ！思い知れ！」

イージス戦艦慶良間から強力な妨害電波が放たれた。

4月18日（日本時間午前5時）

第18任務艦隊 空母エセックス

なぜエセックスが存在しているかと言うとミッドウェーでの襲撃戦で捕獲された空母4隻の補充をとにかく急がせるようにと大統領命令のため何とか進水ができたが代償に艀装が半分も済んでいなく艀装しながら航行していたのだ。話を戻す。

現在第18任務艦隊のレーダーが突然真っ白になり各艦混乱してい

た。

士官A

「どうだ？レーダーは回復したか？」

水兵A

「いいえ、まだです。アンテナを見ても異常がありませんでした」

士官A

「じゃあなんで故障してるんだ」

水兵A

「分かりません」

士官A

「とにかく復興を急げ」

水兵A

「了解しました」

士官B

「提督、爆撃機の発進が完了しました」

キンケード

「分かった。ハルゼー提督の敵討ちだ！全機出撃せよ！」

士官B

「サー・イエッサー！！」

命令の後、エセックス、ヨークタウン？から18機ずつのB25が

出撃していった。残りの2隻、ワスプ、サラトガは護衛の戦闘機、哨戒機などを積んでいた。

そして最後の爆撃機が出撃し終わったのは事実と同じ8時18分であつた。

士官B

「最後の爆撃機の発艦が完了しました」

キンケード

「分かった。全艦回頭、これより帰還する」

水兵C

「左舷に艦影！・・・大きさからして戦艦です！」

キンケード

「馬鹿な！レーダーは何をしていた！」

士官A

「そつ、それがレーダーが使用不能でありまして」

キンケード

「くそつ、対艦戦闘用意！奴らを近づけさせるな！」

水兵C

「敵艦から何かが・・・」

ヒューーーーン！ズドオオオーーーン！！

水兵D

「重巡ミネアポリス爆沈!!」

重巡洋艦ミネアポリスは神楽、天羽から放たれた烈火弾が一番、二番砲塔、艦橋に直撃し弾薬庫に誘爆し船体をくの字にしながら沈んでいった。

キンケード

「何という事だ!重巡が一撃で・・・」

士官B

「提督・・・」

キンケード

「くつ、全艦隊回避行動をとりつつ、東の方向に撤退せよ」

士官B

「了解!」

空母エセックスから発光信号が打たれた。

巡洋戦艦神楽 艦橋

水兵A

「敵艦隊、撤退していきます」

副長

「艦長どうしますか?」

ちなみに艦長は西崎 涼大佐である。

西崎

「零式酸素魚雷発射用意！」

砲術長

「宜候！・・・装填完了！」

西崎

「発射！」

パシャン！パシャン！パシャン！

神楽型4隻の隠された右舷魚雷発射管から60発の必殺魚雷が放たれた。

第18任務艦隊 空母エセックス

水兵C

「敵艦が引き返していきます」

キンケード

「一体、何を企んでいる日本軍」

ズドオーン！

キンケード

「被害報告！急げ！」

すると水兵が艦橋に走ってきた。

水兵D

「報告！艦尾に被弾！第一ミスクリュー大破！機関室にも浸水が！」

キンケード

「まずい！ダメコン班急いで修復せよ！」

見張りの水兵から報告が入った。

水兵C

「ヨークタウン？！サンフランシスコに被弾！・・・サンフランシスコ爆沈しました！！」

その時、一人の水兵が艦橋に入ってきた。

水兵E

「報告！機関室浸水増加！機関室使用不能！傾度6度！」

その報告にダメコンのトップである副長は青ざめた。

副長

「提督・・・これ以上は・・・」

キンケード

「・・・これより旗艦をアストリアに移す。遺憾ながらこの艦は破棄する」

水兵C

「ヨークタウン？より光通信です！『我航行不能、遺憾ながらこの艦から撤退する』との事です！」

キンケード

「そうか・・・総員退艦！」

この攻撃で事実で不屈の空母と言われたエセックスの命運は尽きようとしていた。

一時間後

重巡アストリア

士官A

「提督、乗員の救出が終わりました」

キンケード

「そうか・・・自沈は出来るか」

士官B

「駆逐艦の魚雷なら可能です」

キンケード

「自沈処分用意」

その瞬間、見張りの水兵が驚愕の報告をしてきた。

水兵B

「3時の方向！敵戦艦部隊接近！」

水兵C

「敵戦艦発砲！」

ヒューーーーーン！バシャーーーーーン！バシャーーーーーン！

これは別ルートから敵艦隊の迎撃に入ろうとしていた第一、二戦隊からなる第一打撃部隊であった。

キンケード

「つく、全艦艇に告ぐ！煙幕を張って撤退！」

士官A

「イエッサー！」

戦艦 暁 艦橋

水兵A

「敵艦隊、煙幕を張って撤退していきます」

水兵B

「前方に敵空母確認！」

如月

「空母だと・・・艦の種類は分かるか？」

水兵A

「・・・判明しました。エセックス級空母二隻です！」

如月

「これまた驚いた。まさかエセックス級二隻とは」

暁

「私、心配だから見てくるわ」

如月

「頼むぞ」

空母エセックス

暁

「ひどい、艤装もなっていないなんて」

暁はエセックスの飛行甲板を見て思わず言ってしまった。対空火器は半分も搭載されておらず、装甲も剥きだしも部分が目立つからである。

？

「誰、そこに居るのは？」

暁

「私は暁型戦艦一番艦の暁よ」

？

「私はエセックス型空母ネームシップ、エセックス」

暁

「あなた大丈夫？」

エセックス

「・・・私達をどうするの？」

暁

「このまま日本本土へと連れて行きます」

エセックス

「妹も・・・？」

暁

「ええ、勿論例外はありませんから」

エセックス

「よかった・・・これで助かる」

こうしてまたお土産ができたのであった。

一方、茨城県上空

現在、茨城上空には陸海空軍の合同迎撃部隊が集結していた。その数100機、36機のB25に対しては過剰と言える戦力であった。主な機体は海空軍の零戦六四型、烈風二二型、紫電改、陸軍の隼、鍾馗、飛燕、疾風であり、その中には対B29の切り札である震電、蒼雷が10機ずつと加藤火龍戦闘隊の火龍二型が30機待機していた。

火龍二型とは先行量産の火龍の問題点を改善した完成形の機体である。特徴は翼下に固定武装と化した37mmガンポッド2基を備えている。

加藤

「さて敵さんが来たぞ、戦闘隊我に続け！」

火龍二型のレーダーが敵爆撃機隊を映す。

火龍二型が轟音を轟かせ、あっという間に飛んでいく。後方に居た零戦、烈風も速度を上げ火龍二型の後に続いた。

加藤

「いたぞ！全機攻撃開始！」

火音

「我の一撃を思い知れ！」

加藤機がB25とのすれ違いざまに30mm機関砲と37mmガンポッドを一斉射する。

ズドーーーーン！

この攻撃でB25が6機粉碎されたことで米軍機は大混乱した。

爆撃機搭乗員A

「敵機発見！」

ズドーーーーン！

爆撃機搭乗員B

「後方の4、5、8、11、13、15番機墜落！」

ドゥーリツトル

「各機弾幕を張れ！敵機を寄せ付けるな！」

爆撃機搭乗員C

「は、早い！あれが噂のジェット機なのか！」

爆撃機搭乗員D

「何故だ！何故ジャップが持つてるんだ！」

爆撃機搭乗員A

「前方に、敵編隊接近！」

ドゥーリットル

「くつ、多すぎる！全機超低空飛行で行くぞ！」

火音

「中佐、敵編隊が低空飛行に入っていきます」

加藤

「無駄だな、どっちにしてもやられる」

なぜならドゥーリットル爆撃隊の先には陸軍の防空部隊が待機していたからである。主な武装は多連装噴進弾を搭載した九八式装甲戦闘車や高度1万以上飛ぶ高角砲、さらに近接信管搭載の砲弾なので威力は絶大である。

陸軍兵A

「敵爆撃隊接近！」

部隊長

「全車、日頃の訓練の成果を見せてやれ！」

全員

『了解！！』

多連装噴進弾の口径は50mmで16連装であり射程距離は800

0 mである。

陸軍兵 B

「敵部隊、射程距離に入りました！」

部隊長

「全車砲撃開始！」

シュバババーン！シュバババーン！

爆撃機搭乗員 A

「機長！敵部隊が！」

ドゥーリットル

「馬鹿な！」

グワッ

ドゥーリットル機は大きくバランスを崩しそして墜落した。

陸軍兵 C

「敵機墜落！」

部隊長

「機体から火が出ていないな。よし救出せよ」

陸軍兵 D

「了解！」

この話し合いの中でも戦闘は続いていた。高く飛べば火龍二型など

の餌食になり、かと言って低く飛べば多連装噴進弾や近接信管付きの高角砲で撃ち落とされていくから米軍にとっては地獄であつただろう。

加藤

「敵爆撃部隊全滅確認・・・これより撤退する」

太平洋上

第二独立機動艦隊旗艦暁 艦橋

水兵A

「長官、帝都防衛に成功したようです」

如月

「予定通りだな、これよりトラック諸島に向かう。エセックス達の修理をそこで行うからな」

森下（飛）

「了解、全艦隊針路をトラックへ」

こうしてまた歴史のページを書き換えた第二独立機動艦隊であつた。

第46話 日本本土初空襲（後書き）

作者

「完成したぞ」

暁

「そう言えばまた新しい小説投稿しましたね」

炎龍

「そう言えばそうだな」

雷龍

「この場を借りて宣伝すれば」

作者

「それはいいアイデアですね。ではええと、新しい小説は自分が考えた架空兵器を紹介する小説でタイトルは『架空兵器大特集』です。皆さん御覧になってください」

暁

「はいよかったです。続いて悪いのですが次回予告を」

作者

「さて次回は艦隊がトラック諸島に寄ります。次回『トラック入港』お楽しみに」

第47話 トラック入港

4月26日

トラック諸島 泊地

如月

「機関停止、投錨」

第二独立機動艦隊は無事にトラック諸島に入港した。

森下（飛）

「了解」

暁

「事実のトラックとは違いますね」

如月

「そりゃそうだろ。建造用ドック4つに600m級の艦艇も入れる超大型ドック6つに中型ドック10とさらに連山も運用できるほどの長大な滑走路を2つ備えているからな」

そのためトラック諸島は重要度が高くなり、連合軍からは最重要拠点としてマークされている。

入港した後、捕獲したエセックス、ヨークタウン？は建造用ドックに入り突貫で修理、改装を始めた。

現在トラックには第一機動艦隊と第二独立機動艦隊が停泊している

のだが、周りを見ると見慣れぬ艦艇が停泊していた。

正体は改装が終わりトラック諸島に来た元米英仏戦艦と米空母、米重巡、米軽巡であった。

一応戦隊編成を言っておく。

第四戦隊 『因幡』 『豊前』 『豊後』 『対馬』

第五戦隊 『越前』 『越中』 『越後』 『石見』

第六戦隊 『丹波』 『丹後』 『美作』 『但馬』

第七戦隊 『筑前』 『筑後』 『薩摩』 『大隅』

第八戦隊 『肥前』 『肥後』 『出雲』 『安芸』

第二十航空戦隊 『翔龍』 『瑞龍』 『桜龍』 『剣龍』

第七護衛戦隊 『白根』 『三峰』 『高原』 『成瀬』 『綾瀬』 『高瀬』

となっている。

如月

「さてと・・・」

そう言うと各艦に通じる無線のスイッチを押し

如月

「総員よく聞け。これまで長い航行ご苦労であった。今日から三日

間一部を残して上陸を許す。総員よく休憩して決戦に備えてくれ。以上だ」

放送が終わった後、各艦から内火艇やカッターが降りて行った。

如月

「連中のする事は早いな」

有賀

「艦長、私達も上陸しましょう」

逢沢

「それはいいね。艦長も一緒に」

如月

「まっ、いいか。皆で行こう」

しばらくして如月達はトラックの町中を散策していた。

有賀

「それにしても戦時中とは言えないほど活気づいていますね」

逢沢

「私達のいた世界とは大違いです」

如月

「当たり前だ。前世では大東亜共栄圏を謳いながら資源目当てだけの占領政策を行ったせいで現地住民の反感を買ってしまった・・・しかしそう言う事が無いように軍の横暴を抑えるために道德警察が存在しているんだ」

道徳警察とは米内首相が陸軍の反対を押し切って議会を通過させた組織で軍人の横暴などを取り締まり現地住民の反感を買わない事を目的にしている。

事実、道徳警察の取り締まりによって軍人の横暴が激減。そのため反感が少なく独立政策がスムーズに行っている。

またしばらく歩いていると近くに喫茶店があつたので

如月

「なあ皆、その喫茶店に寄ろうか？」

有賀

「いいですね。行きましょう」

逢沢

「行きましょ、行きましょ」

五人が喫茶店に入る。

マスター

「いらつしゃいませ」

店内にはお人よしの店長と・・・海軍服を着た青年が一人がいた。

如月

「マスター、コーヒー五つ」

マスター

「かしこまりました」

するとその声に反応した青年は

青年

「この声・・・如月司令ですか？」

如月

「ええ」と、あなたは神楽艦長の西崎大佐ですよね」

西崎

「そうです司令。隣りいいですか？」

如月

「いいけど」

西崎

「失礼します」

そう言うと隣に座った。

マスター

「お待たせしました。コーヒーです」

マスターがお盆でコーヒーを持ってきた。

マスター

「ごゆっくりどうぞ」

そう言っているとカウンターに戻って行った。如月達はコーヒーを飲んだ。

如月

「うまいっ!」

有賀

「まさかトラックでこんなにうまいコーヒーが飲めるなんて」

逢沢

「最高です」

森下（飛）

「おいし」

宮下

「しあわせ」

次々と絶賛の声が出てくる。皆がコーヒーを飲んでいると西崎大佐が如月に

西崎

「そう言えば神楽から聞きましたけど司令達って未来から来たんですよね?」

如月

「ああそつだ。78年後の日本からこの世界に来てしまったんだ」

西崎

「最初はまさかと思ってしまったんですが、神楽が真剣な目で言っていたんで・・・」

如月

「まあ普通の人ならそうなるよね」

西崎

「それにしても我々第二独立機動艦隊にも新しい艦艇が入ってきたね」

如月

「まつ、戦艦12、空母4、巡洋艦6が艦隊に編入しました新たに空母2が編入される。これで大規模でかつ同時に攻撃が可能になる」

西崎

「ドックに入った空母ですが、近くで見ると艀装がなっていないかったので相当米軍は空母不足で焦っているのでしょうかね？」

如月

「俺達のいた世界とはかけ離れているからな。これは未来情報だけどあの2隻の空母、正式的にはエセックスとヨークタウン？は昭和18年に本来なら完成するのだが。慢性的な空母不足のせいで中途半端なまま戦場に出していた事になる」

そういう話をしていると夕暮時になっていたので

西崎

「では司令。またあとで」

カウンターに勘定をおいて喫茶店を出た。

如月

「俺達も帰るか」

西崎大佐が勘定を置いていった所に自分たちの勘定を置いて喫茶店を出た後、如月達は母艦である暁へと戻って行った。

第47話 トラック入港（後書き）

作者

「久々に投稿しました」

暁

「この頃、架空兵器大特集に力を注いでいませんか？」

作者

「否定はしない」

炎龍

「面白いのは分かるけど、こっちにも精を出してくれよ」

作者

「分かっている。だからこうして投稿しているのでしょう」

雷龍

「自慢して言うな」

暁

「なんか無限ループになりそうなので作者殿、次回予告を」

作者

「次回はセイロン島への攻撃を行います。次回『セイロン島攻撃』お楽しみに」

第48話 セイロン島攻撃

4月27日

セイロン島沖400キロ

第二独立機動艦隊旗艦暁 CIC

現在、第二独立機動艦隊はセイロン島攻撃を行うためにインド洋を突き進んでいた。

水兵A

「艦長、そろそろ作戦時間となります」

如月

「分かった。第二十航空戦隊に例の攻撃部隊発進させると伝えておけ」

水兵A

「了解。第二十航空戦隊に打電します」

空母翔龍（元ヨークタウン） 防空指揮所

翔龍

「まさか日本軍と一緒に戦うなんて・・・しかしこれは戦争。私情は持ち込まない」

そう言うつと飛行甲板を見つめた。飛行甲板には見慣れぬ機体が10機ほど存在していた。

その機体は双発で精練されたフォルムで黒く染まっていた。

正体は双発隠密爆撃機『闇鷹』つまり簡易型ステルス爆撃機である。

特徴は何と言っても機体の半分が木製である事で半木製ならレーダーに引っかけられる恐れは少なくなる。しかしジュラルミンと木の接合は可能なのか？実際ソ連軍戦闘機は鉄不足から積極的に木材を使用していた。ソ連ができるなら我が大日本帝国もと空技廠の職員が必死で研究し結果強力な接着剤が完成しそれを使用した事により簡易版のステルス爆撃機闇鷹が完成したのだ。

闇鷹は全長17.4m、全幅22.1m折り畳み時には15.2m、発動機は誉三二型2基、最大速度625ノット、航続距離5000km、武装は20mm連装旋回式機関砲で上部に2基、尾部に1基、爆装で2トンと申し分のない性能となっている。

闇鷹は翔龍の他にエンタープライズ航空ネット レキシントン桜龍、剣龍にそれぞれ10機ずつ配備されている。

ブオオオーーーーン！！

新しく備わったカタパルトから次々と発進していく。その後第二十航空戦隊4隻の空母から護衛機として烈風二二型が計40機カタパルトから出撃していった。

セイロン島 トリンコマリィ レーダーサイト

レーダー員A

「ふああゝひまだっ」

レーダー員B

「こらっ、サボるなっ」

レーダー員A

「しかしよ、敵さんは来ないし、おまけに疲れた」

レーダー員B

「だからっ・・・」

彼は最後まで言う事が出来なかった。

ヒューーーーーン！ドガアアーーーーン！ドガアアーーーーン！

レーダー員B

「何だ一体！」

アナウンス

『敵機来襲！総員配置につけ！』

レーダー員A

「馬鹿なッ！レーダーに映っていなかったぞ！」

彼らは知らなかった。日本軍は恐るべき兵器を保有し使用していた事を・・・。

爆撃機機長A

「よく狙えよ」

爆撃機搭乗員A

「分かっています！3、2、1投下っ！」

そう言いながら爆弾投下スイッチを押した。

すると爆弾架に搭載していた250kg爆弾8発が飛行場に直撃し大穴をあけた。

爆撃機搭乗員A

「命中確認っ！」

爆撃機機長A

「よしっ帰還するぞ！」

後続の閻鷹が粗方飛行場や格納庫、レーダーなどに爆弾を命中させた後、颯爽と引き返した。

再び暁 CIC

桜井

「報告！閻鷹部隊は敵飛行場などの爆撃に成功。落伍機ゼロ！」

如月

「これでレーダー網に穴が開いた。本命の攻撃部隊発進せよ！」

桜井

「了解、各空母に打電します！」

原子力空母炎龍 防空指揮所

炎龍以下同系艦11隻から斬空と名を変えたF-18、蒼神と名を

変えたF - 25、桜神と名を変えたF - 27が10機ずつ計360機がセイロンに出撃していった。

炎龍

「さてお前ら頑張つてこいよ」

そう言いながら発進していく戦闘機達を見守った。

セイロン島

英見張り員A

「んゝ・・・んっ？ジャップだ！」

向かって来る戦闘機を見つけてそう叫んだ。

するとけなしの対空砲火をあびせるものの数が少なすぎてまったく当たらない。

その間にも空対地ミサイルが次々と対空陣地やかすかに残った機体や格納庫などに命中させていく。

英国兵A

「ええゝい、くそつ当たれっ！何だあれは一体！」

英国兵B

「アメリカが恐れているジェット機とやらではないのか！？」

英国兵C

「そう言えばドイツでも使用しているって聞いたぞ！」

英国兵D

「日本は技術後退国じゃなかったのか!？」

そう言う間にも攻撃は続き攻撃隊が母艦に引き返した時にはトリンコマリーは滑走路など軒並み壊滅していた。

また同時刻に第一四、一五、一六、一七航空戦隊から攻撃部隊を出撃していきコロンボ基地への航空攻撃を行いトリンコマリーと同様に軒並み壊滅させた。

その後陸軍二個師団がセイロン島に上陸。大した抵抗もなく3日後に占領が完了し湾内に残っていた艦艇は日本軍が受け取ることになった。

第48話 セイロン島攻撃（後書き）

作者

「完成しました」

炎龍

「やっと出てこれた」

暁

「簡易のステルス爆撃機、何時の間に作っていたんですか？」

作者

「この機体自体の計画は四年前から行っていて今年に入ってからやっと完成した」

雷龍

「それはそうと明日作者の誕生日だったな」

作者

「そつだよ、特別編を行うためにいろいろな作者さんに許可を取った所全員OK河出ました」

炎龍

「今度は投稿できるな」

作者

「その事に関しては大丈夫です」

暁

「そうですか・・・そろそろ次回を」

作者

「今回は珊瑚海海戦を描きます。次回『珊瑚海海戦前編』ご期待ください」

特別編 誕生会交流編（前書き）

初めての特別編です。ではどうぞ

特別編 誕生会交流編

天地銀河架空世界

パーティー会場

作者

「さてそろそろゲストが来る時間だな」

如月

「今回は誰を呼んだんだ？」

作者

「まず零戦先生から椎名将斗さんと翡翠さん昂さん瑞鶴さんで、新米士官先生からは福本大介さんマリィダさんと艦魂の海龍さん、とね先生からは矢野大和さんと艦魂の時風さんですね」

如月

「豪華メンバーばかりだな」

作者

「当たり前だ。初めての特別編だからな」

如月

「それにしてもあのボックスは何だ？」

作者

「ゲストが全員来たらのお楽しみ」

如月

「何だよそれは・・・」

パーティー会場前 受付場

炎龍

「なんで私達が受付を」

雷龍

「しょうがないやろ姉貴、今回だけって作者が言っていたからな」

？

「すみません、誕生会交流パーティー会場はこちらですか？」

炎龍

「そうですが・・・あつ福本夫妻に椎名夫妻ですよね」

椎名

「ああそうだが」

瑞鶴

「受付に艦魂って・・・」

昂

「翡翠姉が見たら真っ直ぐ飛びつくでしょうね」

福本

「お久しぶりです。とね先生の『受験大戦』（設定上）以来ですね」

マリーダ

「あの時はいろいろとありがとうね」

炎龍

「あつ、はい椎名さん達に自己紹介を・・・炎龍級原子力空母一番艦炎龍の艦魂の炎龍です、お会いできて光栄です。椎名さんに昂さんに瑞鶴さんに福本さんにマリーダさん。私達にとって英雄ですから」

水龍

「同じく炎龍級原子力空母二番艦水龍の艦魂の水龍です」

雷龍

「同じく炎龍級原子力空母三番艦雷龍の艦魂の雷龍です」

椎名

「ああそんなにかしこまらなくても普通にしてや」

瑞鶴

「もう入っていいか？」

炎龍

「どうぞ中に入ってください」

雷龍

「また誰かが来たぞ」

？

「すみませうん、パーティー会場はここでいいんですよね？」

水龍

「そうですが、どちら様ですか？」

？

「はい、駆逐艦時風から矢野大和です」

？

「駆逐艦時風の艦魂の時風です」

炎龍

「はいOKです。中にどうぞ」

パーティー会場

作者

「みなさん今日は私の誕生交流会にお集まりいただき誠にありがとうございます。早速ですがあのボックスに皆さんがここで着る服を用意しました。各ボックスのプレートにしたがってください。ではどうぞ」

椎名

「どついう服なのかな？」

瑞鶴

「翡翠姉みたいな18禁だったら切るぞ」

昴

「そう言う事はないと思うが・・・」

く十分後く

作者

「ではどうぞ」

如月

「まさかとは思ったがこれとは・・・」

服装・・・コードギアスのブリタニア軍服

有賀

「何なんでしょうかこの服は？」

服装・・・コードギアスのアッシュフォード学院の制服

椎名

「あの作者の趣味が丸わかりな服やな」

服装・・・機動戦士Zガンダムのエウーゴ軍服

瑞鶴

「ふむつ、まだこれはいいな」

服装・・・機動戦士Zガンダムのティターンズ軍服

昂

「これ着ていたらまず翡翠姉が間違いなく食らいつくな」

服装・・・劇場版機動戦士ガンダム～逆襲のシャア～の時の地球連

邦軍服

福本

「何だが皆さんすごいですね」

服装・・・機動戦士ガンダムSEEDのプラント軍の白服

マリーダ

「そう言う大介もかっこいいよ」

服装・・・機動戦士ガンダムSEEDのプラント軍の赤服

大和

「これはちよつと・・・」

服装・・・機動戦士ガンダムUC^{ユニオン}のバナージの私服

時風

「似合っていますよ大和さん」

服装・・・機動戦士ガンダムUC^{ユニオン}のオードリーの私服

作者

「ちなみに私の服装はコードギアスのゼロです・・・そう言えば翡翠さんと海龍さんがいませんね？せっかく用意したのに・・・」

その時であつた。

兵士A

「ほ、報告します！現在何者かが我が軍の防衛ラインをことごとく破壊しています！」

作者

「何だと！映像は出せるか！」

兵士A

「可能です！少し待ってください！」

数秒後映像が流れると・・・そこには案の定あいつらが

翡翠

「どけどけどけっ！邪魔だっ！待っていないさいよ有賀ちゃん！」

海龍

「崇高なるコスプレを邪魔するものは誰であろうと許さ〜ん！」

そう言いながら兵士たちを蹴散らしていく。

福本

「またあいつらかよ！」

マリダ

「一度ならず二度までも」

椎名

「何してるんだよ翡翠は・・・」

作者

「（どうする、どうする、あいつらをまとめて行動不能にさせれる方法は無いのか・・・そうだがあれがあるではないか。しかし持っているかどうか）大和君！」

大和

「はい、何でしょうか？」

作者

「あれはあるか？」

大和

「一応作者から持っていて・・・まさか!？」

作者

「そのまさかだ・・・」

その頃

翡翠

「あそこか!」

海龍

「何と他愛のない、鎧袖一触とはこの事か・・・」

ちよつとそれは著作権が・・・

海龍

「うるさい、うるさい、うるさい!」

それなのですが・・・

翡翠

「とにかくあんなのは無視して突撃だ!」

海龍

「はい！翡翠司令！」

作者

「来るなら来い！・・・今だ！」

突撃してきた翡翠達が見た物は・・・

翡翠

「またそれか！」

映写機からはあの時の（重巡とね先生の架空兵器の館の第40話を参照）マッチョ過ぎる野郎共のドアップ映像であった。

海龍

「・・・・・・・・（ボタン！）」

作者

「また役に立つとは・・・大和君ありがとう」

大和

「いいえ、役に立てたのですから・・・あれどうしましょう」

指差した先には気絶して倒れている二人の事であった。

作者

「またあれを言えば即復活するでしょう。済まないが有賀さん手伝つて」

有賀

「分かりました」

あの気絶している二人を起こす言葉とは

作者

「起きろ〜これからコスプレ大会を行うぞ〜」

有賀

「起きないと私のコスプレ見せませんよ〜」

ガバツ！

二人

『それは誠なのか!!』

如月

「いつの時代の言葉だよ・・・」

作者

「起きた所で誕生交流会と二次会としてコスプレ大会を開催します」

全員

『いえ〜〜〜〜い!』

その後、交流会とコスプレ大会は明け方まで続き、椎名夫妻を十式飛行艇輸送型で帰っていき、福本夫妻は回転翼攻撃機轟龍輸送型で帰っていった。大和君と時風さんは自分達の回転翼戦闘機忍輸送型で帰って行った。

余談だが翡翠さんと海龍さんは有賀のコスプレ写真を満足そうに持

ち帰ったのは別の話。

次回へと続く（新米士官先生、零戦先生、重巡とね先生これでよかったでしょうか？）

特別編 誕生会交流編（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想よろしく願います。蒼穹の艦隊をこれからもよろしく願います。ではこの辺で・・・

第50話 珊瑚海海戦前編

5月7日

南太平洋上

現在MO攻略艦隊はポートモレスビー攻略するために南太平洋上を颯爽と進んでいた。ちなみに艦隊編成はこちら

司令官：井上成美中将

旗艦：丹波

戦艦：丹波、丹後、美作、但馬、因幡、豊前、豊後、対馬、越前、越中、越後、筑前、筑後、薩摩、大隅、肥前、肥後、石見、出雲、安芸

空母：鳳翔、龍驤、祥鳳、瑞鳳、龍鳳

重巡：青葉、衣笠、古鷹、加古、利根、筑摩、白根、三峰、高原

軽巡：長良、五十鈴、名取、由良、鬼怒、阿武隈、成瀬、綾瀬、高瀬

駆逐艦：吹雪、白雪、初雪、深雪、叢雲、東雲、薄雲、白雲、磯波、浦波、綾波、敷波、朝霧、朝月、夜月、波月、磯月、綾月、敷月、雪月

潜水艦：伊400、伊401、伊402、伊500、伊501、伊502、伊600、伊601、伊602

輸送艦：一等輸送艦10隻、二等輸送艦18隻、油槽艦8隻

強襲揚陸艦：甲100、甲101、甲102、甲103、甲104、
甲105、甲106、甲107、甲108、乙200、乙201、
乙202、乙203、乙204、乙205、

航空機：零戦六四型80機

烈風二二型70機

流星改艦攻70機

流星改艦爆70機

彩雲偵察機20機

星電偵察機20機

合計 330機

要約すると戦艦21隻、空母5隻、重巡9隻、軽巡9隻、駆逐艦20隻、潜水艦9隻、輸送艦36隻、強襲揚陸艦13隻と言う大戦力となっている。強襲揚陸艦の甲は兵員揚陸艦、乙は戦車揚陸艦の事をさしている。艦攻、艦爆が流星改なのは天山、彗星よりも高性能でありそれぞれ弱点を持っているからであるためであり天山は航続距離を伸ばすために装甲を犠牲にしておりさらに機体が左に横滑りすると性能に比べ欠陥が目立っているし彗星は事実と同じ水冷式の熱田発動機の稼働率が悪くスペック通りに性能が出せないと事実通りの欠陥が目立っているため早期に建造を中止させ欠陥が無く高性能な流星改一本で建造を始めたのである・・・おっと余談が過ぎた話を戻そう。

MO攻略艦隊旗艦丹波 艦橋

士官A

「報告します。星電3番機より敵艦隊を発見したとのことで陣容は戦艦4、空母3、重巡6、軽巡2、駆逐艦13、水上機母艦1、油槽艦2との事です」

井上

「分かった。攻撃部隊を発進するように空母に発光信号で連絡するように、その際戦艦、空母を残すように。後々もらうからな」

その後5隻の空母から高橋嚇一中佐を隊長とする零戦六四型40機、烈風二二型40機、流星改80機が出撃していった。

第17任務艦隊

第17任務艦隊は捕獲されたヨークタウン、レキシントンの代わりにワсп、レンジャーを編成させ穴埋めしていた。一応戦力を出していく。以下の通り

司令官：フランク・J・フレッチャー提督

旗艦：サラトガ

戦艦：ノースカロライナ、ワシントン、サウスダゴタ、インディアナ

空母：サラトガ、ワсп、レンジャー

重巡：アストリア、チェスター、オーストラリア、シカゴ

軽巡：ホバート、サンディエゴ

駆逐艦：フェルプス、デューウィ、ファラガット、エールウィン、

モナガン、パーキンス、ウォーク、モリス、アンダーソン、ハンマ
ン、ラッセル、シムス、ウォーデン

水上機母艦：タンジール

油槽艦：ネオシヨー、ティペカノー

航空機：F4F55機

SBD90機

TBD35機

合計 180機

このように事実とは少し違う戦力で第17任務艦隊は日本軍艦隊を
迎撃しようとしていた。

士官A

「提督、偵察機から報告です」

フレッチャー提督

「陣容は？」

士官A

「報告によりますと戦艦12、空母5、重巡12、軽巡12、駆逐
艦20、輸送艦多数です」

艦艇の数が間違っているが実際大きさを比較する対象物が無いため
大きさが分からなかったものであり決してわざとではないのである。

フレッチャー提督

「まずいな戦力比がありすぎるな・・・」

士官A

「しかし、敵艦隊は偵察機に気づいていないようです。先制攻撃を仕掛けましょう」

フレッチャー提督

「よし分かった。攻撃部隊を発進せよ」

30分後、サラトガ、ワスプ、レンジャーからF4F30機、SB D70機、TBD20機合計120機が発進していった。

その頃日本の攻撃部隊はというと

高橋

「よし報告通りの陣容だ！各機重巡以下の艦艇を狙え！」

日パイロット

『了解です！！』

そう言うのと各機が機体を翻し敵艦隊へと向かった。

第17任務艦隊旗艦サラトガ 艦橋

水兵A

「レーダーに反応！9時の方向数160！」

フレッチャー提督

「何だと！・・・対空戦闘用意！使用兵器自由！」

そう命令すると各艦艇の全火器が9時の方向に向けた。

そして・・・

水兵 B

「敵機確認！横一列に展開して向かってきます！」

高橋

「よし射程範囲に入ったぞ！一斉射撃撃てー！」

シュバババーン！シュバババーン！

翼下のランチャーから発射したのは新型の二式対艦噴進弾であり一機につき12発、160機なら1920発となっている。

水兵 B

「敵機から何かが発射されました！」

フレッチャー提督

「一斉射撃つていー！」

ドガアアアーン！ドガアアアーン！ドガアアアーン！ドガアアアーン！ガガガガガ！ドン！ドン！ドン！ドン！

士官 A

「駄目です！早すぎます！」

各艦の主砲、両用砲、高角砲、機関砲が一斉に火を噴く。

ヒュッ！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

3万2000トンのサラトガの船体が大きく揺れた。

フレッチャー提督

「被害報告急げ！」

水兵C

「報告！敵の攻撃により機首、格納庫に被弾しました！」

直後また爆発音が聞こえた。

フレッチャー提督

「今度は何だ！？」

水兵C

「重巡チェスター、シカゴ、軽巡ホバート爆沈！」

水兵D

「駆逐艦パーキンス、ハンマン、シムス、ラッセル、ウォーデン、モナガン爆沈！」

水兵B

「戦艦ノースカロライナ、ワシントンの艦橋に命中しました！」

水兵C

「サンディエゴ、サウスダゴタ、インディアナに多数命中しました！」

二式対艦噴進弾は確実に米艦艇を葬って行った。

フレッチャー提督

「消火はできているか？」

士官 A

「いいえまだです！」

ドガー——ン！ドガー——ン！

水兵 A

「機関室、格納庫に命中しました！消火不可能です！」

この報告にはフレッチャー提督も青ざめた。

フレッチャー提督

「まさか・・・日本軍にいいようにされるなんて・・・」

言葉どおりに全艦艇に少なからず命中しており爆沈する艦艇が相次いだ。

士官 A

「提督・・・」

さらに彼らにとって悪い情報が入ってきた。

水兵 B

「航空隊全滅との報告です！」

これはMO攻略艦隊の直掩機である零戦六四型、烈風二三型計120機の待ち伏せに遭い呆気なく全滅したためである。

水兵 A

「報告！て、敵艦隊が9時の方向に！」

水兵B

「敵戦艦発砲！」

シューーーーーン！バシャーーーーーン！バシャーーーーーン！バシャー
ーーーーン！

フレッチャー提督

「一発目から後弾だと！」

つまり艦艇の後方に着弾したのであり射程範囲にはいつていることになるのだ。

水兵B

「敵艦隊から発光信号！『降伏しないと徹底的に艦砲射撃で殲滅する』との事です！」

士官A

「提督……」

フレッチャー提督

「……くっ、白旗を掲げよ」

こうして第17任務艦隊は日本軍艦隊に降伏した。これがMO攻略作戦に大きな影響を与えたのは言うまでもない。

第50話 珊瑚海海戦前編（後書き）

作者

「完成しました」

暁

「合宿お疲れ」

炎龍

「お疲れな」

作者

「ああ楽しかったぜ」

暁

「お土産は？」

作者

「ほれ、みんなの分もあるぞ」

暁

「ありがとうございます」

炎龍

「ほう、なかなかいいものだな」

作者

「とにかく無事で帰還できました」

暁

「本当によかったですね」

炎龍

「ああそつだな、そろそろ次回予告を」

作者

「次回はこの続きです。次回『珊瑚海海戦中編』お楽しみに」

第51話 珊瑚海海戦中編

5月8日

第17任務艦隊を捕獲したMO攻略艦隊は第一水雷打撃艦隊を合流しポートモレスビーに向かった。

第一水雷打撃艦隊とは南雲忠一中将率いる最精鋭の水雷専用艦隊であり開戦時はラバウル、ティモール攻略に参加しており攻略に貢献していた。事実なら機動艦隊司令官となっていたが如月の後知恵で水雷畑の南雲中将には水雷専用の打撃艦隊の司令官をしてもらいたいと上層部に申し上げ結果水雷艦隊司令官となったのだ。艦隊編成はこちら

司令官：南雲忠一中将

旗艦：六角

巡洋戦艦：六角、六甲、菱田、畝傍

重巡：伊吹、吾妻、磐梯、飯豊、飯盛、姫神、蔵王、蓬萊、赤石、
安達太良

軽巡：川内、神通、那珂

駆逐艦：白露、時雨、村雨、夕立、春雨、五月雨、海風、山風、江風、涼風、霧風、雨風、渦風、霧月雨月、渦月

六角級巡洋戦艦はZ200番艦のことでありZZ計画においては存

在していなかったため予算が取れなかったためか開戦時完成に間に合わなかった巡洋戦艦である。

第一水雷打撃艦隊旗艦六角 艦橋

士官A

「長官、第一機動艦隊より電文、『我、アリューション攻撃成功セリ』との事です」

第一機動艦隊は陽動のためアリューション攻略作戦『A工作戦』の前哨戦と陽動を兼ねてアリューションを攻撃したのである。

南雲

「そうか我々もこの作戦を成功させなければな」

水兵A

「電探に反応！方向3時、距離200」

六角に搭載されている一式対空電探が敵機をとらえた。

南雲

「対空烈空弾用意」

砲術長

「宜候！・・・装填よし！」

水兵A

「電探と連動よし！」

砲術長

水兵A

「第一水雷打撃艦隊が砲撃を開始しました」

井上

「こちらも砲撃を開始せよ」

砲術長

「了解！砲撃開始撃てー！」

ドオオオーーーーン！ドオオオーーーーン！ドオオオーーーーン！

丹波、丹後、美作、但馬に搭載している41cm砲が一斉に火を噴く。

バァー——ン！バァー——ン！

続いて重巡、軽巡、駆逐艦の主砲が火を噴く。

この艦砲射撃は2時間にわたり行われた。

井上

「砲撃中止！揚陸艦は兵員と戦車を揚陸せよ！」

士官A

「了解！揚陸艦にそう連絡します」

後方に居た甲乙の揚陸艦から戦車や陸戦隊を積んだ大発が発進していく。

西

「総員よく聞け！これより我が戦車隊は上陸するであろう！しかし己の力を過信し過ぎるなよ！その驕れが自分を殺す要因になるであろう！いいかそれだけ注意すれば我ら精鋭の戦車隊なら絶対勝てる！総員生きて祖国に帰ろう！」

そう言い終わった後全員の士気が大幅に上がった。

西

「よしっ！全車両エンジンはいいな！」

全員

『はい！』

西

「砲弾はたっぷり持ってきたな！」

全員

『勿論です！』

西

「よおし！上陸開始だっ！」

そう言うで大発から勢いよく一式重戦車が出撃し橋頭保建造の守りについた。橋頭保を築いている間米軍からの攻撃もあったが一式重戦車の127mm滑空砲が敵の重機関銃や野戦砲などを破壊していき、その隙に揚陸艦と大発のピストン輸送が行われ橋頭保が完成した時には九九式重戦車25両、一式重戦車40両、九八式装甲戦闘車15両が揚陸された。

陸兵 A

「隊長、物資の揚陸が完了しました!」

西

「よし!全車両砲撃しつつ前進!」

全員

『了解!』

九九式重戦車、一式重戦車が唸りを上げながら前進していった。

陸兵 A

「前方敵戦車確認!数4」

米軍はM3軽戦車を出してきた。

西

「1号車から4号車応戦開始!」

陸兵 B

「了解です!」

陸兵 C

「砲撃準備よし!」

西

「撃てー!」

ヒューーッ!ドォン!

一式重戦車の127mm滑空砲の砲弾は正確にM3の砲塔に命中し
木端微塵にさせた。

米兵A

「何だあの戦車は!？」

米兵B

「化け物だ!？」

米指揮官

「何している!反撃だ!」

米兵A

「りよつ、了解!」

米指揮官

「ファイヤー!」

ドオーーーーーン!カキーーーーン!

米兵B

「はじかれたぞ!」

米兵A

「やっぱり化け物だ!」

当たり前のことであるが一式重戦車は未来の戦車である十式、十五
式戦車を元に開発した戦車で性能から見れば七四式戦車並のスペッ
クを誇っているのだ。

米指揮官

「じ、次弾そう・・・」

バアーーン！

指揮官の乗るM3に127mm滑空砲の砲弾が命中した。

その後、精鋭ぞろいの陸戦隊は破竹の勢いで守備隊を蹴散らしていった。そのため予想していた1週間を遙かに超える3日で陥落させた。

この情報はすぐさま大統領のもとに届いた。

5月11日（日本時間）

アメリカ合衆国　ワシントンDC

ホワイトハウス大統領執務室

補佐官

「大統領閣下、ポートモレスビーが陥落しました・・・」

ルーズベルト

「馬鹿な早すぎるぞ！守備隊は何をしていたのだ！」

補佐官

「しかし敵部隊は新型戦車を投入してきておりM3が紙くずのごとく破壊されたとの事で・・・」

ルーズベルト

「ジャップ共は戦車後退国じゃなかったのか！そんな戦車が作れるわけがない！」

マーシャル大将

「しかし大統領閣下、日本軍はノモンハン事件の時にはあのソ連軍の戦車をいとも簡単に蹴散らし、さらにはジェット機を筆頭とする数々の新兵器を投入しています。報告では10万トンクラスの戦艦、空母を保有しそれらを用いてハワイ、ミッドウェー、シンガポール、フィリピンなどの重要拠点から我が連合軍が駆逐されました」

ルーズベルト

「くっ・・・問題はジェット機に10万トンクラスの艦艇か・・・」

補佐官

「その写真があります。こちらです」

その写真には上総などが移っていた。

ルーズベルト

「3連装砲塔が6つだと！」

キング大将

「この艦は推定20万トン以上だと思われます。くやしいですが建造中のアイオワ級どこか建造を中止しましたモンタナ級をもつても勝てません」

ルーズベルト

「分かった。戦闘機に関しては資金はいくらでもあるからとにかくそれを超える戦闘機を作ってくれ。艦艇に関してはモンタナ級の建造の中止を撤回する、造船所の艦艇の早期完成を図ってくれ・・・」

マーシャル、キング二人には我々は太平洋で負け続けた。とにかくジャップ共の裏をかく作戦を立ててくれ」

二人

「了解しました！」

その後、ルーズベルトはチャーチルと会談した。航空機や艦艇の技術交流強化について・・・

性能データ

六角級巡洋戦艦

全長 290 m

全幅 37 m

基準排水量 5万3000トン

満載排水量 7万2000トン

最大速度 54ノット

航続距離 18ノットで2万4000海里

武装 60口径38cm3連装主砲4基12門

60口径20.3cm4連装副砲2基8門

50口径12.7cm3連装高角砲30基90門

62cm5連装魚雷発射管10基（内蔵式左右に5基ずつ）

40mmレーダー連動4連装機関砲60基240門

37mmレーダー連動3連装機関砲100基300門

20cm36連装噴進弾10基

6連装対潜噴進弾10基

零式垂直発射管150セル

水上機 6機

カタパルト 2基

説明

神楽級巡洋戦艦の後継艦で見た目は小型化した大和級戦艦その物であり水雷戦隊旗艦としての通信設備は万全と言っているが装甲の硬さは事実の長門級戦艦の装甲以上であるため撃たれ強い。

第51話 珊瑚海海戦中編（後書き）

作者

「完成しました」

暁

「あの〜何故畝傍が・・・」

作者

「新米士官先生の方法を用いた事で再び蘇ったんだよ」

畝傍

「呼んだか作者？」

作者

「どうだ畝傍調子は？」

畝傍

「最高だよ！ありがとう作者」

作者

「どうも。しかしあの方法使えるな」

暁

「また何か考えていますね」

炎龍

「別どうでもいいな、作者そろそろ次回予告を」

作者

「次回はこの続きです。次回『珊瑚海海戦後編と影響』お楽しみに」

第52話 珊瑚海海戦後編と影響

5月12日

MO作戦が成功した日本軍はサモア、フィジー諸島、ライン諸島を立て続けに占領。これにより太平洋からほぼ連合軍が駆逐され、ハワイ、ライン諸島、サモア、ポートモレスビーからなる豪州封鎖ラインが完成したため大英帝国連邦の一員であるオーストラリアは孤立。頼みの綱の本国はドイツ軍の上陸作戦のため救援物資が送れず、アメリカも太平洋の制海権、制空権が日本が握っているため輸送船団がおくれない状況からオーストラリアは独断で日本に降伏。

日本は条件付きで承諾した。内容は・・・

1、オーストラリアおよびニュージーランドは大英帝国連邦を脱退し中立を宣言する事。

2、オーストラリアおよびニュージーランドは戦略物資などを提供する事。

3、大日本帝国は各戦線で捕虜となったオーストラリア兵士を本国に返還する事。

4、オーストラリアおよびニュージーランド国内の米英軍の兵器を日本に譲渡する事。

このように日本軍は上陸することなくオーストラリアを屈服した。

オーストラリアが脱退した事で盟主イギリスは啞然とした。状況と

はいえ本国に相談せず勝手に降伏したのだから無理もない。

植民地であるシンガポール、マレー半島、セイロン島そしてオーストラリアを失ったかつて太陽に沈まぬ国と言われたイギリスはもはやその権威は落ちたも同然となった。

欧州前線ではドイツ軍が怒涛の勢いでバルト3国やウクライナなどソ連の重要拠点を早期に占領。事実とは違いただむやみにソ連領に乗り込まずバルト3国、ベラルーシ共和国、ウクライナなどに立てこもりつつ散発的な攻撃を行っていた。そのためスターリンの目論見であるドイツ軍が一気に領土内に攻め冬将軍が来るまで耐え続け冬将軍が到来することによる寒さで動けなくなつた所で一気にドイツ軍を殲滅するという目論見が立ち消えになった。

変わったのは東部戦線だけではなく西部戦線でも変わり始めた。イギリス本土上陸作戦『シーライオン作戦』においては事実の戦力以上の戦力を送りこんだためイギリスは本土南部をドイツ軍に占領されそこに南イングランド政権と言う親ドイツ政権が誕生した。

アメリカはイギリスに対し救援物資を積んだ輸送船団を派遣したもののドイツ海軍は早期に完成されたUボート???（21）型を使った群狼戦法や戦艦テイルピッツを導入し大西洋で通商破壊を行った。

その頃、日本は占領したフィリピン、シンガポール、インドネシアなどを独立支援する代わりに資源を提供するという条件を各国に提案しそれに各国は承諾した。早速日本は各国に零戦二一型、三二型各100機とレーダー、ソナーや海防艦などを各国に輸出し始めた。着実に大義である大東亜共栄圏が成り立ちつつある。

5月16日

呉海軍工廠

呉工廠では先のセイロン島攻略作戦とMO攻略作戦で捕獲した戦艦ノースカロライナ、ワシントン、サウスダゴタ、インディアナ、ウオースパイト、リベンジ、クイーンエリザベス、ラミリーズ、空母サラトガ、ワスプ、レンジャー、ハーミーズ、重巡コーンウェル、ドーセットシャー、軽巡サンディエゴの改装を行っていた。

第一機動艦隊旗艦上総 会議室

山本

「諸君、今回の各作戦ご苦労であつた。諸君らが頑張ってくれたおかげで我々の戦力増加の余裕ができた」

如月

「ありがとうございます長官」

山本

「うん、そう言えば次の作戦は何をするのだ？」

如月

「予定ではA工作戦を発動してアリュウシャン諸島を占領、そこを橋頭保としてアラスカに上陸作戦を行い占領してから間もなく完成します富嶽の飛行場を作りそこから米本土に対し戦略爆撃を仕掛けます」

事実ではペーパープランで終わった超重爆撃機であり、この世界では1939年から計画が始まっており早ければ試作機が今年中で完

成する予定である。

宇垣

「しかしアラスカ上陸なんて不可能じゃないのか？夏でも気温が零下を下回っているのだぞ」

如月

「アラスカ占領は無理だとしてもアリユーションからでも運用は可能な位の航続距離を誇っていますから大丈夫だと思います」

宇垣

「それなら大丈夫だが・・・」

山本

「しかし燃料は大丈夫なのか？第二独立機動艦隊はいいとしてもそのほかの艦艇を動かすと内地の貯蓄燃料が無くなってしまうのではないか？」

如月

「そこも問題ありません。大慶油田や南方からの燃料輸送のおかげで貯蓄燃料は充分にありますから」

満州に有る大慶油田は1940年に発見し連合国には極秘で掘削施設、製油施設などの施設を建設し去年の11月から生産が始まった大油田であり、燃料輸送のため満州国や旅順などの湾岸施設を拡大拡張していった。

山本

「ほう、用意がいいな」

如月

「いいえこれはすべて皆さんの協力のおかげです」

山本

「ところでA I作戦の艦隊編成だが・・・」

如月

「今回も我々だけで行かせてください」

山本

「またか・・・まあいいだろう」

如月

「ありがとうございます長官。ではこれで」

そう言うと如月は長官達に敬礼して会議室を後にした。

第52話 珊瑚海海戦後編と影響（後書き）

作者

「ひとまず完成しました」

暁

「この頃出番が無いです！」

炎龍

「まさかだとは思うが・・・忘れたってことはないよな」

作者

「そう言う事ではありませんが・・・大丈夫ですちゃんと出しますから」

暁

「それならいいんですが・・・出さないと皆で総攻撃しますよ」

作者

「それだけはやめてくれ」

暁

「ではお願いね。そろそろ次回予告をお願いします」

作者

「今回はAI作戦を行います。次回『アリユーション諸島は燃えているか』お楽しみに」

第53話 アリューシャン諸島は燃えているか

9月19日

アリューシャン沖300海里

単冠湾を出港した第二独立機動艦隊はアリューシャン諸島に向かった。ちなみにアッツ、キスカは先月に占領しそこに飛行場を建設した。

第二独立機動艦隊旗艦暁 CIC

如月

「偵察機による偵察の結果、湾内には旧式戦艦三隻、新型戦艦二隻とエセックス級空母二隻が存在しているのか」

有賀

「そうとの連絡でした」

如月

「旧式戦艦はともかくエセックスと新型戦艦は貴重だからな。できれば無傷で手に入りたいな」

有賀

「またですか、たしかにエセックス級は百機搭載が可能な空母ですが・・・」

如月

「なら問題無いじゃないか。今回はあれを使うぞ」

有賀

「あれを使うのですか！だからそのための銀河なんですね！」

如月

「そう言う事。飛鷹、隼鷹に光信号で連絡せよ」

有賀

「了解しました」

航空母艦飛鷹、隼鷹

空母飛鷹、隼鷹の飛行甲板には20機の銀河が待機していた。ちなみに飛鷹の艦長は西岡正樹大佐で、隼鷹の艦長は浅城瑠璃大佐である。浅城大佐は日本海軍初の女性艦長、女性将校であり余談だが隼鷹はほとんど女性で構成されている。

浅城

「銀河の発進準備は？」

そう言う副艦長の杉下美野里中佐は

杉下

「準備できています。それにしてもこの空母に双発機なんて」

浅城

「私も最初はそう思いましたが、あの司令官の考えを聞いた時はなるほどって思いましたから」

杉下

「同感です。では銀河部隊には出撃させます」

浅城

「全機幸運を祈る」

敬礼しながらそう呟いた。その間にもカタパルトから次々とある装備をした銀河が発進していき10分後には20機全てが出撃完了した。

その頃、アリユーション諸島ダッチハーバー

ここにはスプルーアンスを司令とするアメリカ第五艦隊が停泊していた。戦力は以下の通り

司令官：レイモンド・A・スプルーアンス中将

旗艦：インディアナポリス

戦艦：アイダホ、ニューヨーク、テキサス、マサチューセッツ、アラバマ

空母：イントレピッド、ホーネット？

重巡：ポートランド、インディアナポリス

軽巡：オマハ、ブルックリン、フィラデルフィア

駆逐艦：フレッチャー、ラドフォード、ジェンキンス、ラ・ヴァルト、ニコラス、オバノン、ベンソン、メイヨー、マディソン、ランズデル

潜水艦：アルバコア、ハーダー、ボーンフィッシュ、ダーター、カ
ヴアラ、ドラム、アーチャーフィッシュ、シーライオン、S級潜水
艦18隻

ほぼ戦力が事実とは変わっており、事実上太平洋最後の艦隊であり
その規模からは何とも寂しく感じれる。

ダッチハーバー内司令部

？

「あの大統領は何を考えているんだ！こんな戦力でどう戦えって言
うんだよ！」

そうとなり散らしているのは第五艦隊司令官のレーモンド・A・ス
プルーアンス中将である。彼の言う事は分からなくもない。なにせ
日本軍の進攻をキャッチしたスプルーアンスは増援を頼んだ。それ
でいてきたのが旧式戦艦三隻と中途半端な構想になっているエセツ
クス級二隻だけであった。そのため防ぎきれないと上層部に訴えた
所『これ以上の戦力は送れない』と返事されたためそれに怒ってい
るのである。

？

「しかし何とかしないといけないのです司令」

そう宥めるのは情報将校のレイトン中佐である。

スプルーアンス中將

「相手は負け知らずの連合艦隊だぞ！どうしろと言うのだ！」

レイトン中佐

「幸い我々には多くの潜水艦が存在します。これを用いて敵艦隊の戦力を少しでも多く削っていく作戦を取るべきとの意見です」

スプルーアンス中将

「・・・分かった。それで行こう」

その後は早かった。湾内に停泊していたS級潜水艦14隻を敵艦隊へと出撃させた。

6時間後 暁 CIC

水兵A

「！ソナーに反応！艦種S級潜水艦14！」

如月

「対潜アスロック用意！」

逢沢

「了解、アスロック装填開始！」

水兵B

「注水音確認！敵魚雷発射しました！数84！航空戦隊の方向に向かっていきます！」

如月

「まずい！CIWS撃てー！」

逢沢

「CIWS発射！」

ウィーーーーン！ズガガガガッ！

水兵 A

「駄目です！数 7 6！ほとんど抜かれました！」

如月

「くっ！あとは航空戦隊に任せるしかないか」

魚雷向かうの報告を受け各航空戦隊の空母は自由回避を取り始め何とか避けれたものの残り数発が第十四航空戦隊へと向かった。

空母隼鷹 艦橋

女性水兵 A

「左三度魚雷二！距離 4 3 0 0！」

杉下

「艦長このままでは！」

隼鷹

「いやだっ！まだ死にたくない！」

浅城

「（どうする、どうする私。何かいい方法が・・・ある）、高角砲用意！弾種近接信管付き砲弾！距離 2 0 0 0 になったら発射！」

杉下

「えっ・・・はい！高角砲用意！弾種近接信管付き砲弾！距離 2 0 0 0 で発射！」

ウィーーーーーン！ガッコン！

女性水兵A

「距離2200・・・2100・・・2000！」

浅城

「高角砲一斉射！」

ドン！ドン！ドン！バシャーーーーーン！バシャーーーーーン！

魚雷に向けて放たれた近接信管付き砲弾は魚雷を探知し爆発。その爆風や破片で魚雷が誘爆を引き起こした。

女性水兵A

「魚雷爆散確認！回避成功です！」

杉下

「た、助かった」

浅城

「よかった、よかった」

バシャーーーーーン！バシャーーーーーン！バシャーーーーーン！

女性水兵B

「旗艦より連絡！『我潜水艦群殲滅セリ』との事です！」

杉下

「艦長これで潜水艦の脅威は去りました」

浅城

「そのようなね・・・あとは銀河部隊だけね」

その頃飛鷹、隼鷹から発進したある装備をした銀河部隊はレーダーに引つ掛かることなく無事ダツチハーバー上空へとたどり着けた。なぜレーダーが探知しなかったか。それは銀河の塗料にはレーダー波を吸収する特殊塗料を塗っておいたためレーダーには映らずにたどり着けたのだ。ちなみに隊長は陸軍から海軍へ所属を変更した迅雷部隊隊長の野中五郎少佐である。

野中

「よし野郎共、目標が見えてきたぜ。必殺弾頭用意！」

隊員

『委細承知！』

そして・・・

野中

「必殺弾頭発射！！」

カチッ！パツ！シューーーーーン！

野中少佐の銀河から必殺弾頭『桜花』が発射された。無論有人特攻機ではなく赤外線とレーダーによる誘導システムを搭載した誘導弾であり弾頭には2トン（事実上1.2トン）徹甲爆弾を搭載しロケット推進により時速800km/hで停泊していた戦艦、空母に次々と命中し銀河部隊は颯爽と戻って行った。この様子を見た野中少佐は

野中

「この槍、使いやすしだぜ！」

戦艦暁 C I C

桜井

「艦長、銀河部隊が戻ってきました。無傷です」

有賀

「迅雷部隊より打電です。『停泊中の全艦艇に命中確認、内戦艦、空母2隻ずつ横転を確認』以上です」

如月

「ほう、さすがは迅雷部隊だな。悪いが海軍に工作艦を派遣してくれと連絡してくれ」

桜井

「了解しました」

如月

「さてこの後はどう出てくるか楽しみだな。全艦隊最大戦速」

こうしてとどめ(?)を刺すべく第二独立機動艦隊はダッチハーバーへと向かった。

第53話 アリユーション諸島は燃えているか（後書き）

作者

「完成です」

暁

「作者殿、明らかに潜水艦は故意にやりましたね」

炎龍

「どれどれアルバコア、ハーダー、ドラム、アーチャーフィッシュ・
・・ 確実犯だな」

雷龍

「それにマサチューセッツ、アラバマ、イントレビット、ホーネット？もだな」

作者

「一応竣工していますのであり得ないとは言えませんが」

暁

「それと桜花ですが中途半端な空母ならともかく戦艦ですか」

作者

「桜花の2トン徹甲爆弾ならいくら戦艦でも当たり所悪ければそう
なりますよ」

炎龍

「それはそうと、次回予告をよろしく」

作者

「次回はアリユーション諸島を占領します。次回『崩壊の太平洋艦隊』ご期待ください」

第54話 崩壊の太平洋艦隊

9月20日

アリユーション諸島ダッチハーバー

昨日の桜花による攻撃で戦艦ニューヨーク、テキサス、空母イントレビット、ホーネット？が横転し他の艦艇にも少なからずダメージを与えておりさらには潜水艦ドックが塞がれ潜水艦の出撃が不可能に状態になっていた。この様子をスプルーアンス中將は呆然として見ていたもののすぐに情報將校のレイトン中佐に

スプルーアンス中將

「レイトン中佐、今出せる艦艇はどれくらいだ」

レイトン中佐

「現在出せますのは戦艦アイダホ、マサチューセッツ、アラバマ、重巡は両方ともで軽巡はオマハ以外なら駆逐艦はニコラス、マディソン、ベンソン、メイヨー以外です。潜水艦はドックがふさがれていますので使用不可能です」

スプルーアンス中將

「では私はインディアナポリスに乗艦して出撃する。全艦隊抜錨急げ」

レイトン中佐

「アイアイサー！」

1時間後残った艦艇はすべてダッチハーバーから出港した。

第二独立機動艦隊旗艦暁 C I C

桜井

「艦長、偵察に出ていた星電より報告、ダッチハーバーから戦艦三を含む艦隊が出港したとの事です」

如月

「そうか・・・なら艦隊戦を行う」

有賀

「本当ですか？」

如月

「本当だ」

森下（飛）

「操艦なら任せて」

逢沢

「砲撃なら任せてよ」

如月

「さて最後の艦隊はどう来るか見極めさせてもらおう」

アリューシャン近海

第五艦隊旗艦インディアナポリス 艦橋

水兵 A

「敵艦隊視認！戦艦6いや12？後ろにもまだいます！？」

スプルーアンス中将

「馬鹿な戦艦が12以上だと！」

この報告にスプルーアンス中将は呆然とするもののすぐに

スプルーアンス中将

「くっ、差し押さえてでも一隻は沈めてやる！全艦隊砲撃用意！」

米砲術長

「え、あっはい、砲撃戦用意！」

戦艦暁 CIC

桜井

「敵艦隊針路変更！第四戦隊以下の戦隊に艦首を向けました！」

如月

「まずいぞ！取り舵一杯急げ！」

森下（飛）

「宜候！取り舵一杯！機関最大！」

如月

「間に合ってくれよ」

重巡インディアナポリス 艦橋

水兵A

「敵戦艦かくに・・・嘘だ！」

士官A

「どうした一体！」

水兵A

「あれコロラドじゃないのですか!？」

士官A

「まさか・・・本当だ!コロラドだけじゃない!少し変わっているがテネシーやワイオミングなどが確認できます司令!」

艦長

「日本軍め!我々の艦艇を勝手に使いやがって!」

スプルーアンス中将

「アイダホ、マサチューセッツ、アラバマで敵戦艦を砲撃せよ」

インディアナポリスの防空指揮所に一人の少女がいた。もちろんインディアナポリスの艦魂である。

インディアナポリス

「卑劣なジャップ共!私達の戦艦を使って!散りなさい裏切り者!」

ドオオーーーーン!ドオオーーーーン!ドオオーーーーン!

前方に進んでいた戦艦三隻から主砲が発射された。

戦艦越前 艦橋

水兵 A

「敵戦艦発砲！」

？

「取り舵一杯！最大戦速！」

今喋ったのは戦艦越前の艦長の島崎武継大佐である。しまさきたけつぐ

副長

「ようこそ！」

ヒューーン！バシャーーン！バシャーーン！

水兵 A

「敵砲弾夾叉！」

島崎

「やられっぱなしはしょうに合わないんでね！目標敵戦艦艦橋！主砲撃で！」

砲術長

「主砲発射！」

ズドオオーーーーン！ズドオオーーーーン！

越前の41cm主砲12門を皮切りに後方に居た越中、越後も主砲を発射しそのうち数発が敵戦艦の艦橋に命中した。

水兵 A

「敵戦艦艦橋に命中確認！」

水兵B

「敵戦艦速度低下！」

島崎

「やったぜ！命中だ！」

越前

「そうですね艦長」

そう言うものの越前の心の中は複雑になっていた。踏ん切りを付けても元はアメリカ海軍の戦艦の艦魂であり素直には喜べなかった。そんな気持ちもあったが頭を横に振ってその考えをなくし被弾した戦艦を見つめた。

戦艦マサチューセッツ 艦橋

その頃、マサチューセッツでは大変なことになっていた。敵戦艦の主砲が艦橋に命中し艦長以下艦橋に居た者は全員戦死しさらに命中した際の爆風で前2基の主砲の砲身が爆風や破片により折れ曲がり使えなくなったのだ。他にも越中、越後の主砲弾が姉妹艦のアラバマに数発命中し同じような状態になっていた。

インディアナポリス

「くっ、裏切り者のくせに！」

思わず愚痴をこぼしてしまう。そんな彼女が青ざめる状況になるきっかけが起こった。それは前を航行していたアイダホがどこからか来たのか分からない青白い光が数発船体中央に命中したかと思うと船体中央から大爆発を引き起こし船体をくの字に曲げながら沈んで

いった。

インディアナポリス

「何だ今のは！？どこから！」

そう言いながら周りを見回すと何と何時からいたのか敵艦隊が自分達を包囲している状態になっておりさらには自分達に主砲を向けていた。そんな時敵艦隊から

水兵A

「敵戦艦より発光信号『降伏せよ、さもなくば殲滅あるのみ』です」

レイトン中佐

「司令どうしましょう・・・」

スプルーアンス中將は考えた。もしここで提案を飲まなかったら大量の主砲弾を浴びてしまう。そんな事が起きれば乗組員は無駄死になっってしまう。しかし降伏と言うのは・・・しばらく考えた結果

スプルーアンス中將

「・・・敵戦艦に発光信号『我降伏を受け入れる。部下達の安全を約束してくれ』と・・・」

レイトン中佐

「司令・・・」

スプルーアンス中將

「ふっ、私の海軍人生は終わったな・・・」

インディアナポリス

「嘘だ、我々が降伏だと・・・」

発光信号を受けたのか包囲していた戦艦は向けていた主砲を戻し、一隻の戦艦がスプルーアンス中將が乗艦しているインディアナポリスに向かい左舷に着いた。

水兵C

「司令、敵司令官から無線で話したいと」

そう言つて無線を渡した。

スプルーアンス中將

「私はアメリカ海軍第五艦隊司令長官のレイモンド・A・スプルーアンス中將である」

如月

「スプルーアンス中將ですね。私は第二独立機動艦隊司令長官如月大悟大將である」

スプルーアンス中將

「えっ・・・」

スプルーアンス中將は驚いた。実はアメリカ海軍内ではある噂が広まっているのであった。それはハワイ、ミッドウェー、セイロンなどを焼き払い、あのハルゼー艦隊や英仏東洋連合艦隊、ドゥーリットル攻撃隊を撃破した恐るべき艦隊が存在していると。生き残りの兵士の証言ではとにかく勝てなかったと言われたまったくの正体不明の艦隊が今自分達の目の前に居るといふ事実には驚いた。

如月

「どうしました？」

スプルーアンス中将

「あっ、いや少し考え事をしていただけだ。それよりも部下の命の安全を約束してもらいたい」

如月

「それは了承しております。長官達には湾内に残っています輸送船で本国に帰ってもらいます。我々は決して後ろから撃つ真似はしません」

スプルーアンス中将

「・・・分かった。総員退艦」

こうしてアメリカが保有する太平洋上の艦隊は全滅もしくは降伏し太平洋の制海権、制空権は完全に日本軍が握る事となった。第五艦隊を失った事を知ったアリューシャン諸島の防衛部隊は上陸部隊が上陸するや否や白旗を掲げ降伏した。そんな中第二独立機動艦隊に向かつて来る影があるとはこの時点では誰も知らなかった。

第54話 崩壊の太平洋艦隊（後書き）

作者

「またまた投稿しました」

暁

「これもなんか呆気ない終わり方ですね」

炎龍

「それよりも何だ最後のは？」

作者

「それを言ったらつまらなくなるだろ。次回までのお楽しみって奴」

暁

「それならそうといいのですが・・・そろそろ次回予告を」

作者

「さて次回は第二独立機動艦隊が襲撃されます。次回『米海兵隊の意地』ご期待ください」

第55話 米海兵隊の意地

9月21日

とある海域の上空に大規模の航空隊が編隊を組んで飛行していた。勿論大日本帝国軍の航空隊では無くアメリカ軍の航空隊である。その数は400機におよび編隊の中には新型機が含まれておりF4U コルセア、F6F ヘルキャット、TBFAヴェンジャーなどで編成されており特にF4U コルセアはあの第214海兵戦闘航空隊、通称『ブラック・シープ』が運用しており事実では零戦キラー部隊として勇名であり特別任務と言う事で編入されていたのだ。彼らはアラスカにある飛行場からやってきておりまだ遠くに入っていない敵艦隊を沈めるべく上空を飛んでいた。

米パイロットA

「今日こそは零戦ジークや烈風サムを撃ち落としてやる！」

米パイロットB

「このF4Uこそ最強の戦闘機だ！ジークなんて軽く撃ち落としてやるぜ！」

とまあそんな事を言いながら飛行していきそして・・・

米航空隊隊長

「見つけたぞ！ウェーキ（航海するときに見える波）だ！あれをたどれば敵艦隊だ！それで沈めれば俺達は英雄だ！全機俺についてこい！」

そう言うのと機体を翻し敵艦隊へと向かった。

第二独立機動艦隊旗艦暁 C I C

如月

「各艦隊に告ぐ、我々の任務はダッチハーバーに横転している艦艇のサルベージのための工作艦明石、早柄、未来の護衛である。この一隻のどこかでも損傷を受ければそれだけサルベージの時間が長くなってしまう。そのため何としてでも工作艦を守らなければならないのだ。各艦隊の健闘を祈る」

そう言うとき各艦艇に通じる無線のスイッチを切った。ちなみに捕獲した艦艇は単冠湾ひとかっぱわんに向かわせており、その護衛として多少の艦艇を引っこ抜いたもののまだ第二独立機動艦隊は二個艦隊並の戦力を保有している。

如月

「このまま何事なく進んでほしいがな」

有賀

「まったくです艦長」

そんな空気がC I C内に流れていたがその流れを断つ報告が入った。

桜井

「！リーダーに反応！敵航空隊接近！方向三時！数400！」

如月

「数400だと！航空戦隊に制空戦闘機を上げるように発光信号で連絡しろ！それともしものために対空戦闘用意も追加で！」

水兵A

「は、はい！」

発光信号を受け各航空戦隊の空母から零戦六四型、烈風二二型、紫電改、そして新型機である陣風が次々とカタパルトで発進していく。さらに各艦艇の対空火器が敵編隊がいる方向三時に向けられていった。

如月

「シースパロー用意！ハイマット・フルバーストシステムスタンバイ！」

逢沢

「了解！シースパロー装填開始！ハイマットフルバーストシステムロックオン開始！」

そつ喋りながらシステムを立ち上げていく。モニターには敵の進路を示す赤い線、位置を示す赤い点と味方の進路を示す青い線、位置を示す青い点が輝いておりその赤い点に次々とロックオンと言う文字が出てきたかと言うとロックオンされハイマット・フルバーストシステムが狙える200機全てをロックオンした。

逢沢

「シースパロー装填完了！システムロックオン完了！敵航空隊との距離34000m（34km）！」

如月

「敵との距離20000m（20km）で発射せよ！」

逢沢

「了解！20000mに到達するまで待機します！」

如月

「制空戦闘機はどうなっている？」

桜井

「現在打ち上がっている数は80機です。以前打ち上がっておりシースパロー発射後ですと数はおよそ250機は行きます」

如月

「それならいいんだが・・・」

そう呟きながら今もお発進していく航空隊を見つめていた。

空母隼鷹 飛行甲板

隼鷹の飛行甲板には大和撫子航空隊が運用する紫電改と陣風（烈風から更新した）が並べられており次々とカタパルトにセットされ機体は勢いよく出撃していく。

その様子を防空指揮所で見ていた隼鷹は敬礼しながら見送る。

隼鷹

「皆無事で帰ってきて・・・」

彼女の見つめる先には尾翼に百合の花とクロスになっている雷のマーク・・・大和撫子航空隊長である笹原美樹大佐（先月昇進した）の機体がありカタパルトにセットされ勢いよく発進していった。ちなみにだが彼女は今まででノモンハン事件の時を入れると実に100機以上は打ち落としており正確無比な射撃と天性的な勘をフルに

活用し米軍機を次々と落としていく様はアメリカ軍からは恐れられ
『天空の戦姫』^{てんくう せんき}と言う異名で呼ばれている。彼女の機体には普通の
紫電改とは違い武装は機首13mm機関銃2門（ベルト装填式35
0発）、翼内30mm機関砲6門（ベルト装填式175発）と大火
力となっている。普通の紫電改なら機首13mm機関銃2門ベルト
装填式350発、翼内25mm機関砲6門ベルト装填式175発で
ある・・・おっと余談が過ぎたな、話を戻そう。

戦艦暁 CIC

桜井

「敵航空隊との距離20000を切りました！」

如月

「よしシースパロー一斉発射！」

逢沢

「シースパロー発射！」

シューシューシューシューシューシューシューシューシューシュー！

専用の発射機から200発のシースパロー、200本の矢がロック
オンした敵航空隊に向けられ今放たれ目前を飛行していた敵航空隊
に次々と命中し撃ち落として行く。特に海兵隊仕様のSBDドーン
トレスを中心に狙っていたためドーントレスの大半は打ち落とされ
た。

その様子を飛行していた笹原大佐は

笹原

「なに今の！？敵編隊が一度に・・・はっ！ぜっ全機今だ！敵は浮足立っているぞ！このチャンスを見逃すな！」

女性航空隊員

『了解です隊長！！』

笹原

「では皆行くぞ！」

そう言うと彼女の機体は浮足立った敵編隊に機関砲を撃ちながら突っ込んでいく。

米パイロットA

「何だ今のは！？」

米パイロットB

「ドーン！トレスが・・・」

米パイロットC

「隊長！前方に敵部隊が！？ぐあっ！」

チュドーーーーン！ブオオオーーーーン！

米パイロットD

「あ、あれは！尾翼に百合の花とクロスしている雷のマーク・・・
奴だ！天空の戦姫だ！？に、逃げろー！！」

一撃で離脱した機体の尾翼を見、敵のエースだとわかると恐怖になり元来た航路を引き返していく。

米航空隊隊長

「馬鹿野郎！逃げるな！敵前逃亡は重罪だぞ！」

経験豊富な隊長が無線で呼び掛けるものの脳内を恐怖で支配された全く修羅場を見ていない新米パイロット達は一斉に降下したため自分達から零戦、烈風が最も得意とする格闘戦に引きずり込まれ低空戦闘が苦手なF4Uコルセアはまるで的のようにされ次々と撃ち落とされていく。また鉄工所のあだ名を持つF6Fも紫電改の25mm機関砲には敵わずある機体は機関砲で翼をへし折られ、ある機体は機関砲で機体をハチの巣にされると一方的な戦闘になりそうだった。しかしどんなに航空隊が頑張ってもほんの一部の機体は零戦、烈風達の防空網を逃げ敵艦隊に向かっていった。そこで見た者は輪形陣を組み迎撃態勢を整えさせていた敵の機動艦隊であり自分達を見つけた瞬間凄まじい対空砲火を浴びさせられた。

米パイロットA

「シット！何だこの弾幕は！？」

彼らはいまだかつてない日本機動艦隊の対空砲火の激しさに驚愕した。

各艦艇から40mm、37mm、30mm、25mm機関砲、50口径12.7cm3連装高角砲、20cm36連装噴進弾がまるで雨あられの様に敵航空隊に浴びせかけて行つた。ここで対空火器について簡単に説明しよう。各艦艇に装備されている機銃座はレーダー連動による自動旋回式で弾丸の装填方式はベルト方式で機銃座の下の機銃弾倉庫から自動的に装填されるためこれまでの弾倉式よりもはるかに簡単であり機銃座には100mmシールドが備え付けられておりこれまでの敵の機銃でやられるという事は少なくなっていた。高角砲は50口径と言う長砲身により射撃時の安定性や自動

装填による速射性の向上そして近接信管付きの砲弾により命中率が格段に上がっており噴進弾にも自動装填や簡易ながらの近接信管が含まれているので噴進弾の命中率は高角砲と同じで格段に上がったのだ。

そのおかげか休みの無い弾幕に制空戦闘機部隊の攻撃から運良く潜り抜けて行った航空機は先ほどの航空隊のように八子の巣にされ鉋揉みしながら海に激突し海の藻屑となって行った。

そんな中、僚機が次々と撃ち落とされていくのを経験豊富な隊長は咄然と見ていた。エースの集団であるブラック・シープは自分を残し全滅してしまった。そんな彼はある決意し機体をフルに稼働させ一隻の空母・・・隼鷹に狙いをつけ急降下していった。そう彼は禁忌である特攻をしようとしていた。その様子を一瞬で看破した艦長の浅城大佐は

浅城

「まさか本当に特攻を行おうなんて！取り舵一杯！バス・スラストー起動！最大戦速！」

隼鷹は取り舵とバス・スラストーによって急激に方向を変える事に成功しさらに今まさに突っ込もうとしていた機体に機銃が当たったのか翼から火が噴いた。それでも彼はエースの意地と執念とプライドで機体を操作しまだ特攻を諦めていなかった。そして・・・

米航空隊隊長

「くっ！くたばれジャップ！我が祖国アメリカ合衆国に栄光あれっ
！！」

隼鷹

「こ、来ないでーっ!!」

それはまるでスローモーションのように見えた。隼鷹の放った噴進弾が彼の機体に数発命中し火だるまになりそして彼の機体は海面に激突し彼はその人生を終えた。

隼鷹

「はあっ、はあっ、はあっ、助かった・・・」

飛鷹

「隼鷹大丈夫？」

妹を心配してか姉の飛鷹が隼鷹のいる防空指揮所に転移してきた。

隼鷹

「お、お姉ちゃん・・・うわーっ！怖かったよ!!」

彼女は姉である飛鷹を見た瞬間、飛鷹の胸の中で思いっきり泣いた。

飛鷹

「大丈夫。もう怖くないよ安心して隼鷹」

隼鷹

「ひっぐ、本当？」

飛鷹

「大丈夫よ。あなたのお兄さんがそうさせているよ」

隼鷹

「大悟お兄ちゃんが？」

飛鷹

「そうよ必ず。だから泣きやんで」

隼鷹

「うん、分かった・・・」

隼鷹が泣きやむ頃には敵の航空隊は制空戦闘機や対空砲火によって全滅し第二独立機動艦隊は目的の3隻の工作艦の護衛に成功しダッチハーバーでのサルベージはきわめて順調に行われていき予定していた期間よりも早くサルベージが完了し簡易的な修理の後に日本本土へと曳航した。

そんな状態の中ヨーロッパのとある国ではある工作を行っていた。その工作は後に世界を驚かせる出来事となった。

第55話 米海兵隊の意地（後書き）

作者

「今回は凄まじかったな」

暁

「・・・・・・・・・・」

炎龍

「作者よ、いくらなんでも特攻という意見は・・・」

作者

「大丈夫だ、問題無い」

隼鷹

「作者の艦魂殺し!!」

飛鷹

「全くだ。妹に恐ろしい目にあわせて」

作者

「しょうがない事ですよ、あれでもしないと本当のチートになってしまっんですよ本当に」

炎龍

「確かにこのままピンチが全く無い艦隊なんてチート同然だな」

隼鷹

「だからって」

作者

「とにかく隼鷹、あんな目に遭わせてごめん。こんな作者を許してくれ」

隼鷹

「・・・いいよ今回だけ許してあげる。もうあんな目に遭わせないでください」

作者

「ありがとう隼鷹、それより次回は何とあのイギリスと同盟します。次回『第二次日英同盟結成セリ』ご期待ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5339p/>

蒼穹の艦隊～第二独立機動艦隊出撃せよ～

2011年4月12日16時08分発行